平岡遺跡群発掘調査報告書

1992年9月

大野原町教育委員会

発刊にあたって

このたび平岡遺跡の発掘調査の報告書を刊行いたしました。今回の発掘調査は、町内丸井平岡地区に農村総合整備モデル事業で土地基盤の整備を施行するにあたり、事業開始に先立って、古墳の調査が行われたものであります。

このたびの調査区は、非常に広範囲に亘っており、発掘した古墳は７基、竪穴住居址12棟、掘立柱建物址56棟を数えており、出土遺物の数も多数であります。とりわけ弥生時代の集落址を発掘したことは町内最古の遺跡と考えられ、文化財の歴史に新たな１ページを加えたことになります。

私どもは、今回発掘した遺物を、出来る限り復元し、大切に保管して、後世に伝えるとともに、先人達の創った文化に学び町発展の活力にしたいと考えております。

最後に、本発掘調査にあたり、ご指導いただきました県教育委員会並びに地権者の方々に厚く御礼を申しあげてあいさつといたします。

平成４年９月１日

大野原町長　薦田良知

はじめに

郷土に残されている文化財は、郷土の先人達が残した貴重な文化遺産であります。これら文化財を大切に保護し、文化財に学んで、新しい文化を創造することは、現代に生きる私達の責務であります。

このたび、大野原町による平成元年度事業の一貫として丸井平岡一帯が農村総合整備モデル事業の対象地となり、事業計画がすすめられました。

この台地は阿讃山脈から派生した尾根の一支脈の先端部に位置し、丘陵部には、巨石が露出していて、土地の住民は長らく謎の巨石と呼んでいました。

町教育委員会では、県教育委員会文化行政課のご指導とご援助を得て、平成元年12月15日より予備調査を実施し、古墳数基、住居址、柱穴多数を検出しました。この予備調査により大規模調査の必要なことが判明し、平成2年1月より約10ケ月間、本調査をすすめてまいりました。調査区一帯は柿畠やみかん畠に開墾されていて、遺構の殆んどが破壊されていましたが、竪穴住居址12棟、堀立柱建物址56棟、土壙墓1基、古墳7基を確認し、その他多数の遺物を検出することが出来て本町の文化財の歴史に新たな1ページを加えることが出来ました。

最後になりましたが、今回の発掘調査に当たって、終始熱心に指導賜りました片桐節子先生はじめ、ご協力いただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年9月1日

大野原町教育委員会　教育長　藤川美男

例　　言

1．本書は、香川県三豊郡大野原町丸井平岡に所在する平岡遺跡の発掘調査の概要である。

2．発掘調査は、大野原町教育委員会が調査主体となり香川県教育委員会の指導のもと、平成元年12月15日～平成２年10月29日の日程で実施した。

調査担当　　片桐節子

大野原町文化財保護協会

真鍋和三

事務局　大野原町教育委員会事務局

教育長　藤川美男

教育課長　三好治夫　石川毅（転出）

蔵田力（転出）

課長補佐　久保弘司　高橋剛徳（転出）

発掘作業協力者

合田春雄　岡田恒夫　白川義夫　牧野義高

中塚則重　真鍋三二　大西節　高橋シゲ子

井上シズ子　山田恒男（重機等）

3．調査前及び発掘時の地形測量、調査区画設定は、有限会社片山設計に委託した。

4．本書挿図中のレベル高はすべて海抜を表わす。

また方位は、真北を示す。

5．本書の執筆、編集は片桐が担当した。

6．本書に使用した遺構・出土遺物の実測図は、大野原町教育委員会において保管している。

7．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。

(1)　挿図の縮尺は、掲載の図面内にスケールで示した。

(2)　方位は、国土座標第Ⅳ座標系の北を示す。

(3)　水平基準線の数値は、海抜高を示している。

8．本書内で用いている（　）内の数値は推定値である。

9．本書の作製にあたっては以下の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

真鍋昌宏　國木健二　片桐孝浩

10．本書で用いている遺構記号は以下の通りである。

ＳＨ	竪穴住居址	ＳＢ	掘立柱建物址
ＳＴ	土壙墓	ＳＤ	溝状遺構

目　　次

第１章　地理的環境と歴史的環境 …… 1
　地理的環境 …… 1
　歴史的環境 …… 1
第２章　調査に至る経緯とその方法と結果 …… 5
　調査の方法 …… 6
　調査の結果 …… 6
第３章　調査の結果 …… 9
　１．Ⅰ区 …… 9
　　２号墳 …… 9
　２．Ⅱ区 …… 14
　　３号墳 …… 14
　　４号墳 …… 19
　　６号墳 …… 23
　　SH03 …… 25
　　SB01，SB02，SB03 …… 26
　　SB04 …… 27
　　Ⅱ区内出土石器 …… 29
　３．Ⅲ区 …… 31
　　５号墳 …… 31
　　７号墳 …… 35
　　SH04 …… 36
　　SB05，SB06 …… 37
　　SB07 …… 38
　　SB08，SB09 …… 40
　　SB10 …… 41
　　SB11 …… 42
　　ST01 …… 43
　　土器集中地点 …… 44
　　Ⅲ区内Ｐ－出土土器 …… 45
　　Ⅲ区内包含層出土土器 …… 45
　４．Ⅳ区 …… 47
　　SB12，SB13 …… 47
　　SB14 …… 48
　　SB15，SB16 …… 49
　　SB17，SB18 …… 50
　　Ⅳ区内Ｐ－出土土器・石器 …… 51
　　Ⅳ区内出土石器 …… 51

5．V区 …… 53
SH01・02 …… 53
SH05・06・07 …… 57
SH08 …… 61
SH11 …… 63
SB19，SB20 …… 64
SB21，SB55 …… 65
SB56 …… 66
SB22 …… 67
SB23，SB24 …… 68
SB25，SB26 …… 69
SB27 …… 70
SB28 …… 71
V区内Ｐ－出土土器・石器 …… 71
V区内出土土器・石器 …… 73
6．VI区 …… 76
1号墳 …… 76
SH09 …… 86
SH10 …… 87
SH12 …… 88
SB29，SB30 …… 91
SB31，SB32 …… 92
SB33，SB34 …… 93
SB35，SB36 …… 94
SB37 …… 95
SB38，SB39 …… 96
SB40，SB41，SB42 …… 97
SB43，SB44 …… 99
SB45，SB46 …… 100
SB47，SB48 …… 101
SB49，SB50，SB51 …… 102
SB52 …… 103
SB53，SB54 …… 104
VI区内Ｐ－出土遺物 …… 105
VI区内出土表採資料 …… 106
7．包含層出土及び採集土器・石器 …… 108
第4章　まとめ …… 110
土器・石器観察表 …… 112
図版 …… 125

第１章　地理的環境と歴史的環境

地理的環境

香川県三豊郡大野原町は香川県の西部に位置し、西は三豊郡豊浜町に、北・東は観音寺市に接し、南には阿讃山脈が聳え徳島県に至る。

第１図　大野原町位置図

阿讃山脈に源を発する柞田川は大野原町の山間部で塞き止められて豊稔池・井関池を造り、平野部に至って北上し町域を外れて流れを西にとり、瀬戸内海・燧灘に注ぎ出る。この柞田川は町域を山間部と平野部に分断するように流れており、三豊平野は観音寺市・三豊郡豊中町・三野町・高瀬町・山本町・大野原町・豊浜町にかけて拡がる。

今回調査した平岡遺跡は阿讃山脈から派生した尾根の一支脈上に位置し、眼下に三豊平野・燧灘を一望し、晴天時には遠く荘内半島の紫雲出山をも望むことができる。

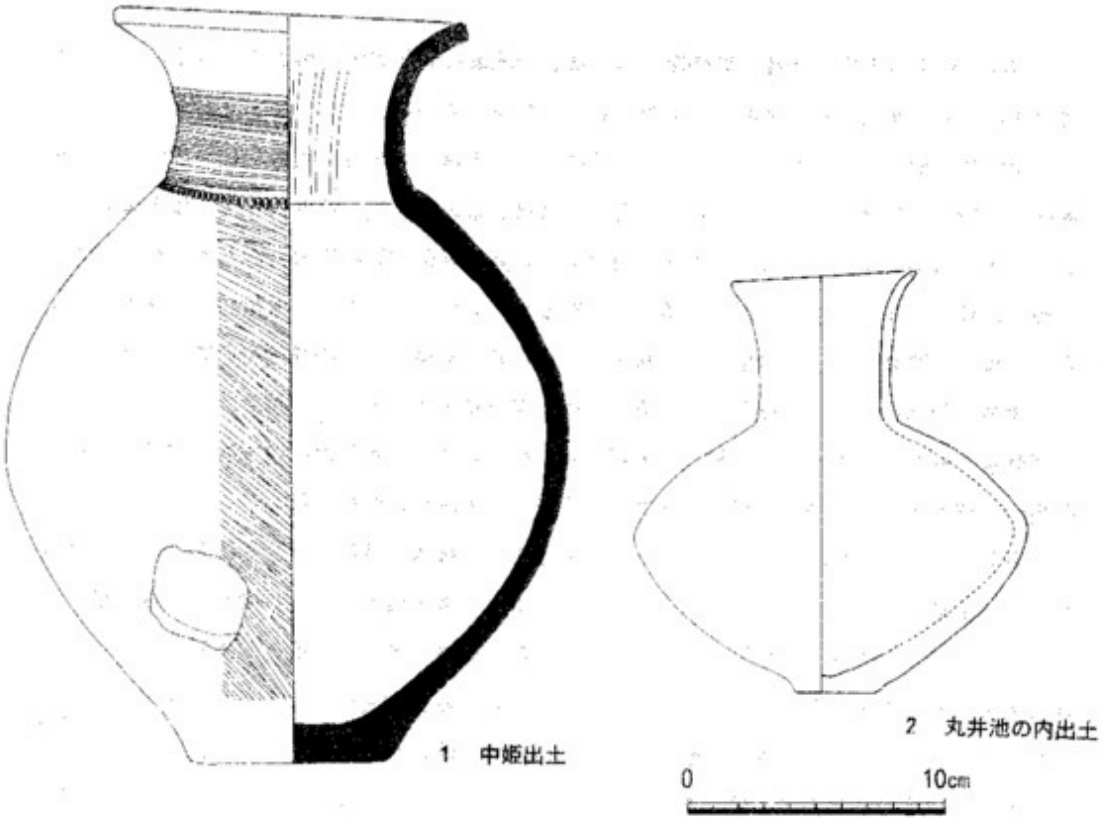
町域の海岸寄りを国道11号線がほぼ南北に走り、それと平行して昭和63年開通した香川県初の高速道路四国横断自動車道が走る。

歴史的環境

大野原町では現在のところ旧石器時代・縄文時代の遺跡・遺物は確認されていない。

三豊平野を北流する財田川下流域にある観音寺市一の谷遺跡群で国府型ナイフ形石器・宮山型ナイフ形石器が確認されているが、両者とも流れ込みと考えられている。

縄文時代の遺跡は荘内半島及び周辺の島嶼部で多く知られており、西接する豊浜町では縄文時



第２図　大野原町中姫・丸井池の内出土の弥生土器

代前期と思われる院内遺跡が知られている。

弥生時代になって町内にも遺跡が知られるようになる。

大野原町中姫では弥生時代前期末と考えられる壺が１点出土している。また、同町丸井池の内でも後期と思われる壺が１点出土しているが、いずれも遺構は検出されておらず、遺跡の実態は不明である。

今回調査した平岡遺跡は弥生時代中期後半の集落址で、現在のところ町内最古の遺跡と考えられる。

三豊平野は香川県における弥生文化の第一歩が記された地であるが、中期に至っては高地性集落で著名な紫雲出山遺跡以外は調査されておらず、三豊郡豊中町岡本遺跡・同郡山本町高額遺跡・同町三谷遺跡・同郡財田町吉田遺跡・観音寺市岩鍛遺跡が知られているが吉田遺跡で住居址が１棟確認された以外は遺物の散布が知られるのみで遺跡の実態は不明である。

弥生時代後期は観音寺市の一の谷遺跡群・同市向井・西の岡遺跡・三豊郡豊中町延命遺跡が知られている。

古墳時代前期は財田川下流に鹿隈鑓子塚古墳、中流域に知行寺山古墳が知られる。いずれも前代の葬法である箱式石棺の系譜を引く竪穴式石室を持っている。

古墳時代中期になると財田川河口に近い位置に丸山古墳、中流域に青塚古墳、柞田川中流域に赤岡山古墳群3号墳が築造されている。丸山古墳は2基の竪穴式石室を持った円墳と考えられており、青塚古墳は帆立て貝式の前方後円墳である。共に阿蘇溶結凝灰岩製の石棺を持つ。赤岡山古墳群は独立丘陵上に造営された古墳群で20数基が知られていたが、3号墳以外は後期の古墳である。現在は開発され、3号墳のみが残る。これは葺石を持った三段築成の円墳で径24mを計る。

古墳時代後期になると三豊郡内では爆発的に古墳が築造されるようになる。

50数基で構成する観音寺市母神山古墳群をはじめとして、三豊郡財田町吉田古墳群・同郡山本町裏山古墳群・向山古墳群・河内古墳群・蒼生神社古墳群などが知られる。

大野原町では、昭和60年～62年にわたって調査された縁塚古墳群をはじめとして、今回調査した平岡古墳群・墳穴塚古墳・小森塚古墳・道下古墳・宗像古墳・赤岡山古墳群・王塚古墳・豆塚古墳群・雨の宮古墳等多くが知られ、また、県下最大規模を誇り巨石墳として知られている椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳が存在するなど町内における古墳文化には注目すべき点が多く認められる。なお、同時代の集落址は観音寺市長砂古遺跡で確認されているのみである。

古墳時代が終わりを告げる頃、各地で寺院が造営されるようになる。

大野原町でも青岡（安井）廃寺から平安時代初頭頃の瓦が出土していたが、さらに下って白鳳期と思われる瓦の存在が知られるようになった。

観音寺

第３図　周辺の遺跡

1	室本遺跡	9	向井・西の岡遺跡	17	平岡遺跡	25	角塚古墳
2	丸山古墳	10	青塚古墳	18	岩鍋遺跡	26	平塚古墳
3	なつめの木貝塚	11	吉田古墳群	19	縁塚古墳群	27	石砂古古墳
4	鹿隈鐘子塚古墳	12	高額遺跡	20	赤岡山古墳群	28	豆塚１号墳
5	岡本遺跡	13	母神山古墳群	21	竜王山古墳	29	〃　２号墳
6	明音寺	14	青岡（安井）廃寺	22	福田原頂上古墳	30	〃　３号墳
7	樋の口遺跡	15	小森塚古墳	23	王塚古墳	31	院内遺跡
8	一の谷遺跡群	16	宗像古墳	24	椀貸塚古墳		

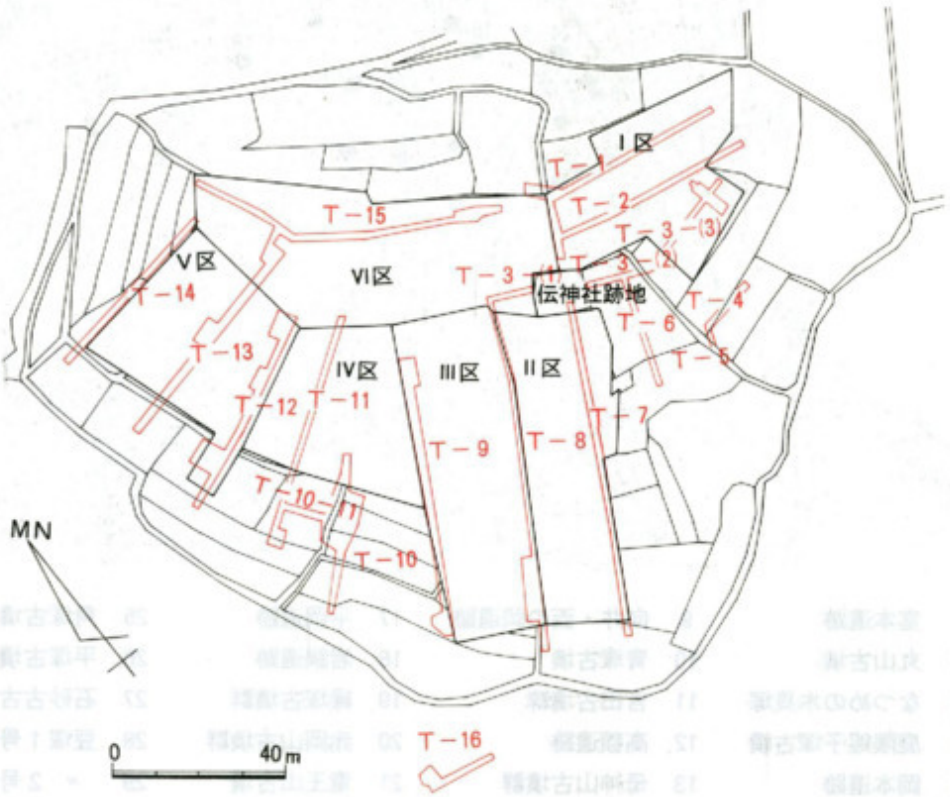
第2章　調査に至る経緯とその方法と結果

大野原町による平成元年度事業の一貫として大野原町丸井字平岡が農村総合整備モデル事業の対象地となった。

この地は阿讃山脈から派生した尾根の一支脈の先端部に位置し、足下には江戸時代塞き止めて造られた代ノ池が広がる。

丘陵部には〝謎の巨石〟と呼ばれる高さ1.4m、幅1.4m、奥行0.3mの砂岩が露出しており、これが藤目城址の一部として遺跡登録されていた。

このため大野原町教育委員会では埋蔵文化財の確認調査を実施するに至ったのである。



第4図　平岡遺跡トレンチ及び調査区設定図

調査の方法

確認調査は平成元年12月15日より実施した。

まず、工事予定区域内の踏査を行い、地形等を考慮して計16本のトレンチを設定し（第４図）、重機により表土剥ぎ、状況に応じて拡張・地山面まで掘削した。

“謎の巨石”地区は、周辺の状況、ボーリング調査、地権者の聞き取り等により古墳と認定し、中心にセクションを残し、以下掘り進める。

伝神社跡地と仮称する地区はもと『荒神さん』を祀っていたという伝承が残っていたため、ここも中心にセクションを残し、以下掘り進める。

調査の結果

調査の結果、対象地区の基本土層は耕土・包含層・地山へと至る。

しかし、後世の掘削等により包含層の厚さは一定でなく耕土直下すぐ地山に至る地点もある。詳細は第１表でのとおりであるが、耕土及び後世の盛土からはサヌカイト片・弥生土器・須恵器・陶磁器が出土した。

包含層からはサヌカイト片・石器・弥生土器が出土した。

Ｔ－３－(3)では２本の溝状遺構とその間に人頭大の川原石が散乱していたため掘り進めたところ、礫床を検出したため古墳と認定した。

Ｔ－８・12・15では地山面で柱穴・土坑等を検出した。

Ｔ－13では住居址・柱穴を包含層上面で検出した。

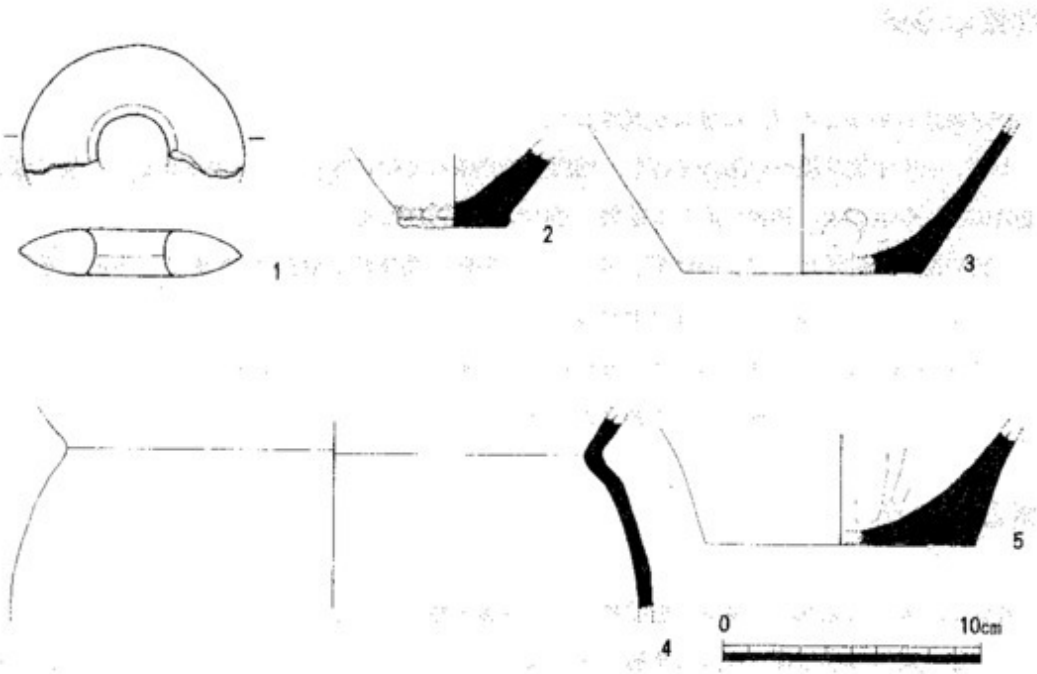
伝神社跡地では溝状遺構を確認したが、意図的なものであるとは考えにくく、さらに隣の耕地には溝が延びていないことから詳細は不明である。

確認調査時出土遺物は弥生土器・石器である。

第５図１はＴ－12の包含層から出土した環状石斧である。半壊しているが、全面に磨かれている。石材不明。香川県での出土例は、三豊郡詫間町の紫雲出山遺跡で２例、善通寺市月信遺跡で１例と少なく、また、全国的にみても類例は多くない。用途についても戦闘用武器、斧ないし土掘り具などの諸説があるが限定されていない。

２もＴ－12から出土した弥生土器の底部である。３・５はＴ－15から出土した弥生土器の底部である。４はＴ－15から出土した甕である。

第６図１～５はＴ－12より出土した石器である。１～３は石鏃、４・５は石錐である。本調査

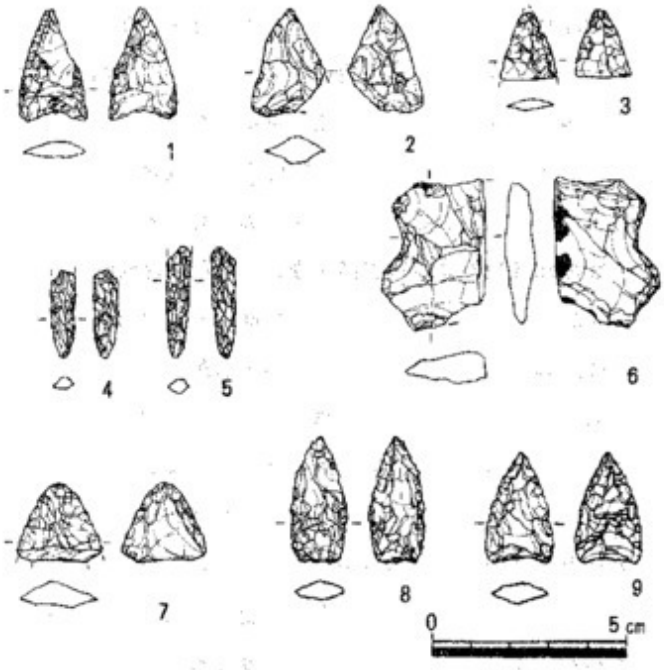


第5図　確認調査時出土土器

で確認した住居址SH06・07内出土である。6はT－8拡張部出土の石包丁である。7はT－14出土の石鏃である。8・9は伝神社跡地から出土した石鏃である。

以上の結果から、対象区域内に古墳の他、弥生時代集落址の存在が想定されたため町側と協議した結果、標高58m以上を全面調査、ただし、T－8では検出した遺構の周辺のみ調査を実施することとなった。

本調査はトレンチを基準にI～VI区に分けて調査を実施した。



第6図　確認調査時出土石器

調査方法は確認調査と同じく表土は重機により掘削・除去し、遺構の検出・掘削は人力で行った。

第1表　確認調査結果詳細表

トレンチ番号	規模（拡張部）m	遺構・遺物	状　況
T－1	1×40（2.5×8）	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－2	1×48	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－3－(1)	1×10	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－3－②	1×15	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－3－③	1×27	古墳1基。須恵器・土師器・鉄製品。	ほとんど破壊され、奥壁・側壁・礫床の一部が残る。
T－3－④	1×14	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－4	1.5×14	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－5	1×5	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－6	1×26	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－7	1×80	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－8	1×83（3×15）	柱穴・長方形土坑。 サヌカイト片・弥生土器。	耕土直下、サヌカイト片・弥生土器を含む包含層が続く。包含層上面より切り込んだ土坑検出。
T－9	1×65 （1×7，5×2）	弥生土器・須恵器	耕土、包含層、地山へと続く。
T－10	1×38（5×15）	弥生土器・陶磁器	耕土、包含層、地山へと続く。
T－11	1×56（1×4）	弥生土器	耕土、包含層、地山へと続く。
T－10－11	1×9	な　し	耕土直下、西側は地山、東側は後世の盛土。
T－12	1×50（2×6， 1×6，5×6）	柱穴。 サヌカイト片・弥生土器。	耕土、包含層、地山へと続く。
T－13	1×54（2×5， 1×3，2×6）	住居址・柱穴。 サヌカイト片・弥生土器。	頂上拡張部は耕土直下、すぐ地山に至る。他は耕土、包含層、地山へと続く。頂上部で検出した柱穴は地山面上、他は包含層上面で検出。
T－14	1×44	サヌカイト片・須恵器。	耕土直下、すぐ地山に至る。
T－15	1×79（1×6）	土坑・柱穴。 サヌカイト片・弥生土器・須恵器。	耕土直下、すぐ地山に至る。 地山面で、柱穴・土坑を検出。
T－16	1×13（3×3）	な　し	耕土直下、すぐ地山に至る。

第３章　調査の結果

調査の結果、古墳７基、弥生時代の竪穴住居址12棟、掘立柱建物址56棟を確認した。しかしながら後世の掘削によりその残存状況は非常に悪い。また、遺物の出土量も少なく、弥生土器については磨耗が著しい。

以下調査区ごとに詳細を報告する。

１．Ｉ区

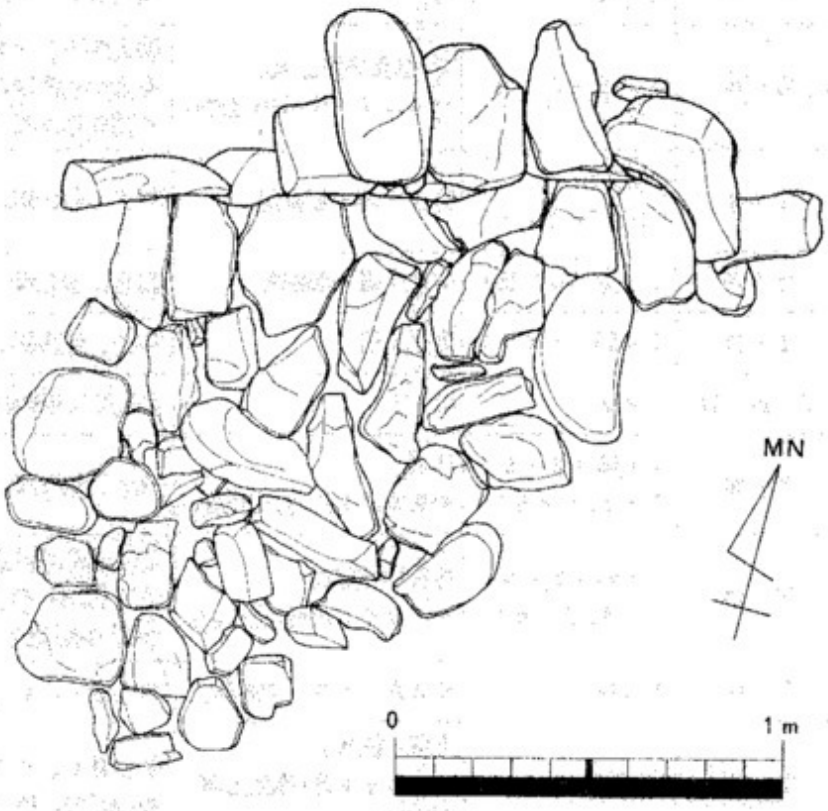
Ｉ区は尾根の稜線上基部にあたる。

ここでは古墳１基を確認したのみである。２号墳と呼称する。（第14図）

２号墳

２号墳はトレンチ調査の際確認したものである。径約10ｍの円墳であるが、石室南半分は破壊されており石も多く抜き取られているため残存状況は非常に悪く奥壁の一部・東側壁基底石・床面の一部を確認したのみである。

石室はほぼ南に開口するものと思われるが、石室規



第７図　石室検出状況及び下層礫床実測図

模・形態は不明である。(第7図・10図・12図・13図)

基底石には板状の川原石を使い、上部は川原石を小口に積んだものと思われる。残存していた奥壁と東側壁とのコーナー部に一面が丸く内彎した石を使用していた。同じような状態の石をもう1個攪乱部で検出したが、これも同じくコーナー部に使用されていたものであろう。

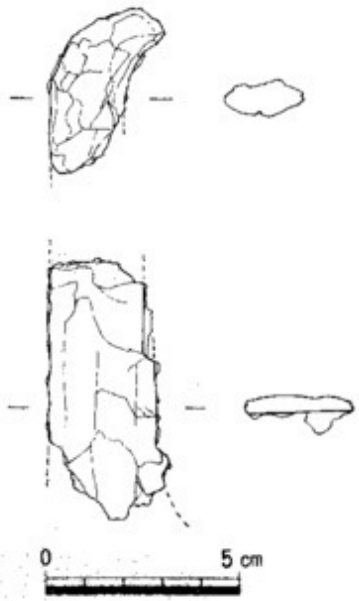
床面は上層に玉砂利、下層に人頭大～拳大の川原石を敷き二重礫床を構成している。なお、床面に排水溝等の施設は確認されなかった。

床面奥壁隅から短頸壺、玄室内から短頸壺蓋、墳丘上から平瓶が出土した。(第8図)

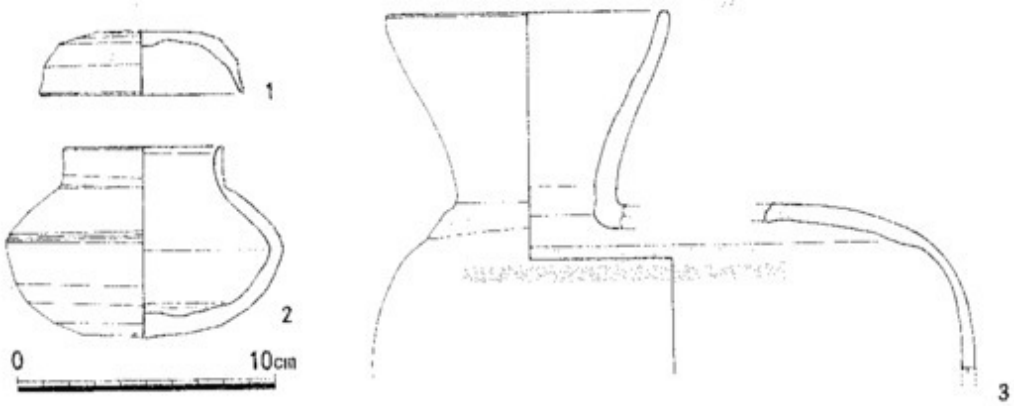
1は短頸壺蓋である。2は短頸壺である。1とセットを成すものであろう。

3は平瓶である。外方へ直線的に立ち上がる口縁部と偏平に近い体部を持つ。

また、玄室内から鉄製品が1点出土している。破損して一部欠損しているが、鎌と思われる。(第9図)

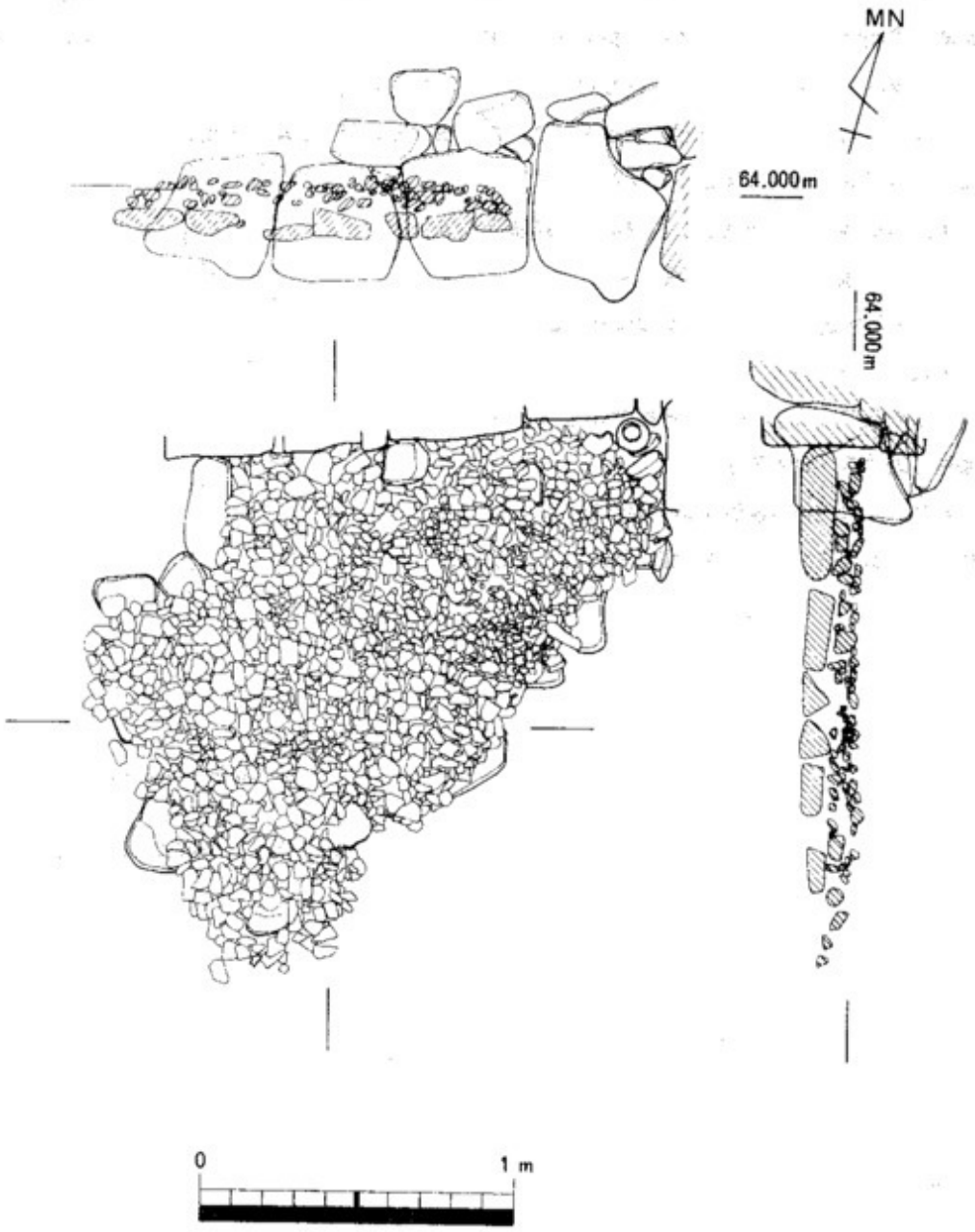


第9図　2号墳出土鉄製品

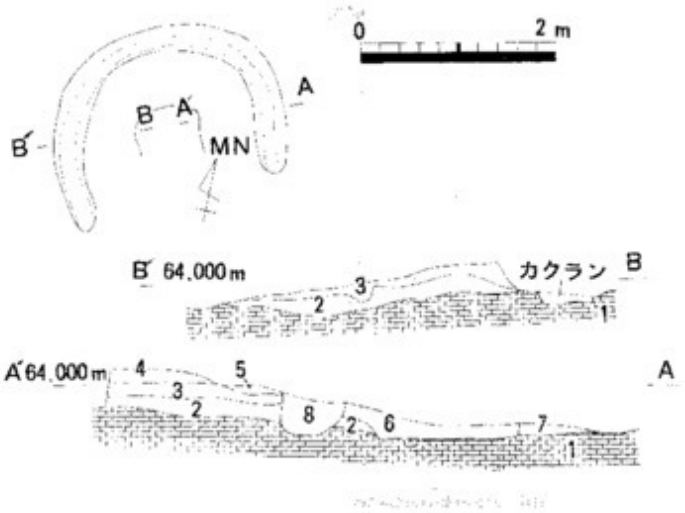


第8図　2号墳出土遺物

第10図　2号墳石室全体図

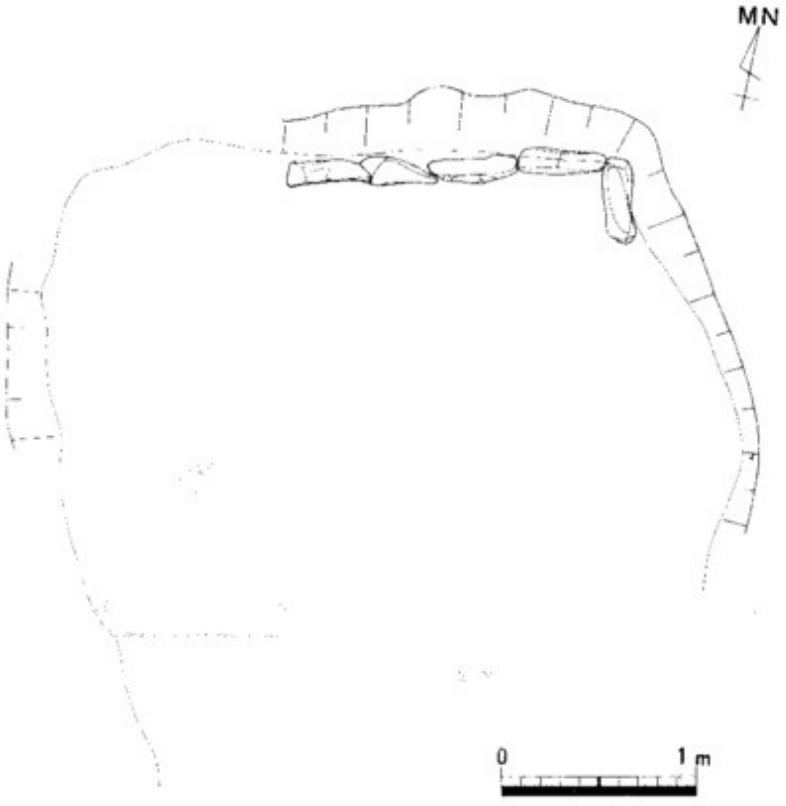


第11図　2号墳断面土層図

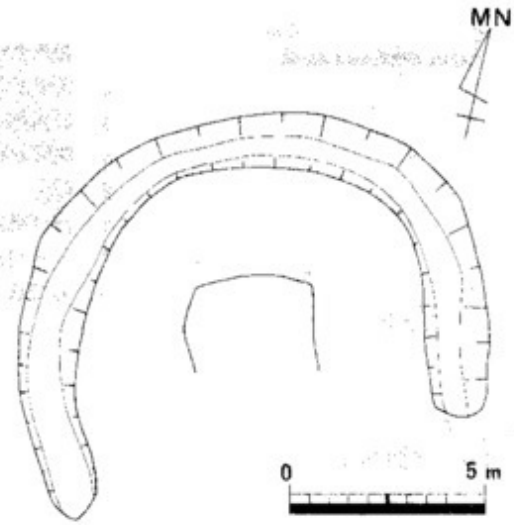


1　黄褐色粘質土層（地山）
2　褐色粘質土層
3　灰褐色粘質土層
4　暗褐色粘質土層（少量礫含）
5　耕土
6　暗黒褐色粘質土層（周濠埋土）
7　淡茶褐色粘質土層
8　施肥溝

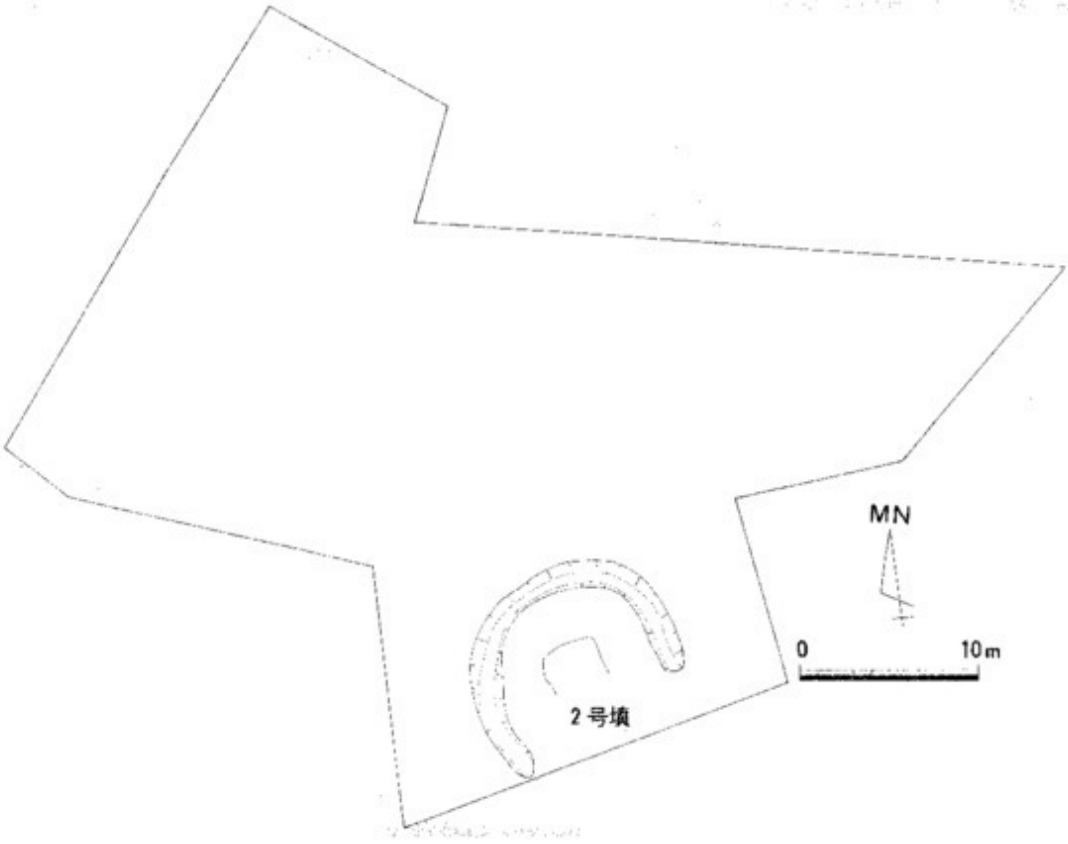
第12図　掘り方及び基底石実測図



第13図　発掘終了実測図



第14図　Ⅰ区遺構全体図



2．Ⅱ区

Ⅱ区では古墳３基・弥生時代竪穴住居址１棟・掘立柱建物址４棟を確認した。（第36図）

３号墳

３号墳は尾根の稜線上やや南斜面を下ったところに位置する。

Ⅱ区を重機により表土掘削した際、周濠らしいものを検出したため、さらに拡張したところ古墳と確認したものである。

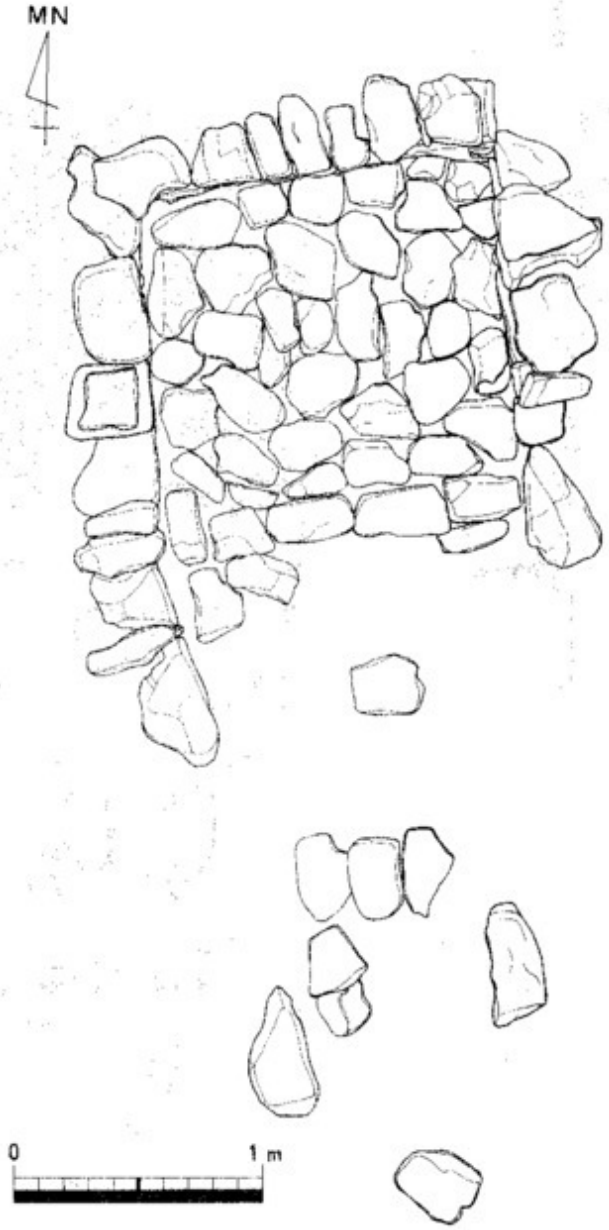
径約10ｍの円墳で、石室はＳ－７°－Ｅに開口する。

残存状態は悪く基底石と上部石積１～２段を確認、床面もほぼ半壊している。

石室規模は奥壁短辺約1.5ｍ、羨道短辺が約0.85ｍの羽子板状を呈する横穴式石室と思われる。石室長辺は現在約3.7ｍを計るが、まだ少し延びる可能性も高い。（第16図）

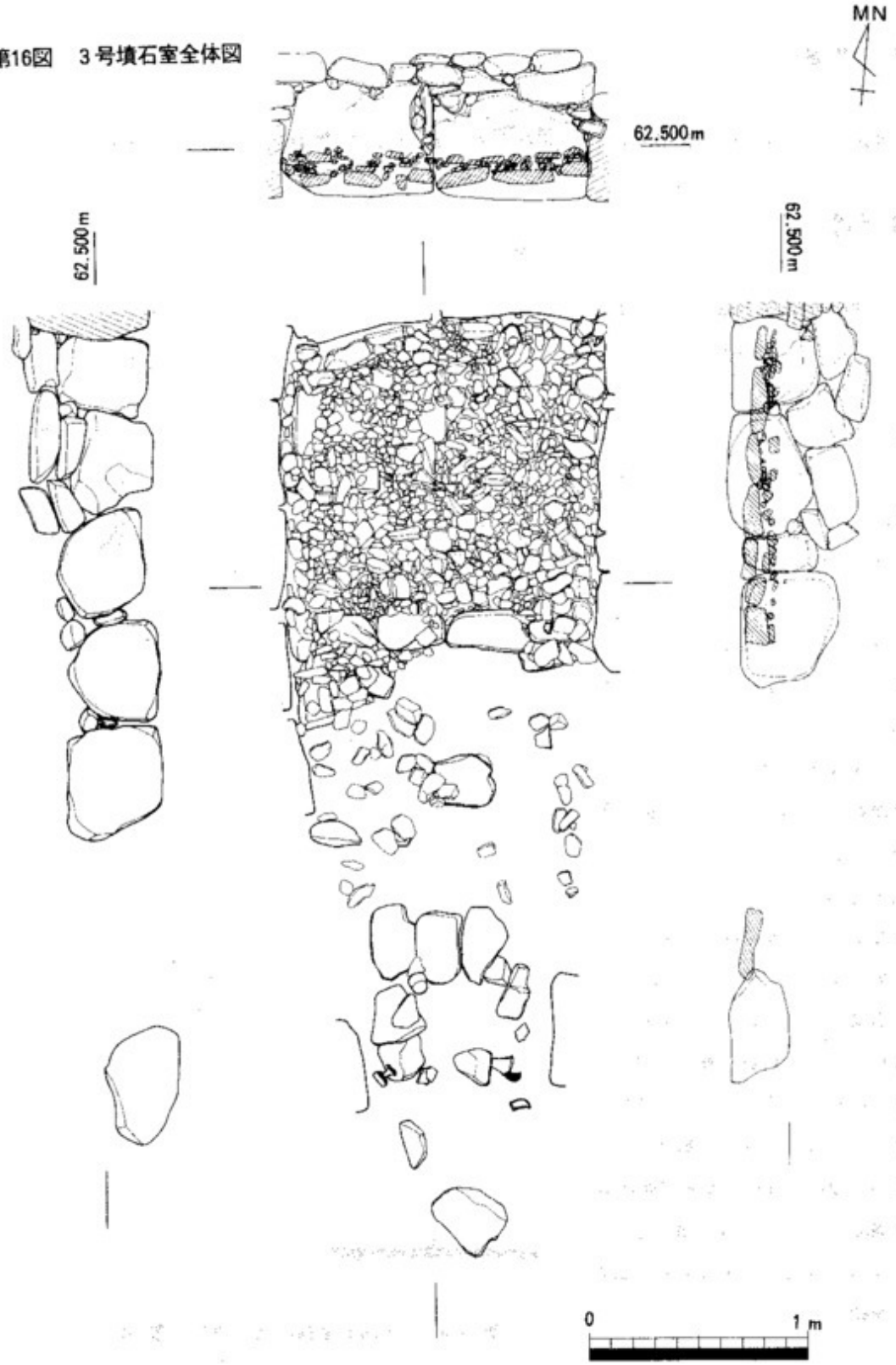
墓壙は地山を整形した後掘り込まれており、床面に敷土を施す。さらにおそらく玄室内のみであろうが人頭大の川原石を敷きつめ、その上層に玉砂利を敷き二重礫床を構成している。（第15図）

なお、床面には排水溝等の施設は確認されなかった。



第15図　３号墳石室検出状況及び下層礫床

第16図　3号墳石室全体図



また、三豊平野内の古墳で多く使用されている玄室と羨道を分ける境石は検出されなかった。羨道で長軸を石室と平行に並ぶ3個の川原石は閉塞石の一部と考えられる。

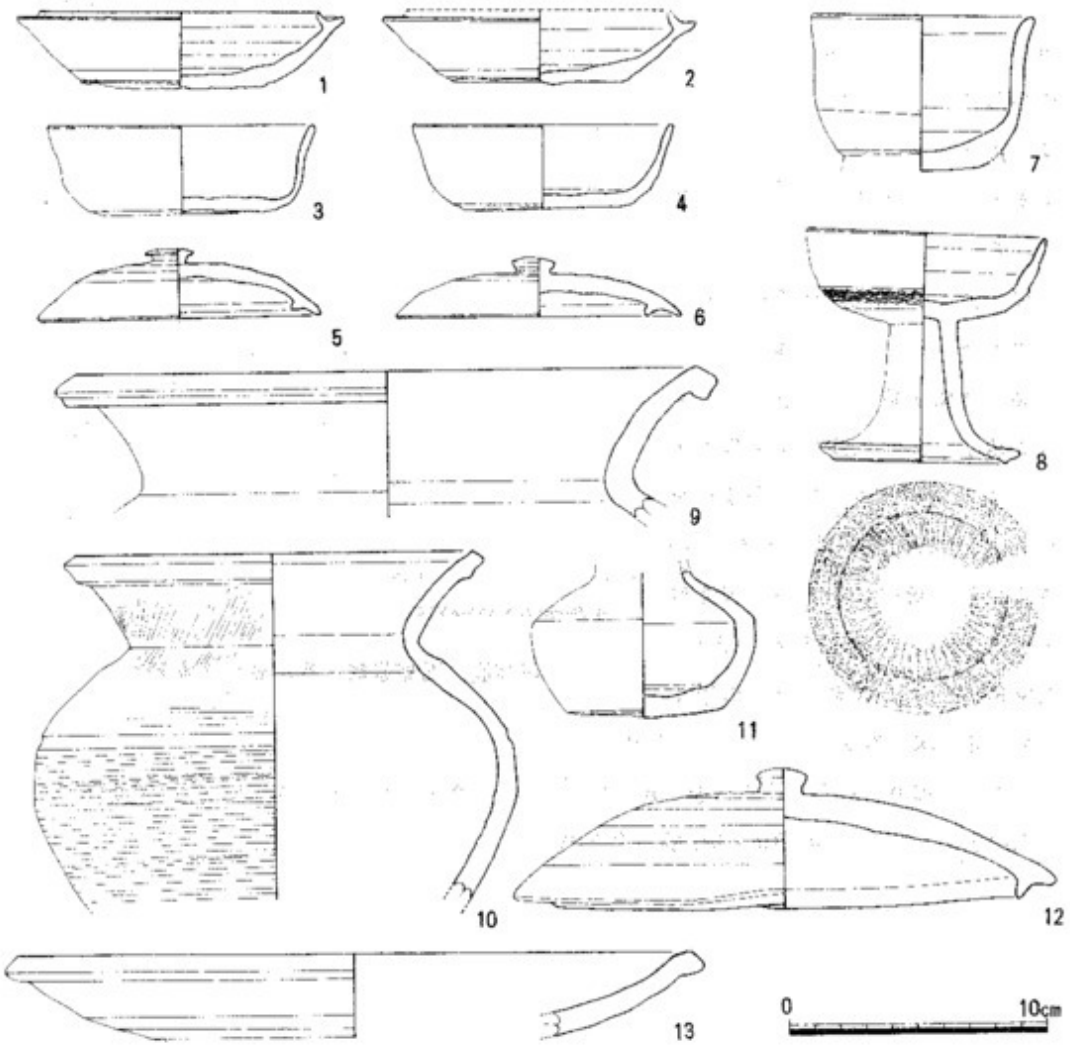
また、2号墳と同じく奥壁と西側側壁のコーナー部に片側が内彎した石を使用していた。ただし、整形した痕跡は認められない。

基底石には板状を呈した川原石を使用している。

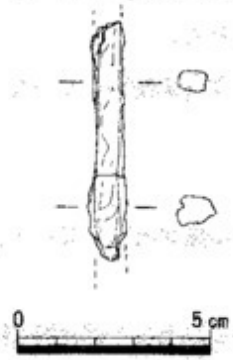
周濠は全周の約⅔を確認した。周濠内で床面に接して須恵器・高坏の蓋が出土している。

その他遺物は石室内から須恵器が出土している。(第17図)

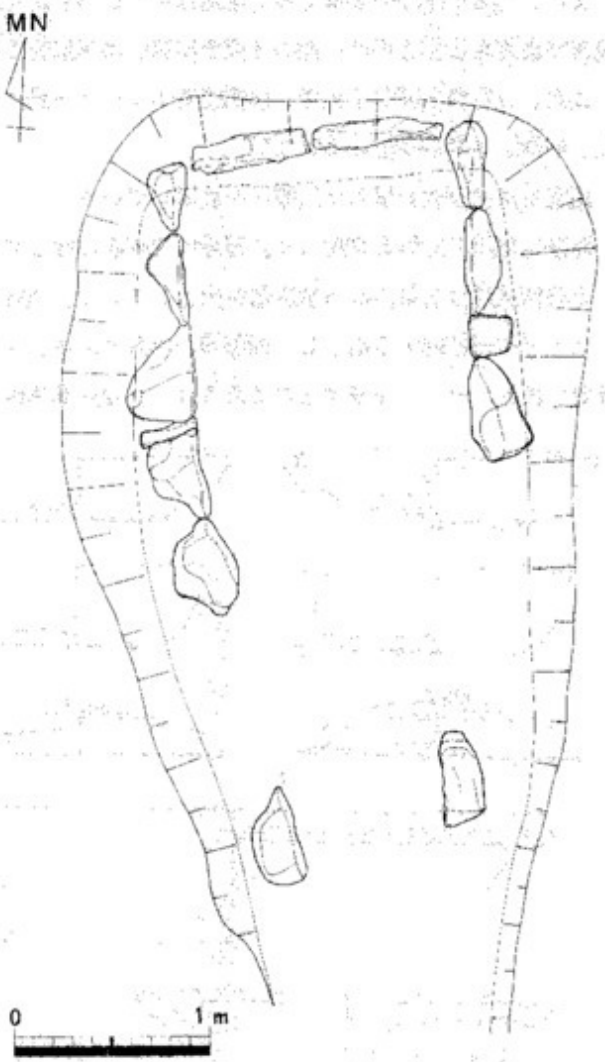
1・2は石室内から出土した須恵器の坏身である。3～6は羨道から出土した須恵器の坏身と坏蓋である。セットを成すものであろう。7は羨道部から出土したコップ形土器である。8は羨



第17図　3号墳出土土器実測図



第18図　3号墳出土鉄製品

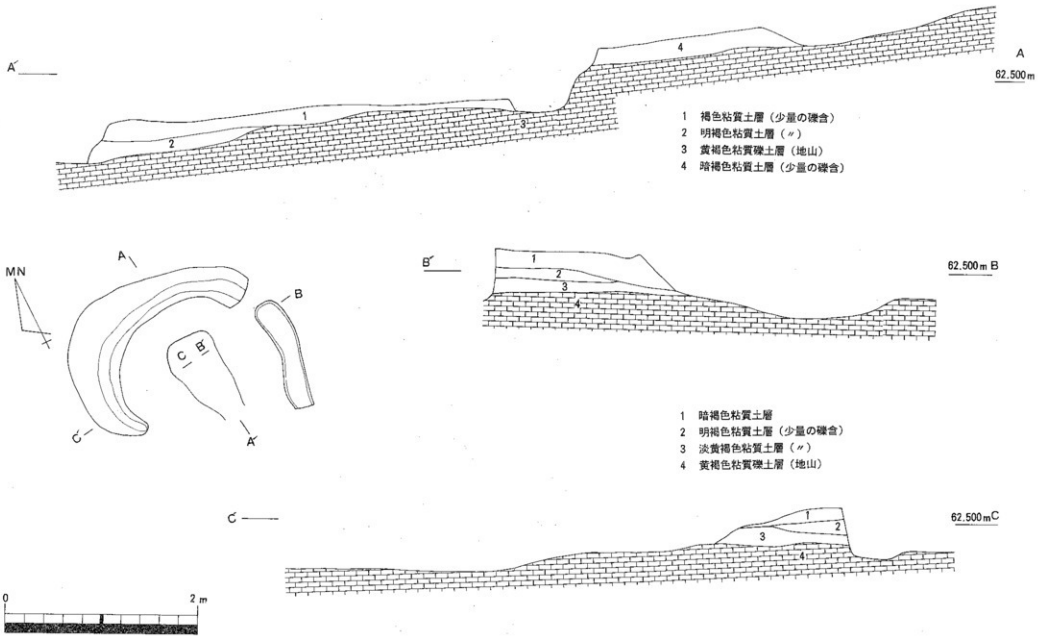


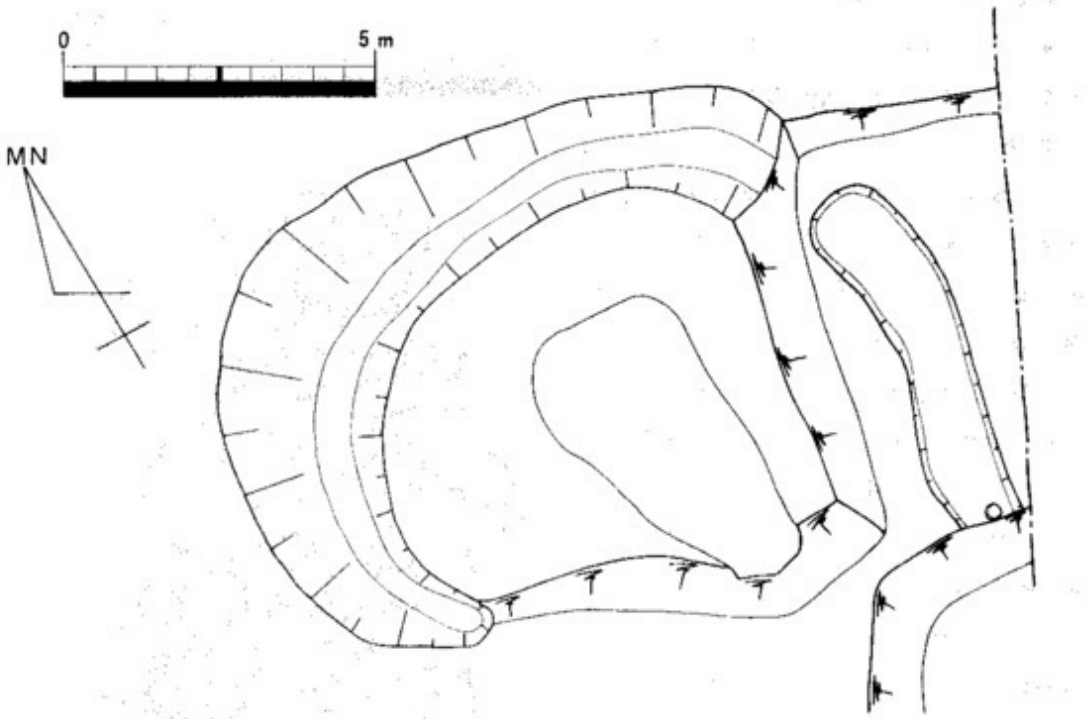
第19図　石室基底石及び掘り方実測図

道から出土した無蓋高坏である。やや外方に広がる坏部の中央に4条の波状文を、その下方に列点文を施す。9は羨道から出土した甕である。10は羨道から出土した広口壺である。外面口頸部にタタキの後ヨコナデを施し、体部中央に1条の沈線を施しその下方にカキメを施す。11は口縁部を欠損するが、甕と思われる。12は周濠床面から出土した高坏の蓋である。内面を上にして検出した。13は周濠埋土から出土した盤である。また、玄室羨床内より鉄製品が1点出土している。鏃の茎部と思われる。(第18図)

以上出土遺物より3号墳の築造時期は6世紀の末と考えられ、その後7世紀前半頃追葬が行れたものと思われる。(第19図・第20図・第21図)

第20図　3号墳断面土層図





第21図　3号墳発掘終了実測図

4号墳

4号墳は3号墳から南西方向に斜面を下ったところに位置する。

この4号墳も周濠を検出した後周濠範囲内を掘削中に検出した古墳で、その残存状況は悪く石は全て抜き取られ礫床の一部を確認したのみである。

径10mの円墳で石室はS－7・－Eに開口する。

石の抜き取り痕から推定する石室規模は玄室奥壁短辺は1.3m、羨道際短辺1.0m、玄室長辺1.8m、羨道長辺1.8m、短辺0.5～0.7mの玄門を持った横穴式石室である。

玄門部分が非常に狭いことから羨道からの柩の搬入は困難と思われ、他の搬入方法もしくは構築方法が考えられる。

床面は上層に玉砂利、下層に人頭大～拳大の川原石を敷き二重礫床を構成している。なお、床面上に敷土は認められず、排水溝等の施設は確認されなかった。(第22図)

周濠は全周の約½検出した。

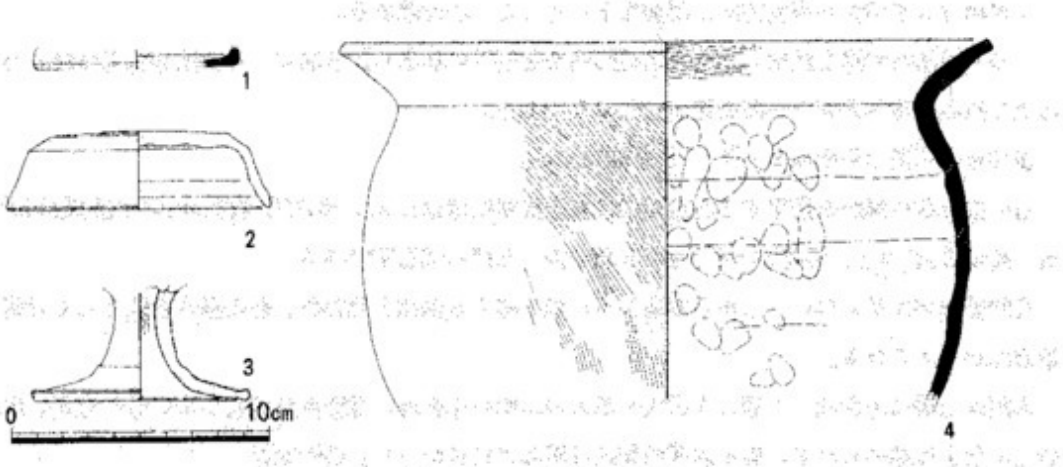
遺物は、玄室礫床内より須恵器・土師器・鉄製品が、周濠内から須恵器が出土した。（第23図）

1は礫床内から出土した土師器壺の口縁である。2は礫床内から出土した須恵器・短頸壺の蓋である。4は礫床内から出土した土師器の甕である。外面体部と内面口縁部にハケメを施し、内面体部は指頭圧痕で整形し、粘土紐の接合痕が看取できる。3は周濠埋土から出土した高坏の脚である。

1は礫床内から出土した鉄斧である。その他、鉄滓の破片が多く出土している。（第25図）

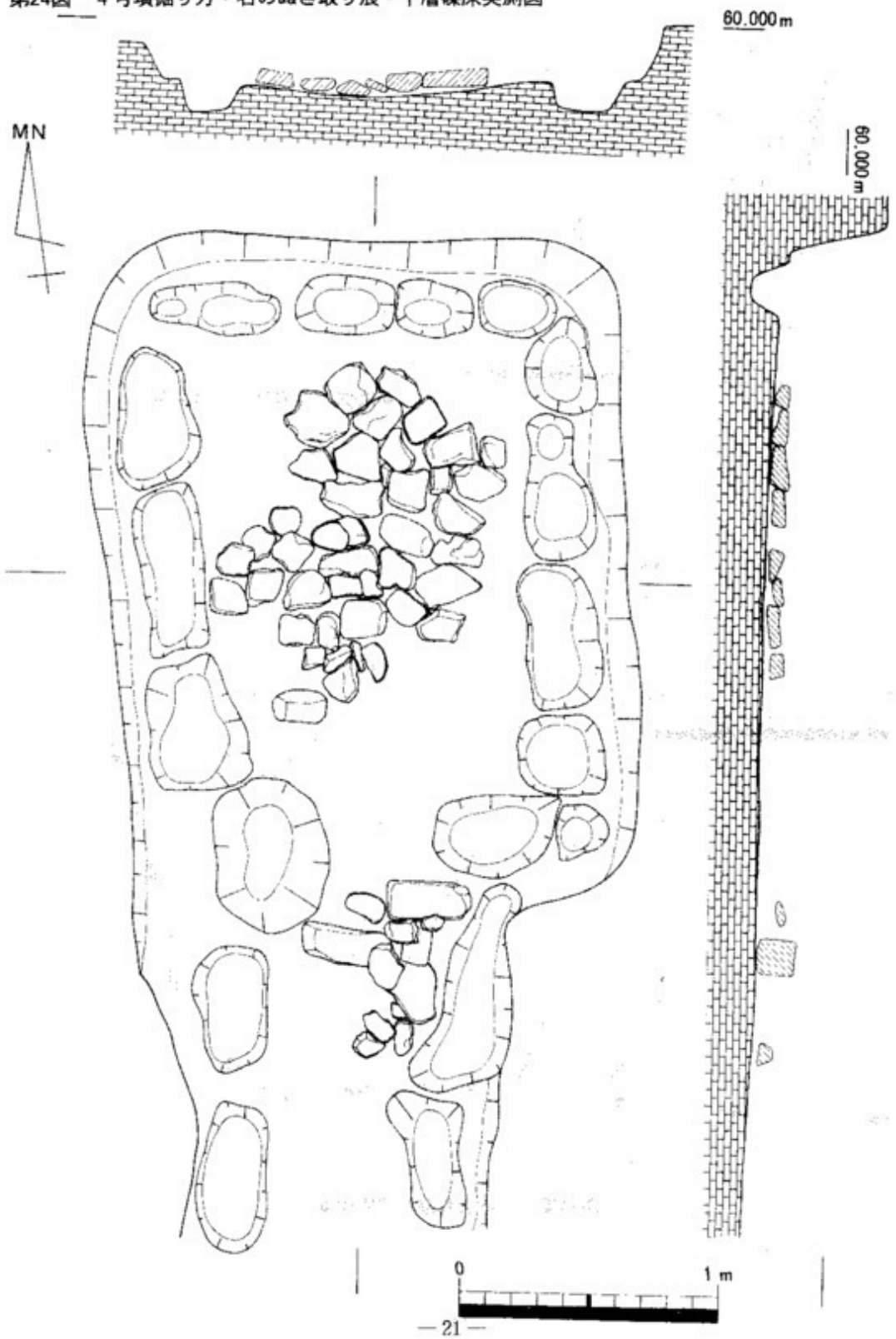
以上出土遺物からみて4号墳の築造時期は6世紀末もしくは7世紀初めと考えられる。（第24図・第26図）

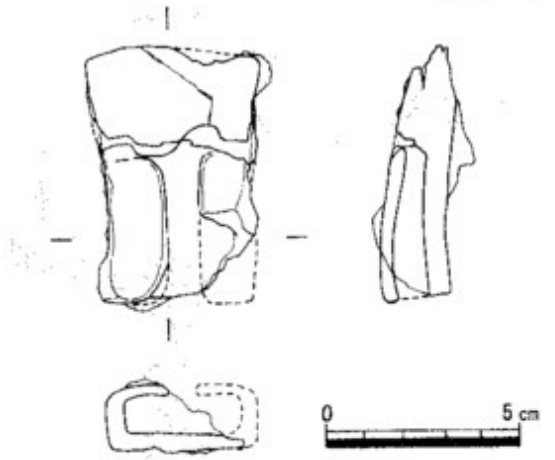
第22図　4号墳石室検出状況



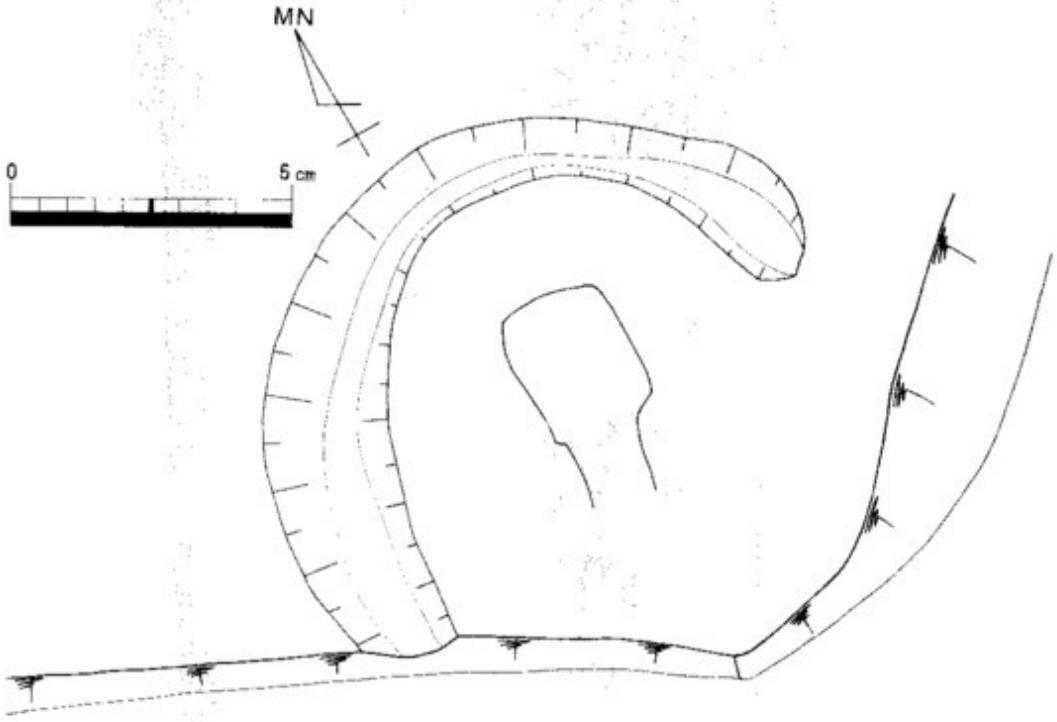
第23図　4号墳出土土器

第24図　4号墳掘り方・石のぬき取り痕・下層礫床実測図





第25図　4号墳出土鉄製品



第26図　4号墳発掘終了実測図

6号墳

6号墳は4号墳のさらに南下方の斜面に立地する。重機による表土掘削中に検出したものである。

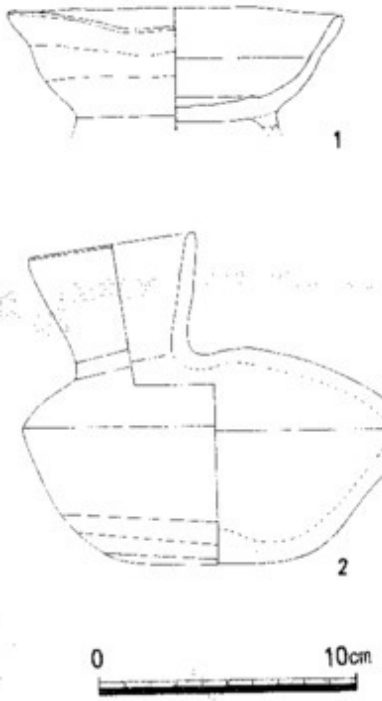
石室長辺1.1m、短辺0.5mを計り、石は基底石の約半分を検出したのみであるが小竪穴式石室と考えられる。検出したのはこれ1基のみで、これが周濠の中央に位置することからも中心主体と思われる。

径3.7mの円墳と考えられるが、周濠は全周の約½検出したのみで盛土も確認されなかった。(第28図)

基底石には扁平な川原石を縦長に使用し、床面には玉砂利を一面に敷きつめている。なお、床面に排水溝等の施設は確認できなかった。

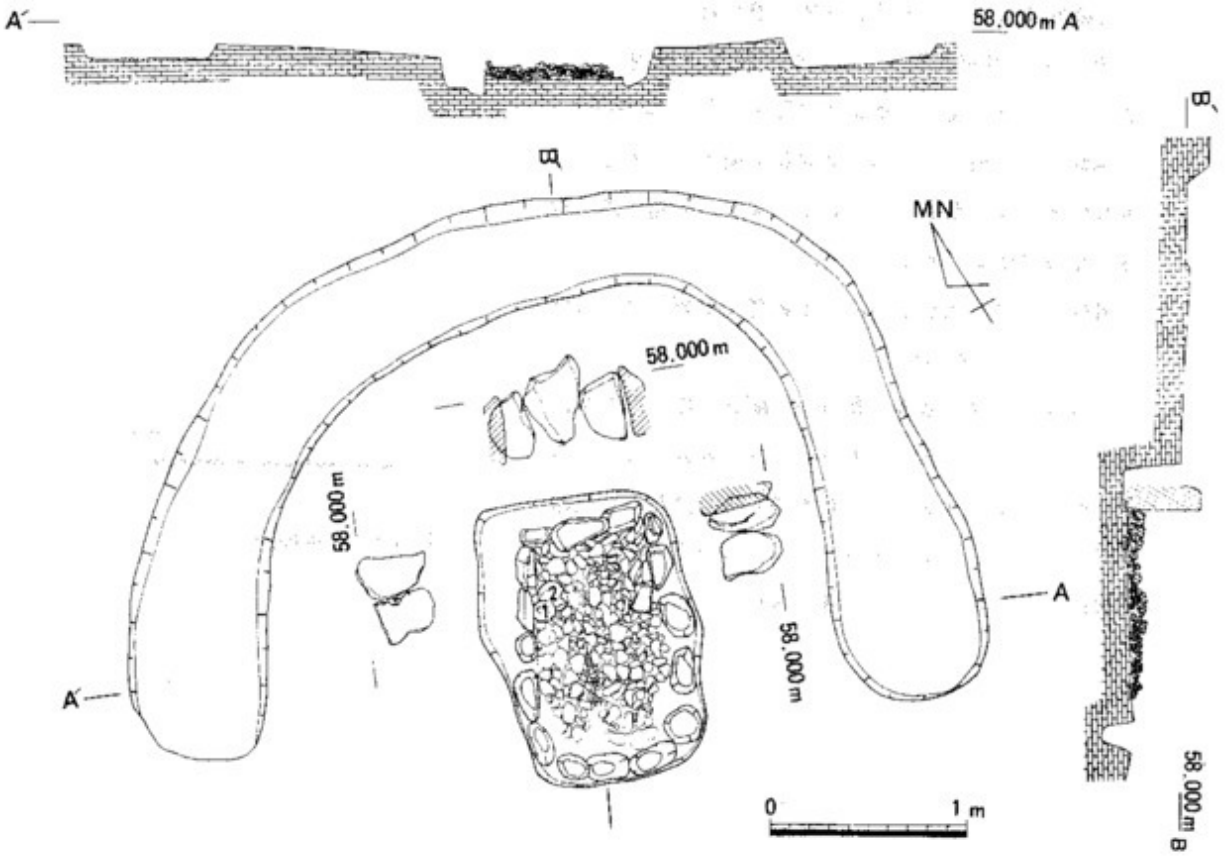
遺物は小竪穴式石室内から須恵器の平瓶と高台付坏が出土した。(第27図)

1は高台付坏である。高台の一部を欠損するがほぼ完形である。2は平瓶である。これも焼成不良であるが完形である。ほぼ中央に最大径を持つ体部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ。これら出土遺物から6号墳は7世紀前半のものと考えられる。



第27図　6号墳出土土器

第28図　6号墳全体図及び断面図



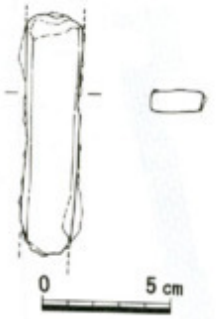
SH03

Ⅱ区斜面上部で検出した。

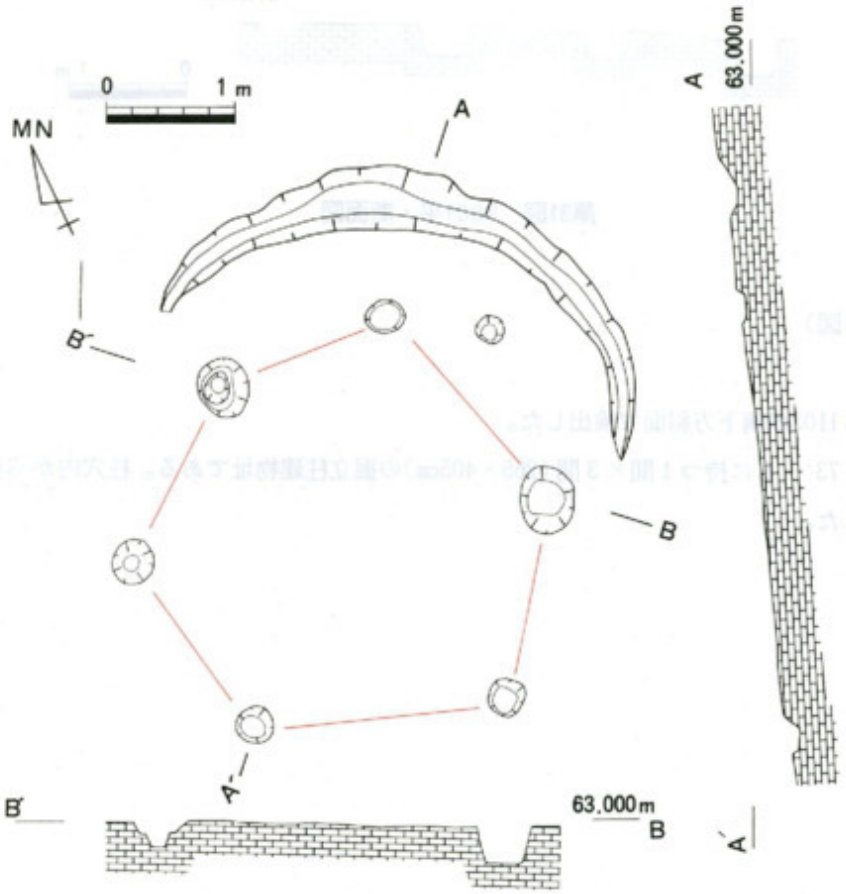
残存状況は非常に悪く、周溝の一部と柱穴のみを確認した。（第30図）

規模（5.6m）の楕円形を呈する竪穴住居址で、主柱穴６本を持つ。

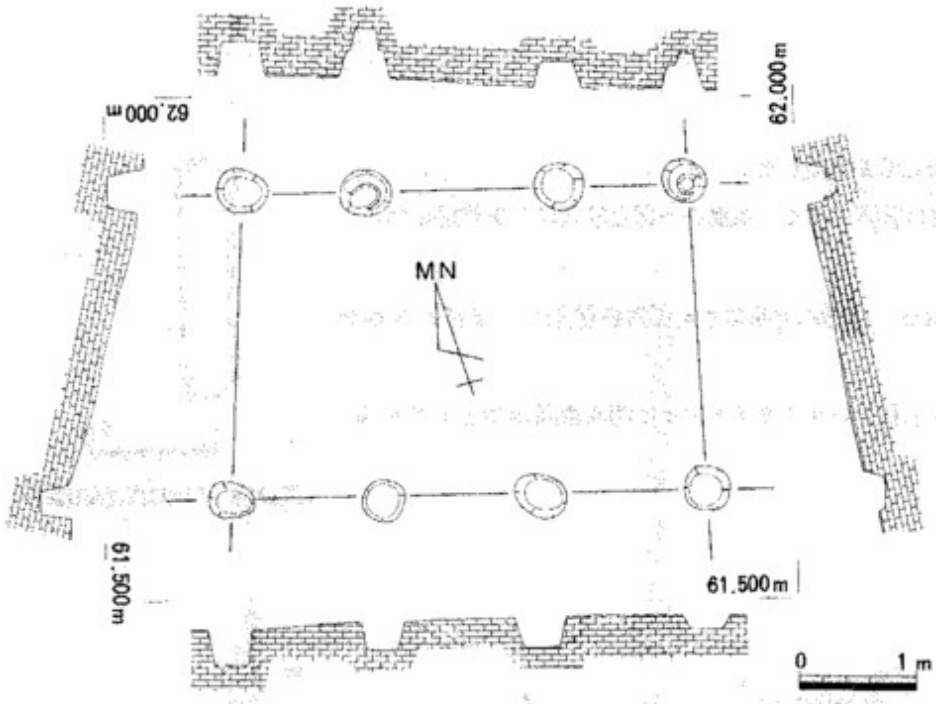
周溝内から夥しいサヌカイト片と不明鉄製品が出土している。（第29図）



第29図　SH03出土鉄製品



第30図　SH03平・断面図



第31図　SB01平・断面図

SB01（第31図）

ＳＢ01はＳＨ03の南下方斜面で検出した。

主軸をＳ－73°－Ｅに持つ１間×３間（265×405cm）の掘立柱建物址である。柱穴内から弥生土器片が出土した。

SB02（第32図）

ＳＢ02はⅡ区の南端で検出した。

主軸をＮ－13°－Ｅに持つ１間×２間（130×520cm）を計る掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。

SB03（第33図）

ＳＢ03はＳＢ02の南下方斜面に位置し、ＳＢ04と切り合う、主軸をＳ－82°－Ｅに持つ１間×３間（245×465cm）を計る掘立柱建物址である。

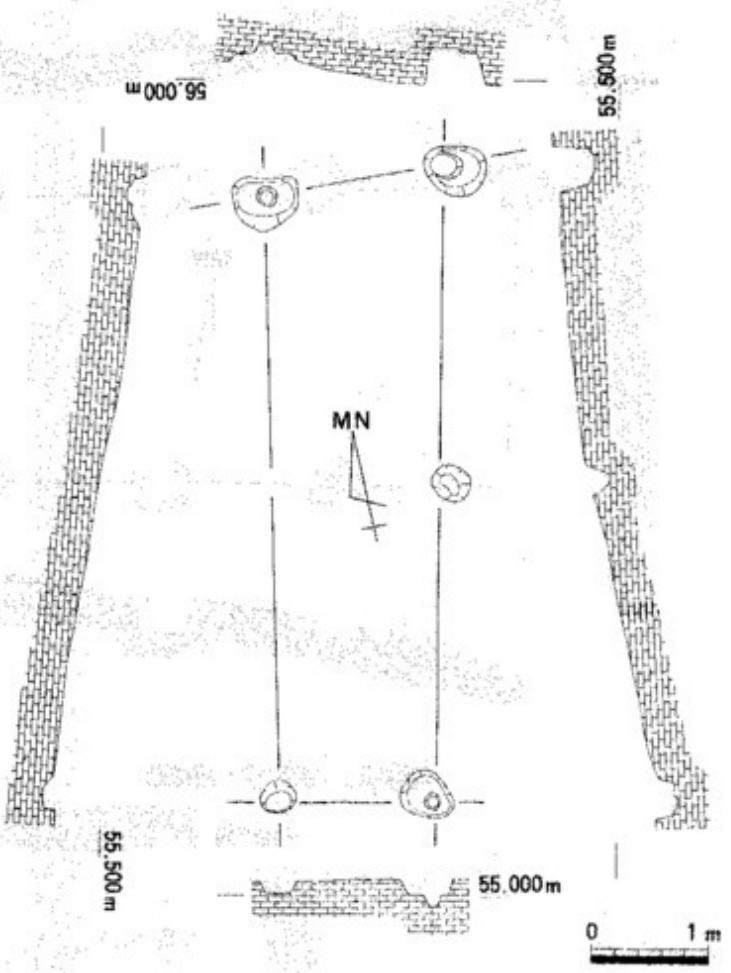
出土遺物はなし。

SB04（第34図）

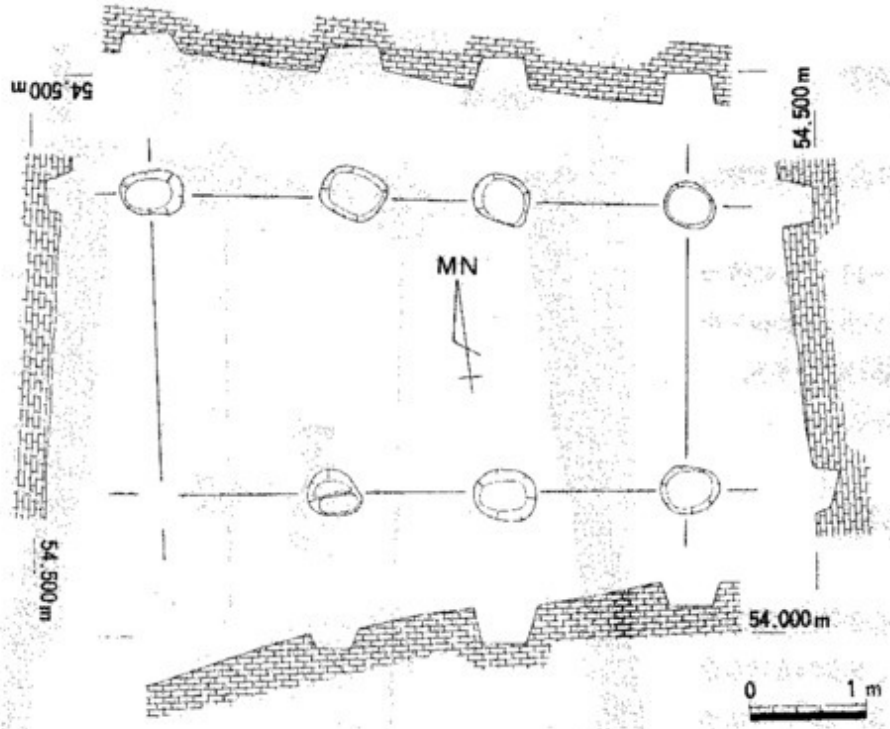
ＳＢ04はＳＢ03と切り合う。

前後関係は不明であるが、主軸をＮ－50°－Ｅに持つ１間×２間（200×435cm）を計る掘立柱建物址である。

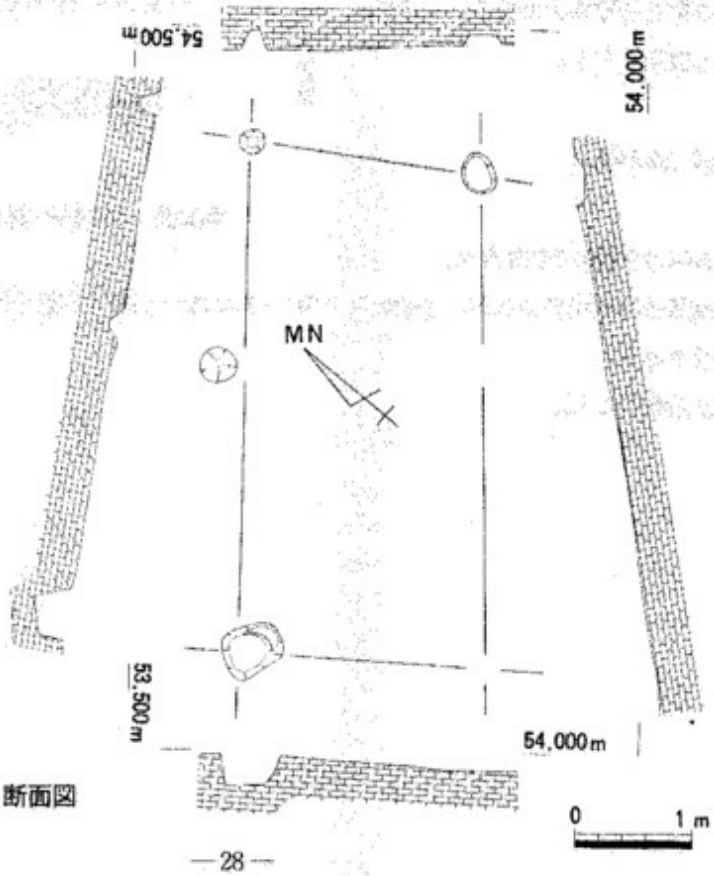
出土遺物はなし。



第32図　SB02平・断面図



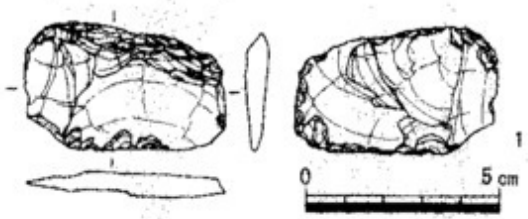
第33図　SB03平・断面図



第34図　SB04平・断面図

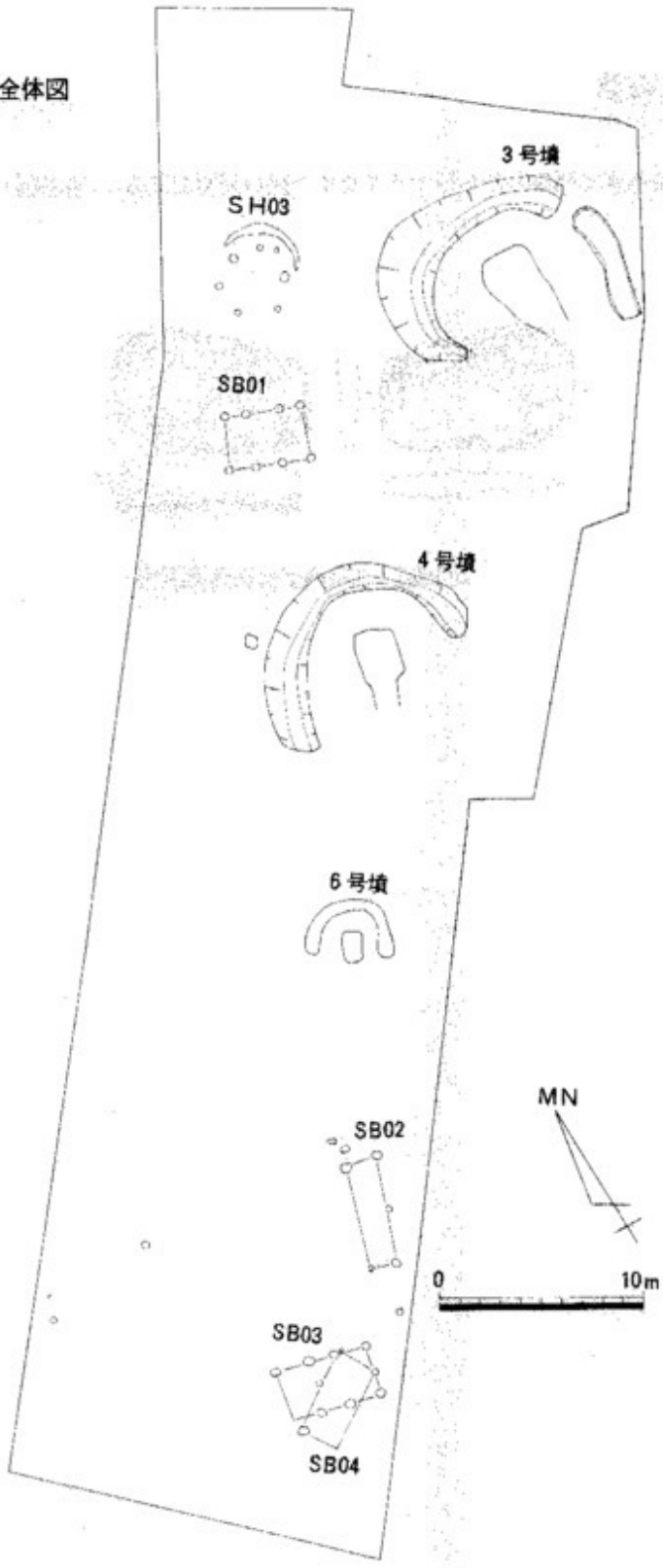
Ⅱ区内出土石器

4号墳の周濠西側で採集したものでサヌカイト製の削器である。(第35図)



第35図　Ⅱ区内出土石器実測図

第36図　Ⅱ区遺構全体図



3．Ⅲ区

Ⅲ区では古墳２基、住居址１棟、掘立柱建物址７棟、土壙墓１基、土器集中地点１カ所を検出した。(第63図)

５号墳　(第41図・第42図・第43図)

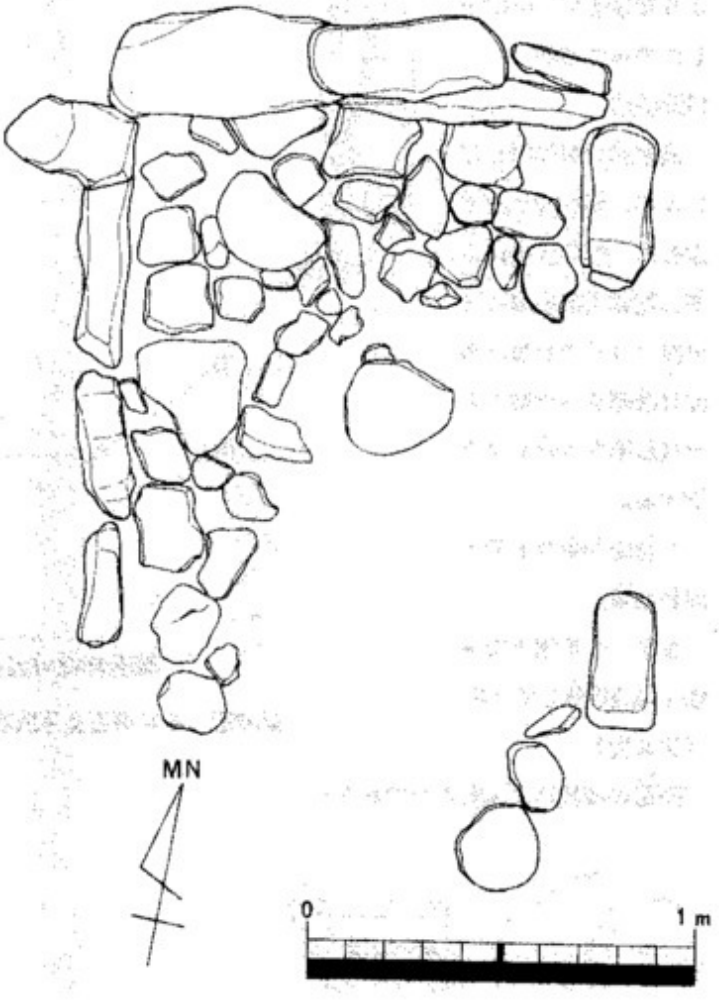
５号墳はⅢ区のほぼ中央に位置する。

残存状況は悪く、石室は半壊し、果樹園開墾時の甕の設置のため基底石も一部が遺存していたのみである。

石室規模は玄室奥壁短辺1.1m、破壊際短辺1.25m、長辺は現存1.9mを計る。(第38図)

やや胴張りを呈すらしい様相を見せるものの石室形態は不明である。

墓壙は地山面を整形した後掘り込まれており、その際地山上の下層遺構も破壊されたのであろう。石室内床面には敷き土が認められ、その上層に人頭大～拳大の川原石を、さらにその上層に玉砂利を敷



第37図　５号墳石室検出状況及び下層礫床

き二重礫床を構成する。（第37図）

なお、床面に排水溝等の施設は確認されなかった。

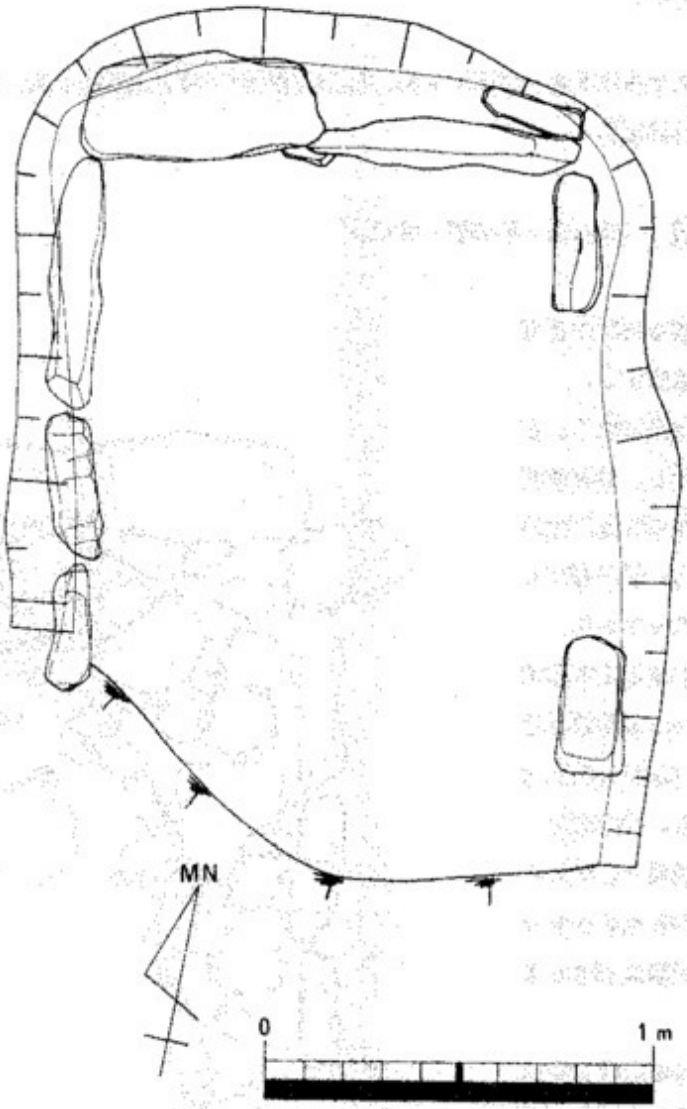
基底石は奥壁に板状の石を、側壁は方柱状の石を直列配列している。出土遺物は石室内より須恵器が1点出土したのみである。（第39図）

高台部分が欠損しているが、脚を持つ壺と思われ、内面は見込み部に指頭圧痕を施しその後ヨコナデする。外面は底部をヘラ切りした後脚部をつけヨコナデする。

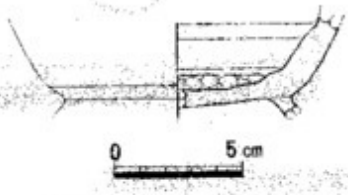
7世紀前半のものと思われる。

また、5号墳上で石鏃1点を採集している。（第40図）

開墾の攪乱によったものであろう。



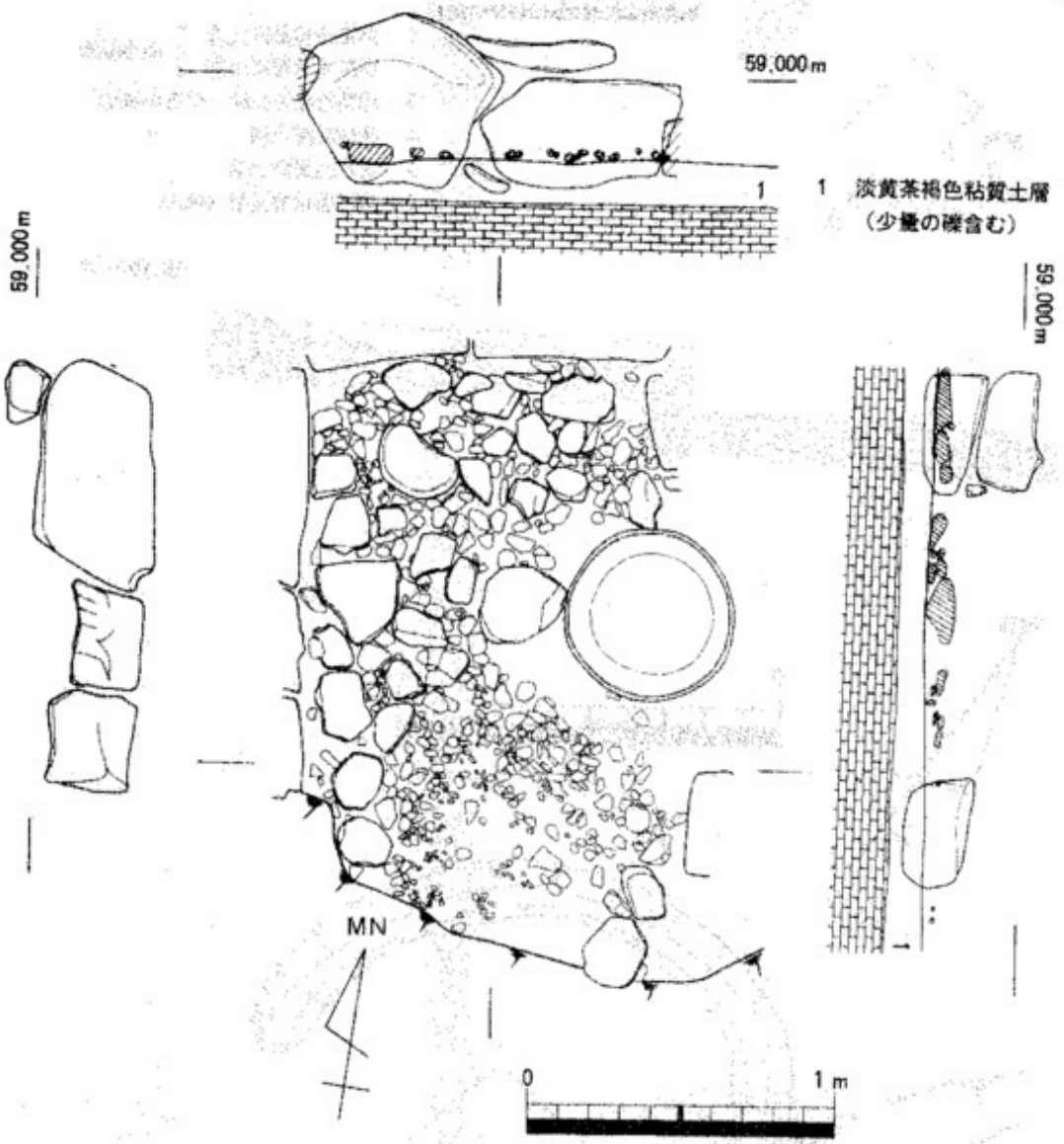
第38図　5号墳石室基底石・掘り方実測図



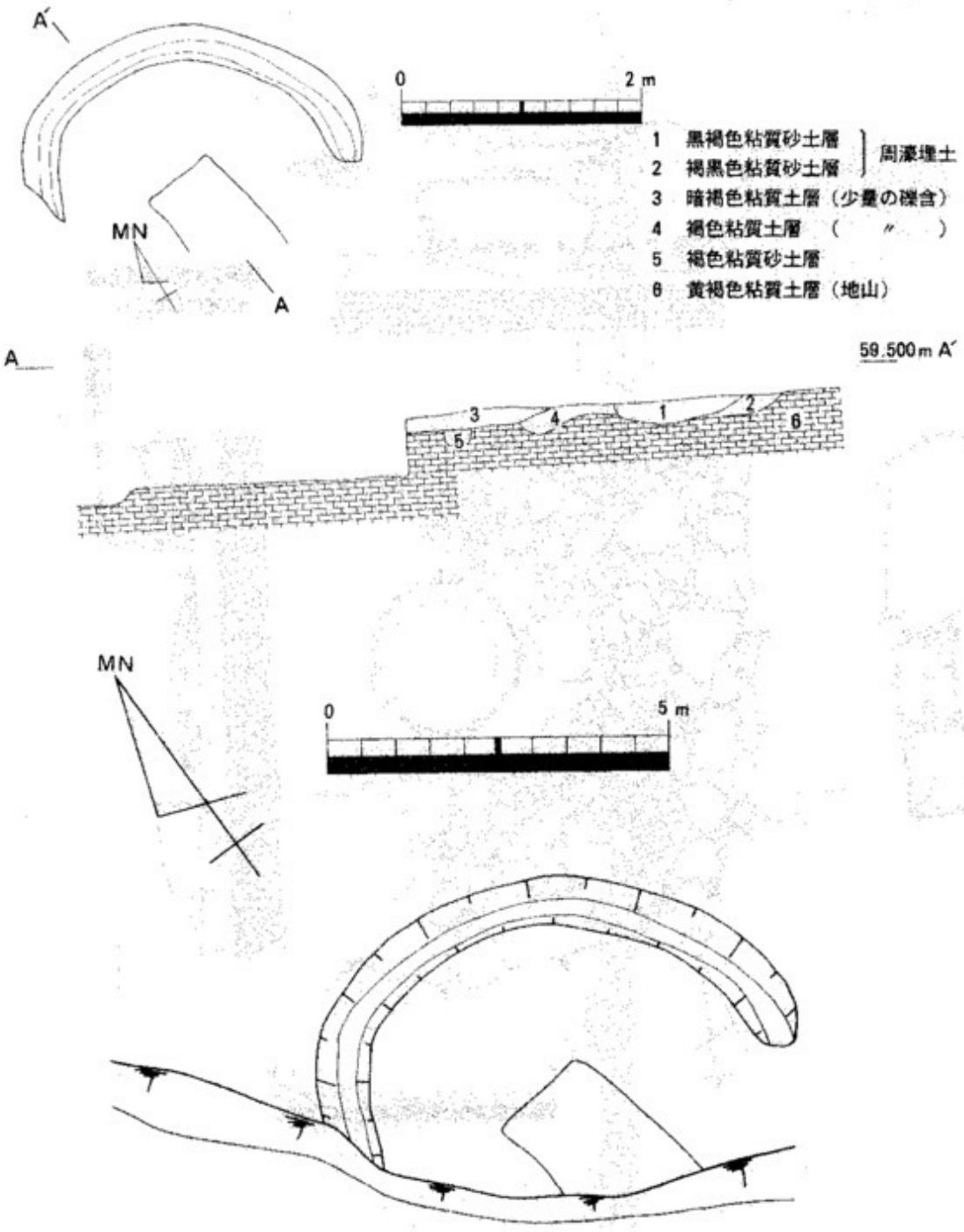
第39図　5号墳出土土器

第40図　5号墳出土石器

第41図　5号墳石室全体図



第42図　5号墳断面土層図



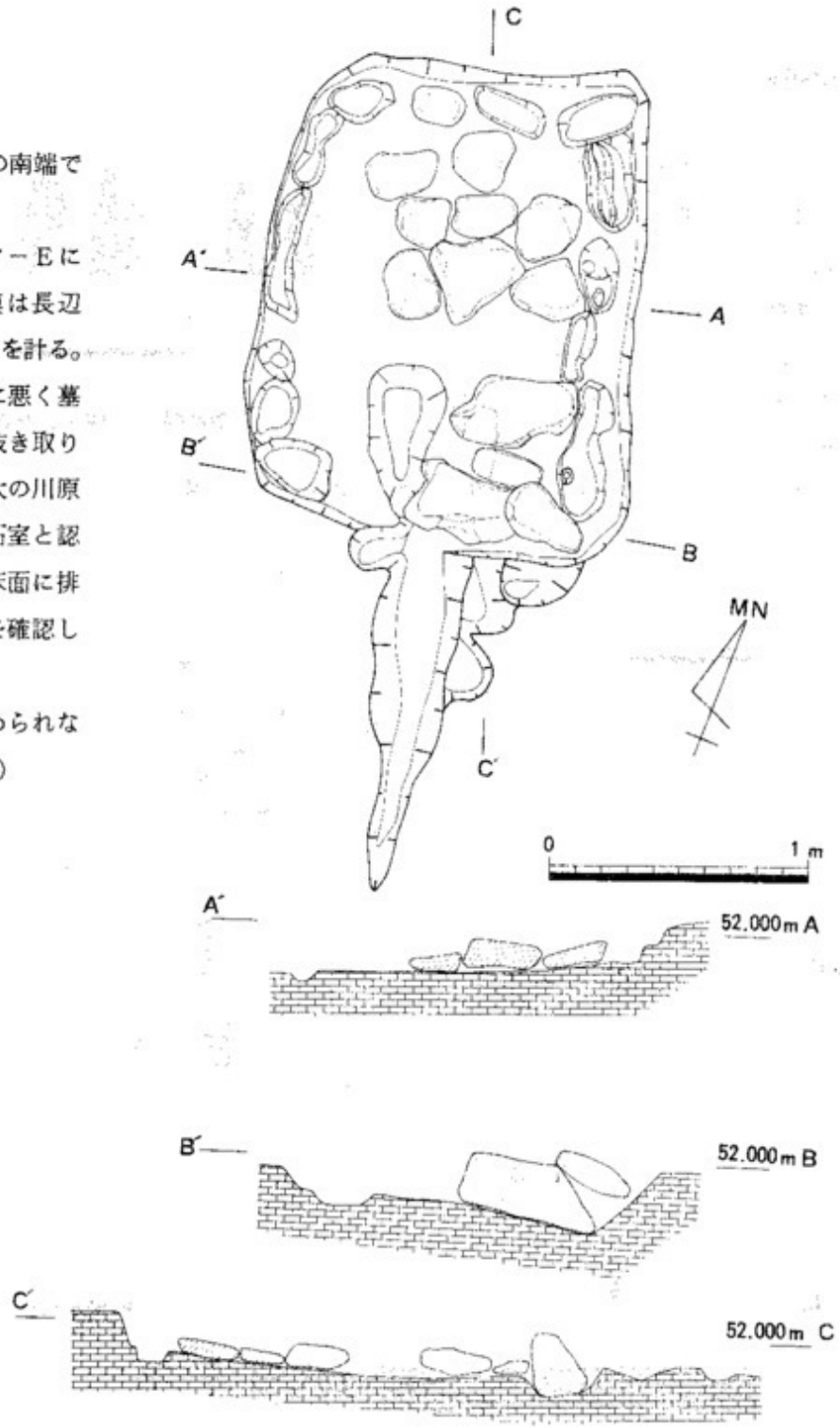
第43図　5号墳発掘終了実測図

7号墳

7号墳はⅢ区の南端で検出した。

主軸をS－16°－Eに持ち、石室規模は長辺1.3m、短辺1.0mを計る。残存状況は非常に悪く墓壙と周囲の石の抜き取り痕、床面の人頭大の川原石より小竪穴式石室と認定した。なお、床面に排水溝らしい痕跡を確認した。

出土遺物は認められなかった。（第44図）



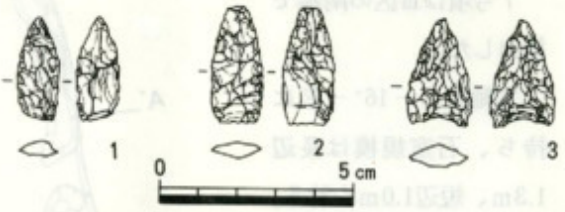
第44図　7号墳全体図

SH04

ＳＨ04は調査区のほぼ中央で検出した。

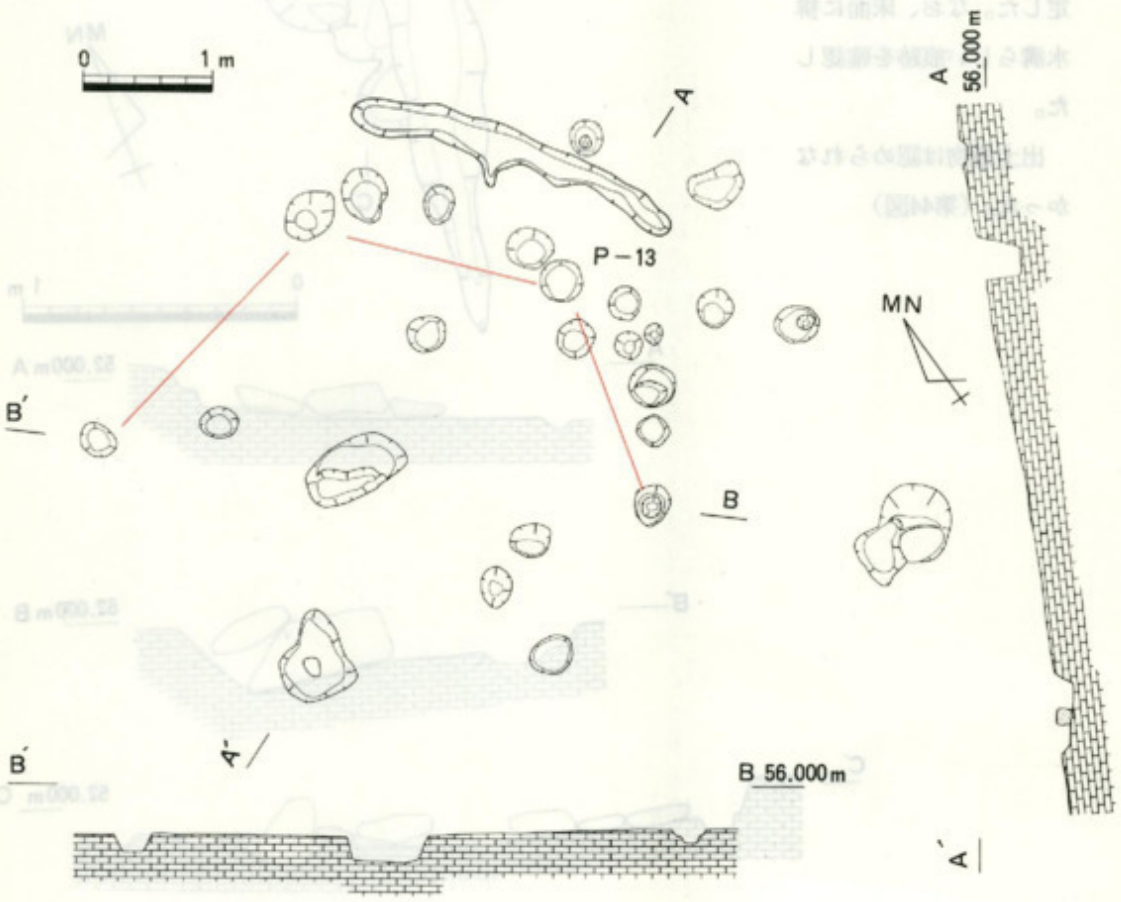
残存状況は悪く、周溝の一部と柱穴を確認したのみである。

規模（6.5m）の円形の竪穴住居址と考えられる。主柱穴は４本確認したが、おそらく６本もつものと思われ、ほぼ中心に中央坑を持つ。（第46図）



第45図　SH04出土石器

柱穴（Ｐ－13）からサヌカイト製の石鏃（凹基式１点、平基式２点）が出土した。（第45図）



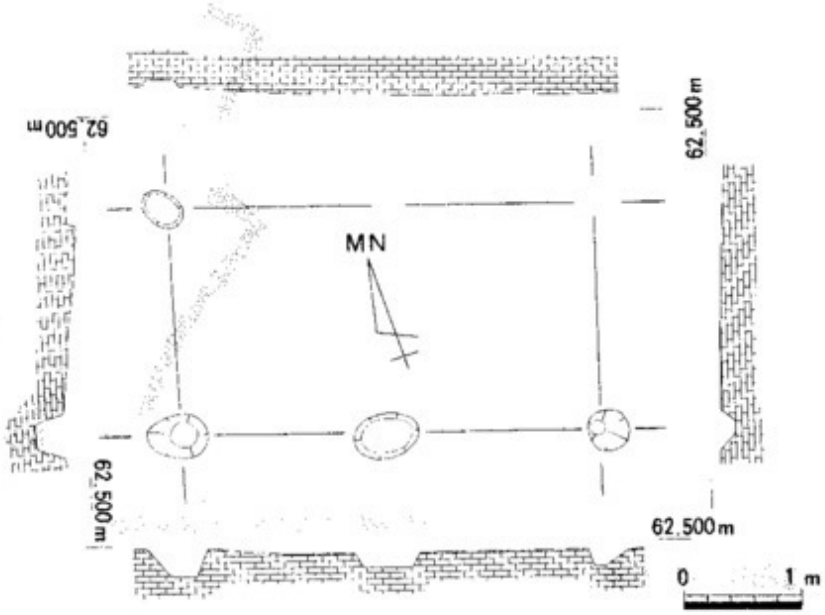
第46図　SH04平・断面図

SB05（第47図）

調査区の北部で検出した。

主軸をS－71°－Eに持つ1間×2間（195×350cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物なし。



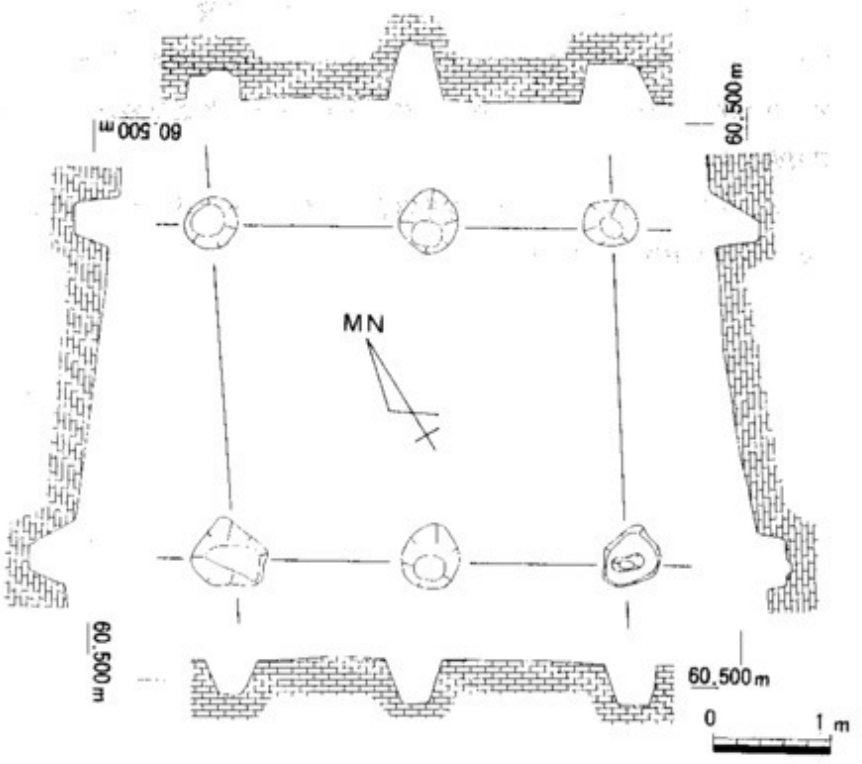
第47図　SB05平・断面図

SB06（第48図）

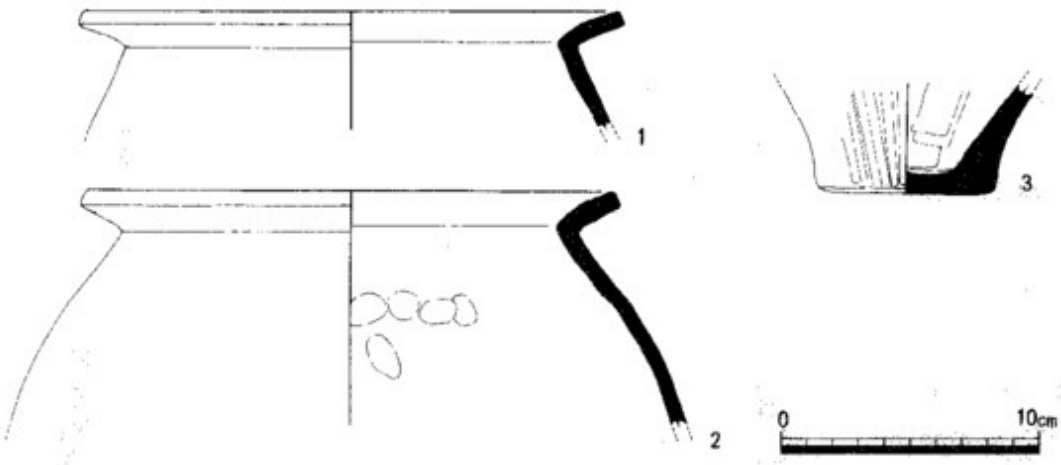
ＳＢ05の南東下方斜面で検出した。

主軸をS－58°－Eに持つ1間×2間（290×335cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器片・サヌカイト片が出土している。



第48図　SB06平・断面図



第49図　SB07出土土器実測図

SB07（第50図）

ＳＢ06の南西斜面で検出した。

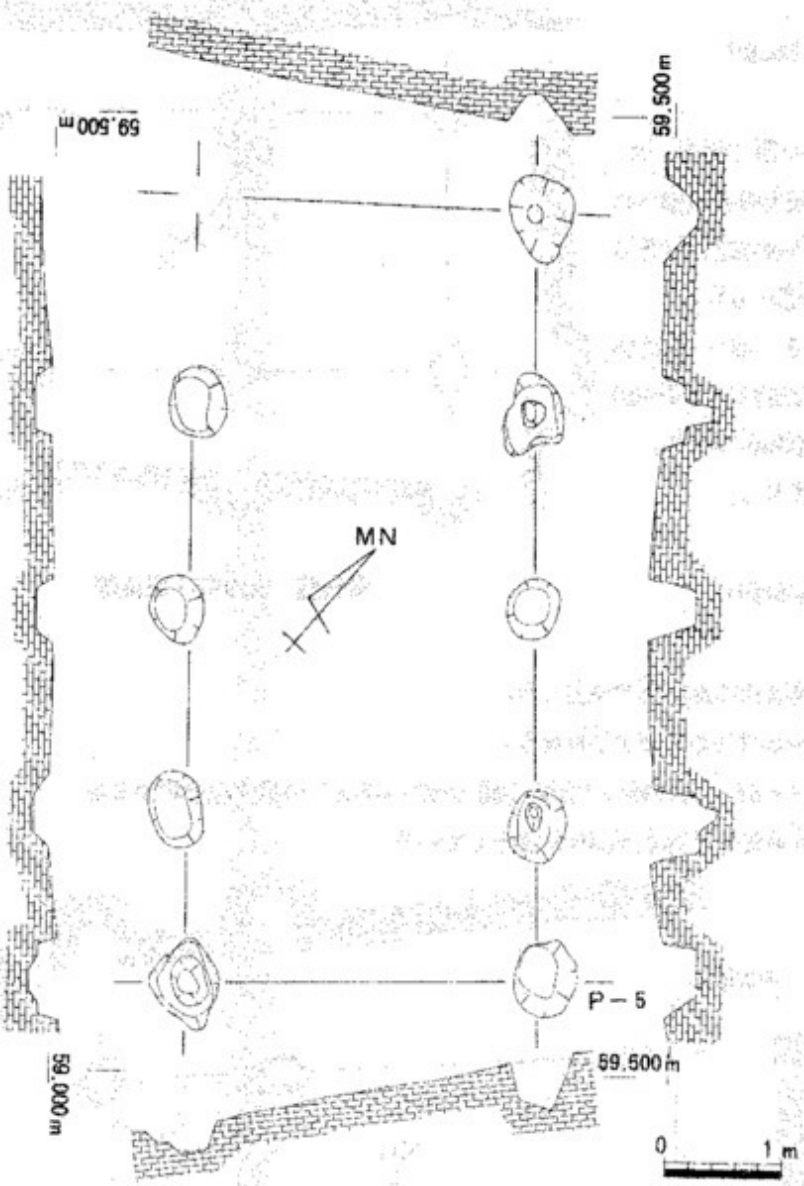
主軸をＳ－42°－Ｅに持つ１間×４間（300×680cm）の掘立柱建物址である。

Ｐ－５より弥生土器が出土している。（第49図）

１は体部から口縁部にかけて「く」の字形に外反する甕形土器である。口縁端部は比厚しない。２も１と同じ形態を呈す甕形土器である。外面及び内面口縁部と体部上半はナデ、体部下半は指頭圧痕の後ナデ調整する。３は甕形土器の底部である。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は板ナデで調整する。

なお、ＳＢ07に平行して柱穴３個を確認したが、これに伴うものであるかどうかは不明。

弥生時代中期後半と思われる。



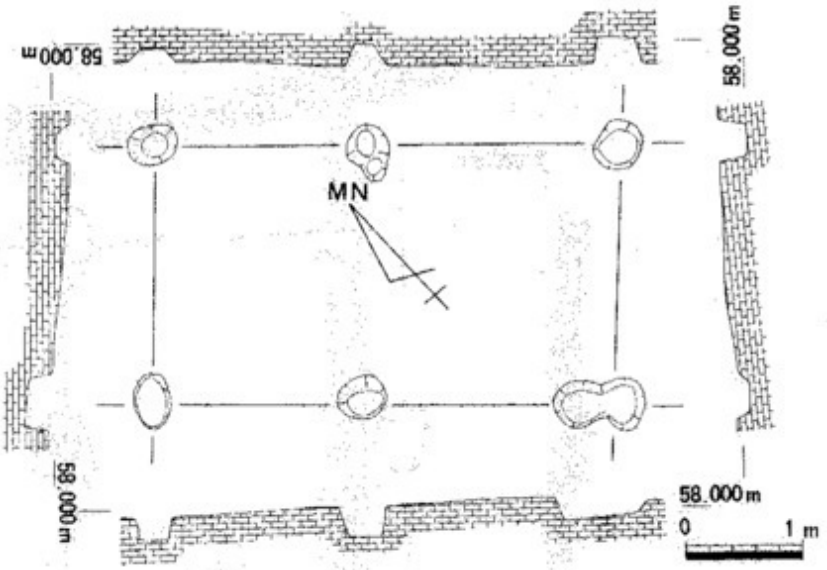
第50図　SB07平・断面図

SB08（第51図）

5号墳の西で検出した。ただし、後世の果樹園への開墾のため耕地間の段差は0.5m程度認められる。

主軸をS－46°－Eに持つ1間×2間(220×400cm)の掘立柱建物址である。

出土遺物なし。



第51図　SB08平・断面図

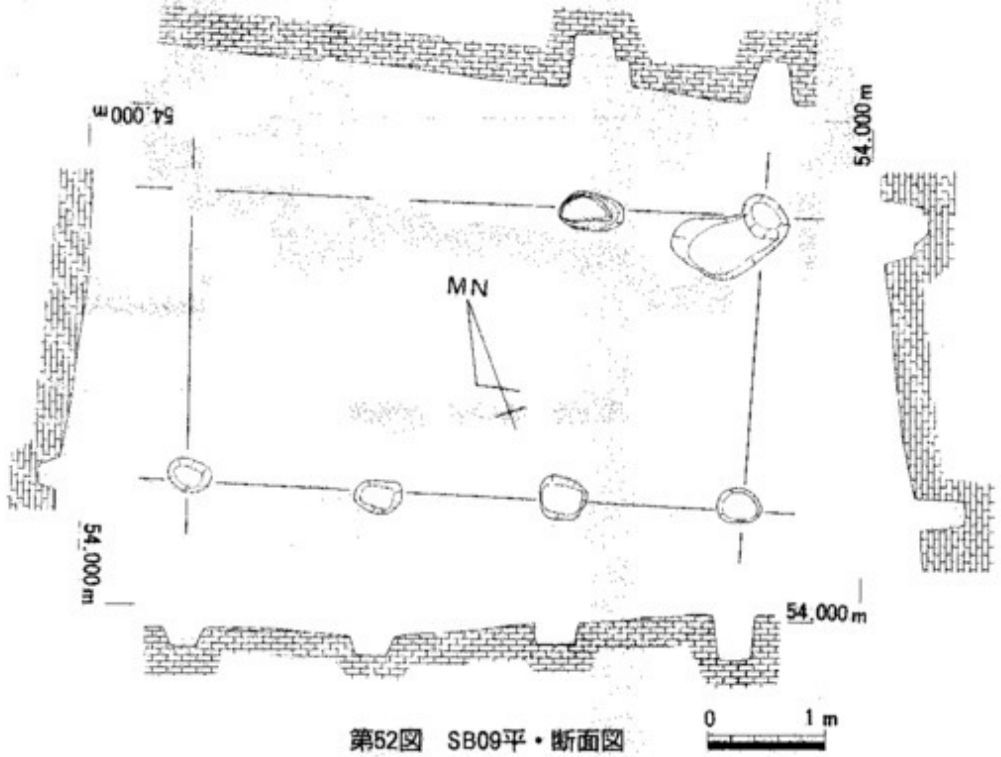
SB09（第52図）

第Ⅲ調査区内の最南端で検出した。

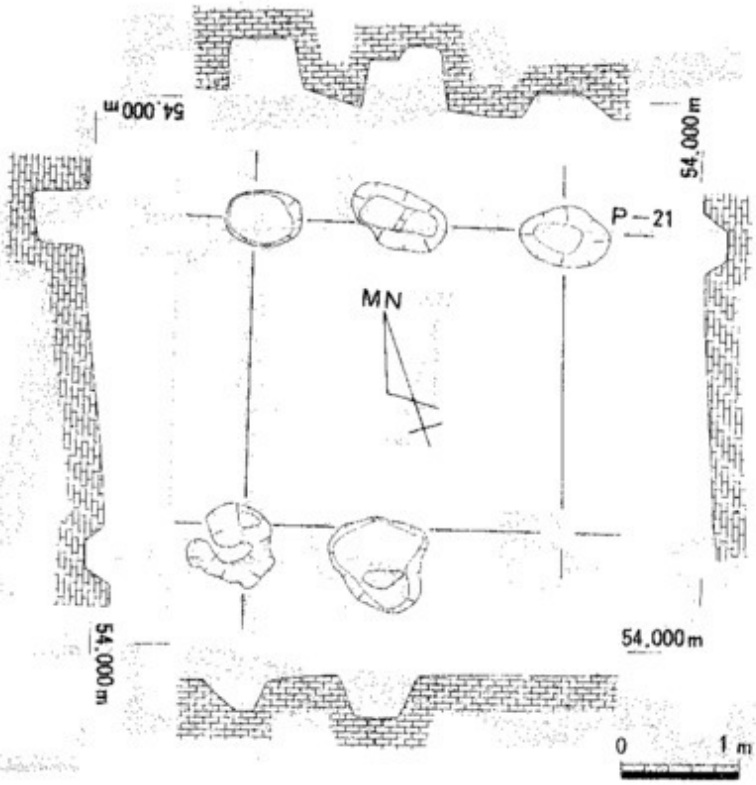
ＳＢ09～ＳＢ11の3棟が切り合う。

主軸をＳ－67°－Ｅに持つ1間×3間（250×490cm）の掘立柱建物である。

柱穴内から焼土と弥生土器片が出土している。



第52図　SB09平・断面図



第53図　SB10平・断面図

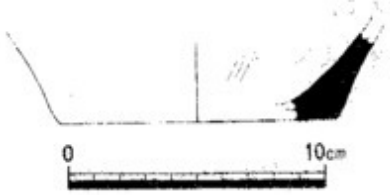
SB10（第53図）

ＳＢ09と切り合った状態で確認した。

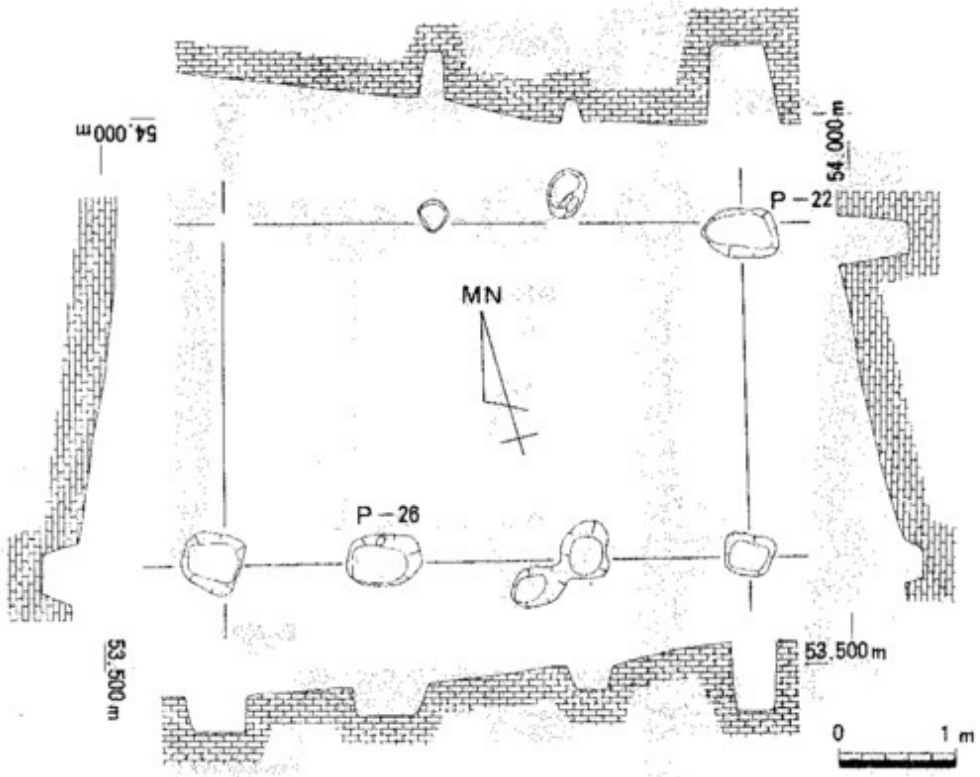
主軸をＳ－68°－Ｅに持つ１間×２間（260×260㎝）の掘立柱建物である。

Ｐ－21から弥生土器の底部が出土した。壺の底部と思われるが、調整は磨耗のため不明。（第54図）

その他柱穴内から弥生土器片・炭等が出土した。



第54図　SB10出土遺物



第55図　SB11平・断面図

SB11（第55図）

ＳＢ09と切り合った状態で確認した。

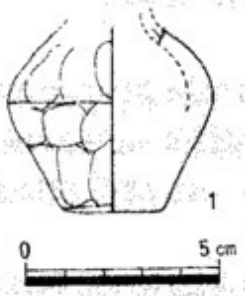
主軸をＳ－75°－Ｅに持つ１間×３間（295×460cm）の掘立柱建物である。

Ｐ－26からミニチュアの甕が出土した。口縁部を欠損するが外面に指頭圧痕の調整が認められる。（第56図）

Ｐ－22からは石鏃が1点出土した。（第57図）

サヌカイト製の平基式石鏃である。

その他の柱穴から弥生土器片も出土している。



第56図 SB11出土土器

第57図　SB11出土石器

ST01

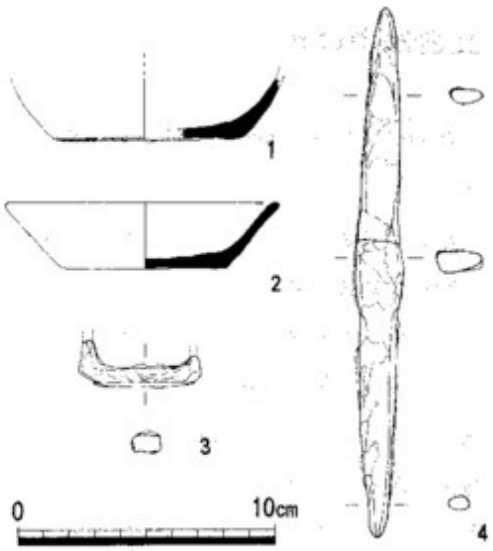
確認調査時に検出したものである。(第59図)

主軸をS－46°－Eに持ち、土壙長辺2.7m、短辺0.5～0.7mと東側が狭くなる。

木棺等の痕跡は検出できなかった。

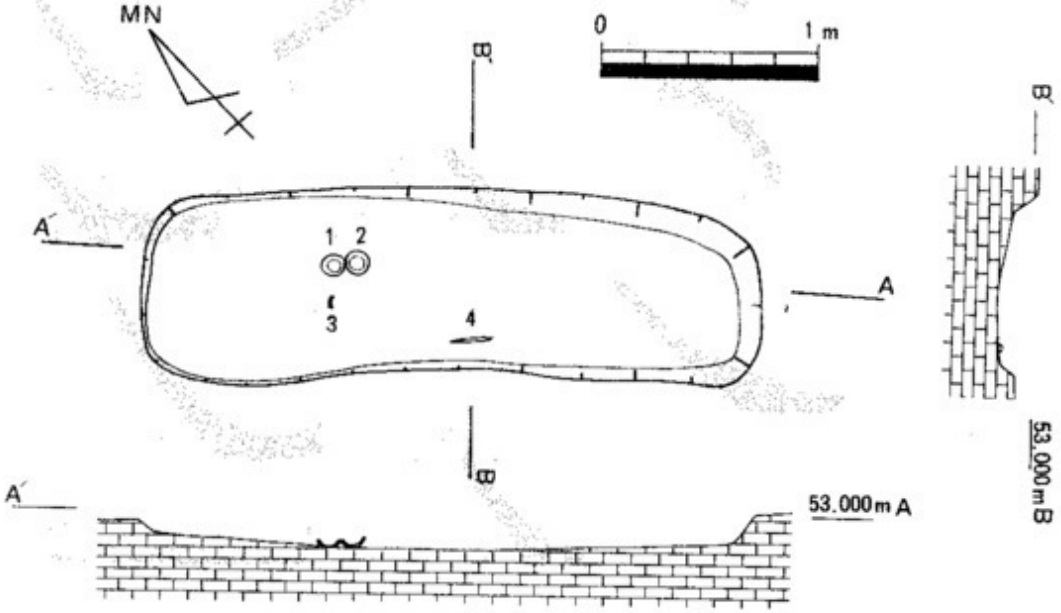
墓壙内から土師器と鉄製品が出土した。(第58図)

1は土師器坏である。2とともに長軸中央やや西よりで並んで床面上で出土した。磨耗が激しく調整は不明であるが、外面底部にヘラ切りの痕跡が認められる。2も土師器坏である。内面の調整は不明であるが、外面はヨコナデし、底部はヘラ切りしている。2個はほぼ同法量で、器形も口縁部が外方へ直線的に立ち上がる形態を呈しているものの色調が異なっている。3は鉄製品である。1・2からわずか10cm南西側で床面上から出土した。幅1cm、厚さ0.6cmの鉄棒の両端を曲げ先端部を尖らせる。用途は不明。4は長軸中央南の墓壙掘り方際で床面上より出土した。両先端部を尖らしており、小刀であろう。



第58図　ST01出土遺物実測図

以上出土遺物から平安時代頃かと思われるが、その他調査地内で平安時代頃と考えられる遺構・遺物は検出されていないため再考を要する。



第59図　ST01平・断面図

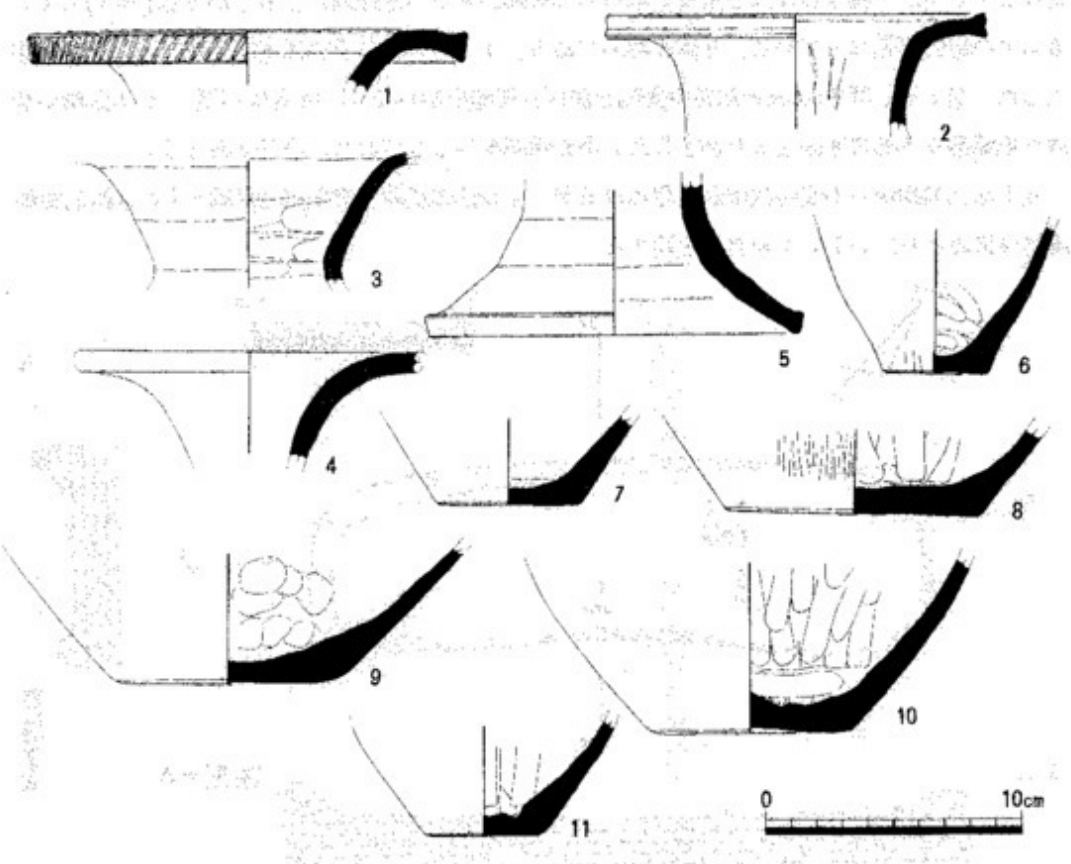
土器集中地点

住居址ＳＨ04の西約５ｍの地点で検出した。しかし、斜面耕地の関係で約0.5ｍ高い位置にある。

周辺を精査したが掘り方等は検出できなかった。

周辺に施設も確認されず、出土遺物からは１個体に復元できたものはなく、全てが破片であったことからも廃棄されたものと考えられる。（第60図）

１は壺形土器の口縁部である。大きく外反する口縁部の端部に左下がりの刻み目文を施している。２も壺形土器の口縁部である。大きく広がる口縁部とわずかに上下に拡張する端部を持つ。施文・調整とも磨耗のため不明であるが、内面口頸部に絞り目が認められる。３は壺形土器の口頸部である。外面はナデ、内面は横方向の指ナデを施す。４は壺形土器の口縁部である。端部は欠損するが、あまり比厚しないものであろう。磨耗は著しい。５は鉢形土器の脚部である。磨耗



第60図　土器集中地点出土土器実測図

のため調整は不明。6～11は弥生土器底部である。6は甕底部である。外面底部はナデ、外面体部はヘラミガキ、内面体部は指ナデが認められる。7も甕底部である。磨耗のため調整は不明。8は壺底部である。外面底部はナデ、外面体部はヘラミガキの後一部にナデ、内面は縦方向の指ナデが認められる。9も壺底部である。外面はナデ、内面に指頭圧痕が認められる。10も壺底部である。外面はナデ、内面下部は横方向、その上部は縦方向の指ナデを施す。11も壺底部である。内面に縦方向の板ナデを施す。

Ⅲ区内P－出土土器

その他柱穴から出土した土器である。(第61図)

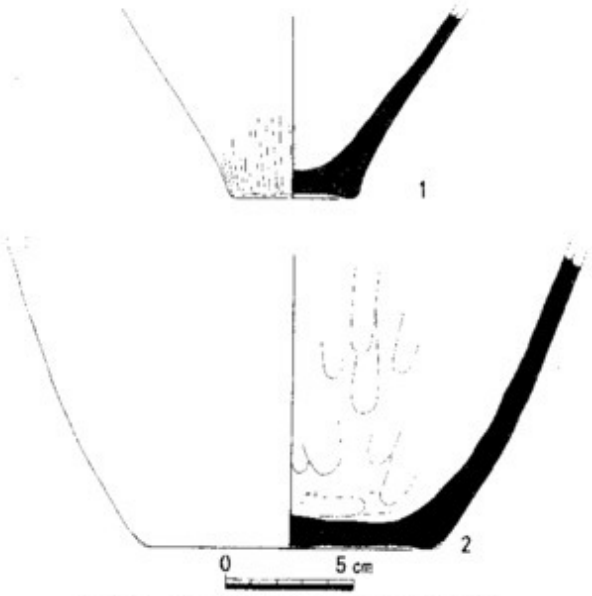
1は甕形土器である。体部から口縁部を「く」の字状に外反させ口縁端部は上方へやや比厚させる。ほとんど磨耗しているが口縁部内外面にナデが看取される。2は甕形土器の底部である。部をやや上げ底に作り、外面体部はナデ、内面底部は指頭圧痕で調整する。

第61図　Ⅲ区内P－出土土器実測図

Ⅲ区内包含層出土土器

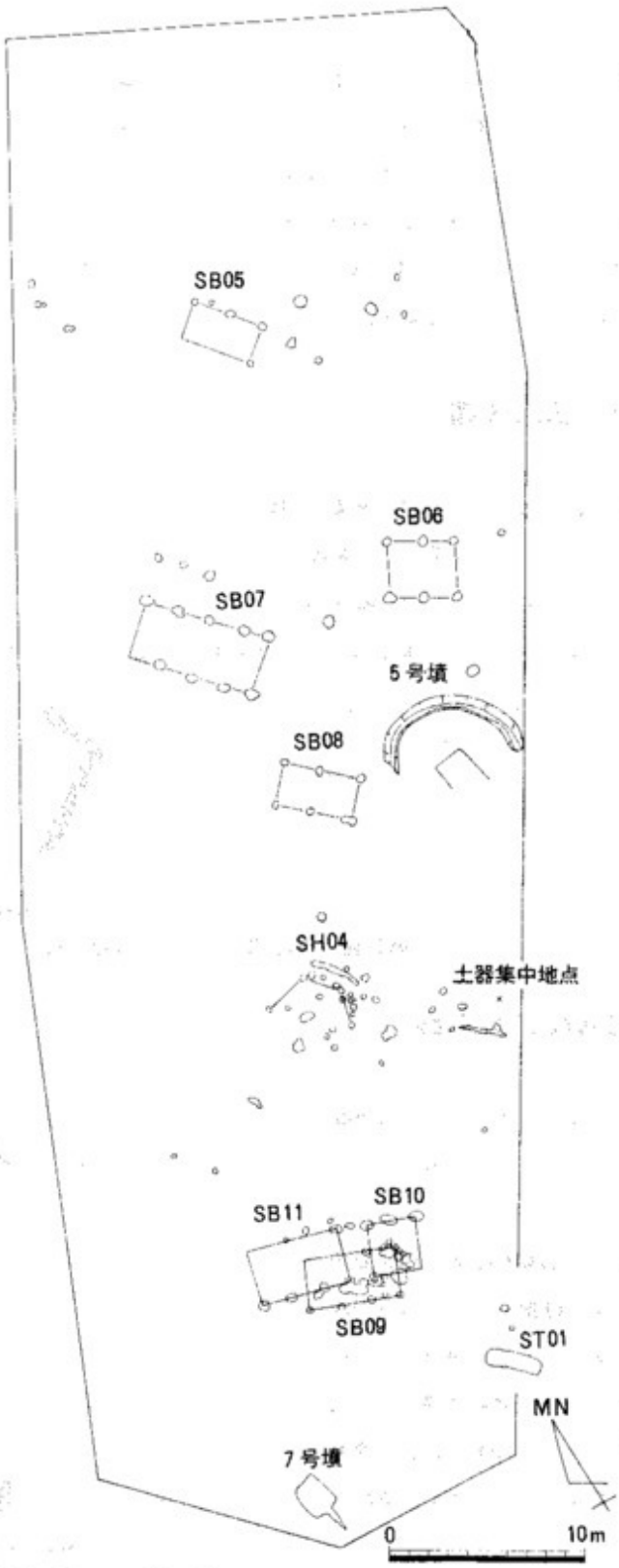
重機による表土剥ぎ中もしくは遺構面検出中に出土したものである。(第62図)

1は甕形土器底部である。底部をやや上げ底に作り範囲は不明であるが外面はヘラミガキ、内面は指ナデする。2は壺底部である。磨耗が著しいが、外面の一部にナデ、内面に底部は横方向、その上部は縦方向のナデが認められる。



第62図　Ⅲ区内包含層出土土器実測図

第63図　Ⅲ区遺構全体図



4．Ⅳ区

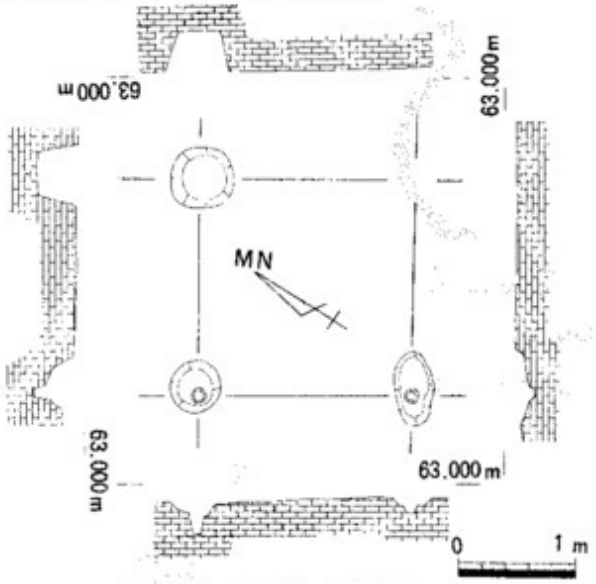
Ⅳ区では掘立柱建物７棟、溝状遺構１棚、状遺構１を確認した。（第75図）

SB12（第64図）

調査区の上部で確認した。

主軸をＳ－33°－Ｅに持つ１間×１間（190×190cm）の掘立柱建物である。

出土遺物はなし。



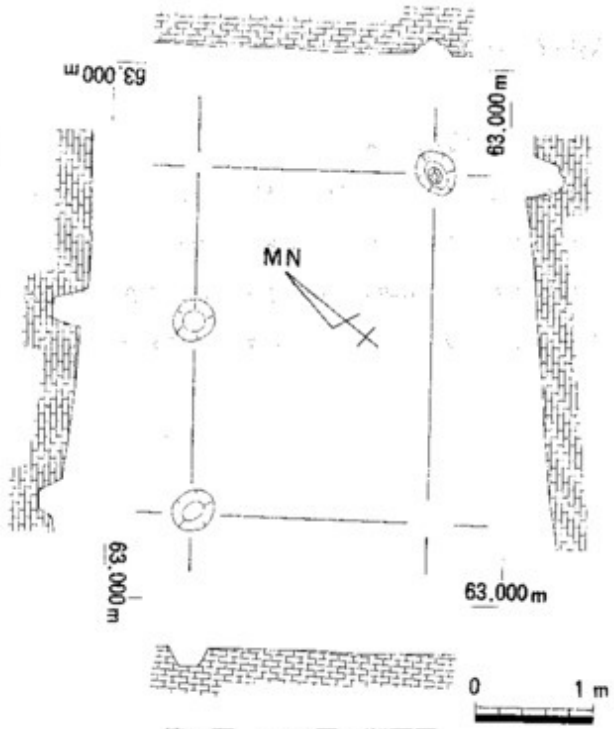
第64図　SB12平・断面図

SB13（第65図）

ＳＢ12のやや東斜面で検出した。

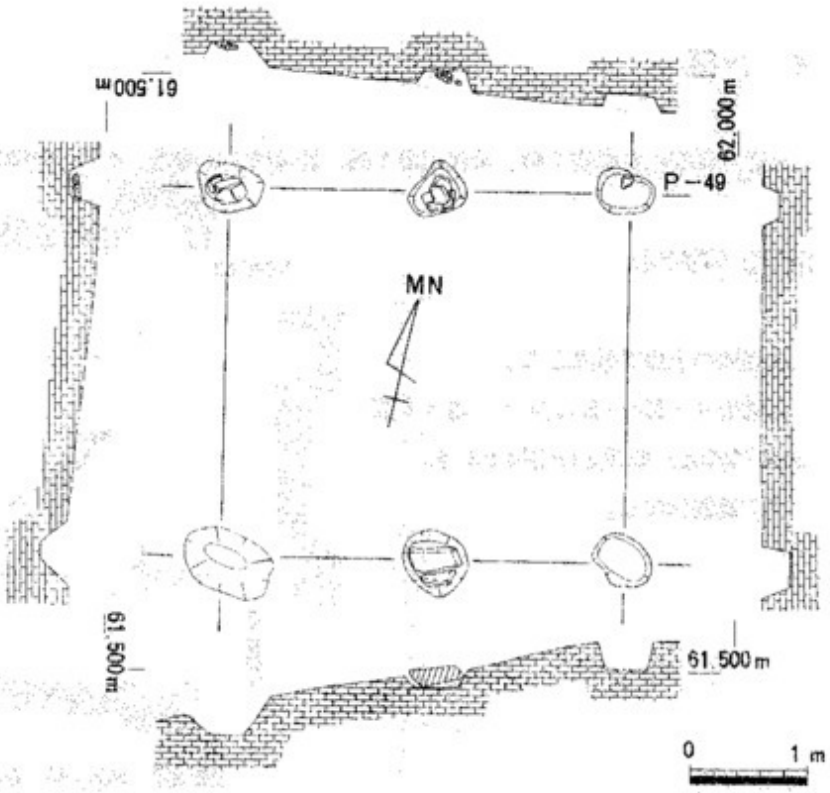
主軸をＮ－52°－Ｅに持つ１間×２間（205×295cm）の掘立柱建物である。

出土遺物はなし。



第65図　SB13平・断面図

第66図
SB14出土土器



第67図　SB14平・断面図

SB14（第67図）

ＳＢ12の西斜面で検出した。

主軸をＮ－79°－Ｅに持つ１間×２間（315×345cm）の掘立柱建物である。

Ｐ－49から弥生土器のミニチュア壺が出土している。（第66図）

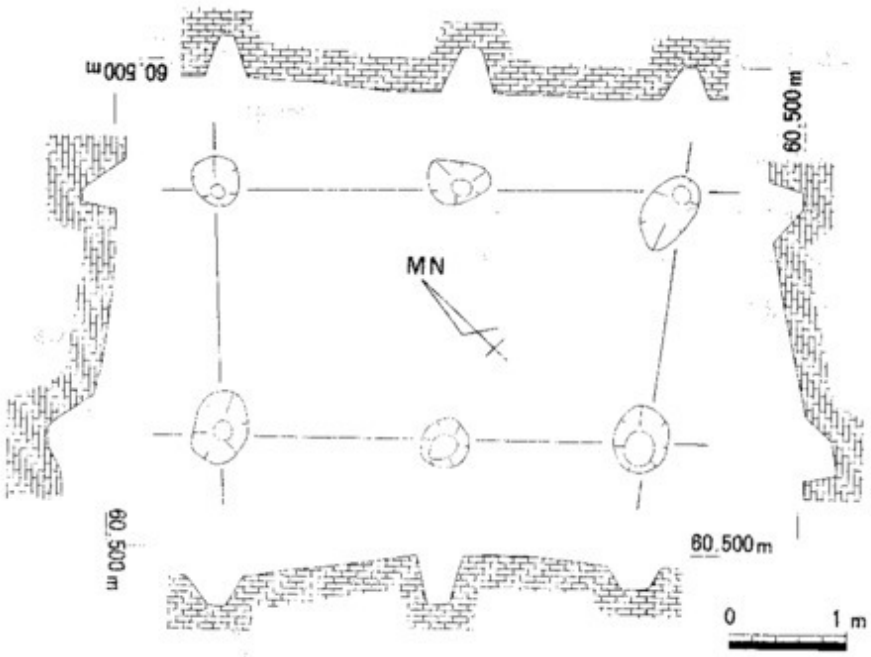
外面体部上半の調整は不明であるが、下部には指頭圧痕がみられ、口縁部にナデが認められる。内面は板状のものによるナデを施す。祭祀用であろうか。

SB15（第68図）

ＳＤ01の東で確認した。

主軸をＳ－42°－Ｅに持つ１間×２間（205×395cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



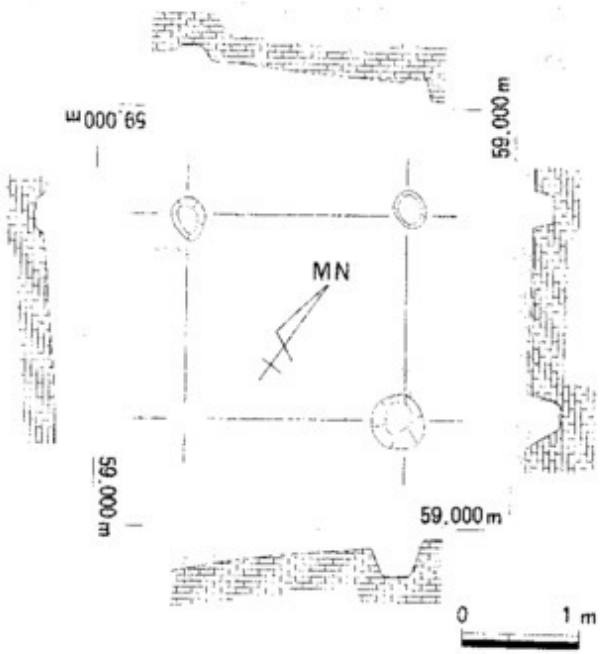
第68図　SB15平・断面図

SB16（第69図）

調査区の西部で確認した。

主軸をＮ－53°－Ｅに持つ１間×１間（190×280cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内からサヌカイト片が出土している。



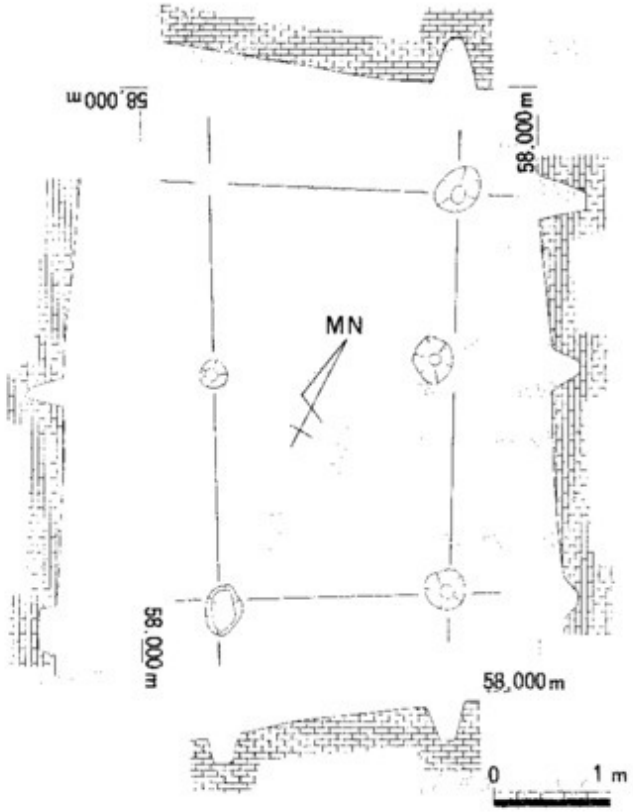
第69図　SB16平・断面図

SB17（第70図）

ＳＢ16の南斜面で検出した。

主軸をＳ－28°－Ｅに持つ１間×２間（195×340cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



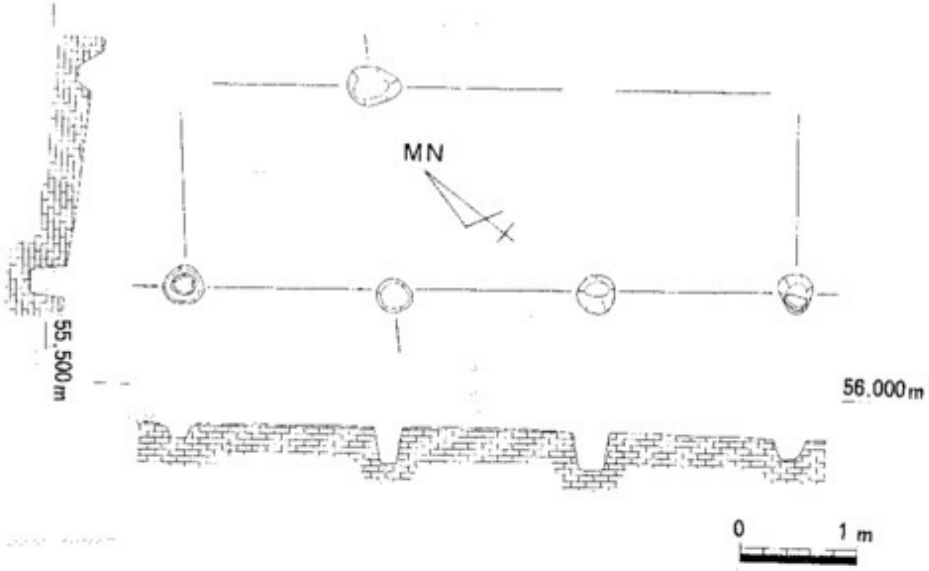
第70図　SB17平・断面図

SB18（第71図）

調査区の南端で確認した。

主軸をＳ－38°－Ｅに持つ１間×３間（190×520cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



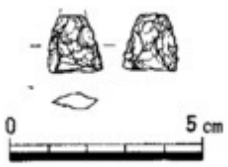
第71図　SB18平・断面図

Ⅳ区内Ｐ－出土土器・石器

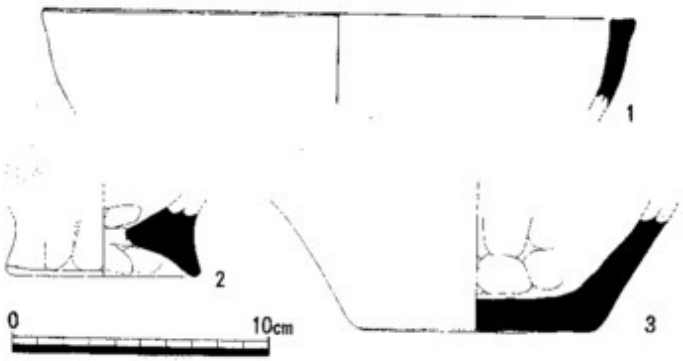
その他の柱穴から出土した土器及び石器である。(第72図・第73図)

1はサヌカイト製の平基式石鏃である。

1は鉢形土器である。磨耗のため調整は不明。2は甕である。内外面とも指頭圧痕で調整する。3は壺底部である。内面に指頭圧痕が認められる。



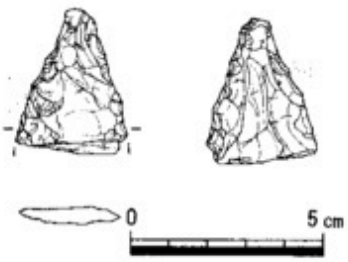
第72図　Ⅳ区内Ｐ－出土石器



第73図　Ⅳ区内Ｐ－出土土器

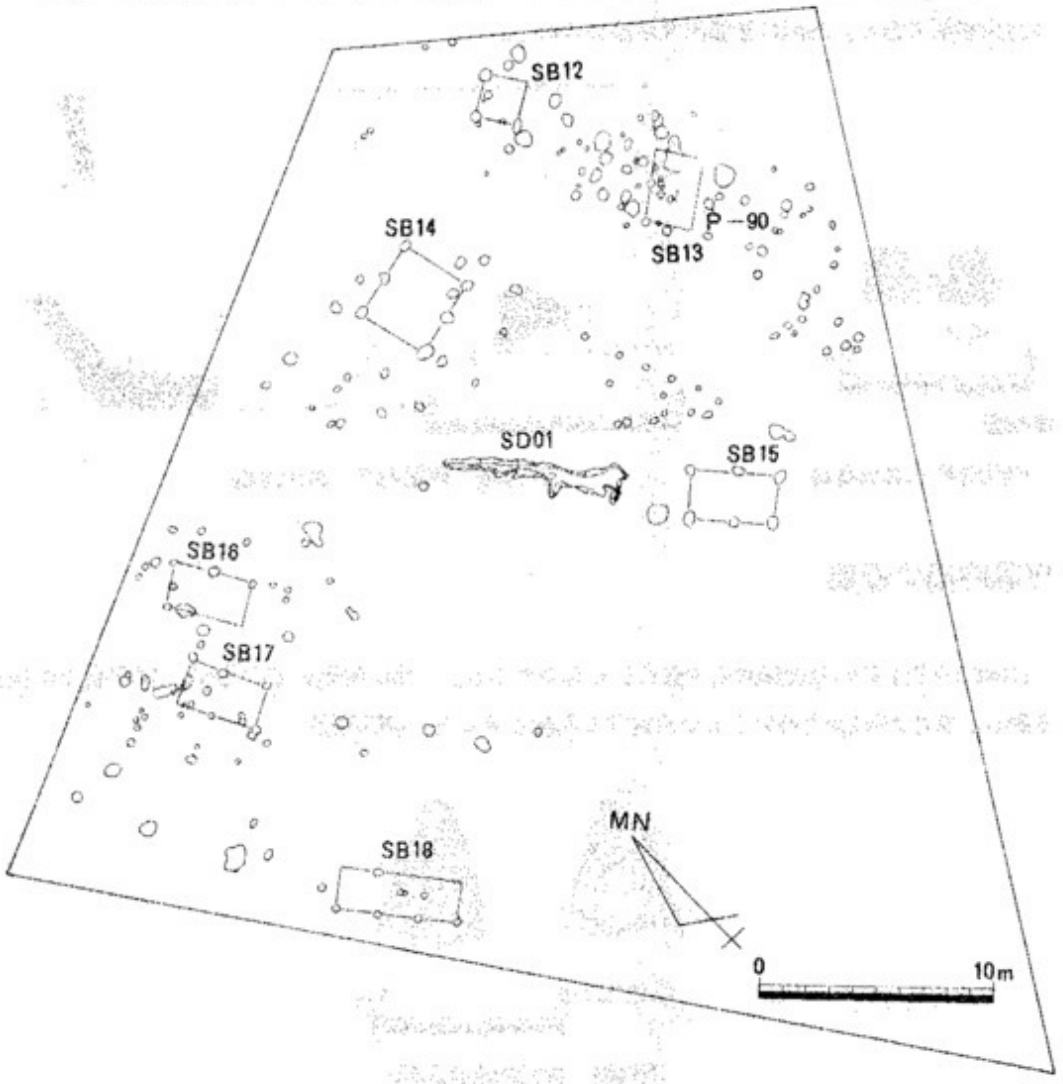
Ⅳ区内出土石器

Ⅳ区内の最上部の包含層除去中採集したものである。一部が欠損しているが、現存長で3.7cmを測る。厚さが0.4mmと薄いことから大型の石鏃と考える。(第74図)



第74図　Ⅳ区内出土石器

第75図　Ⅳ区遺構全体図



5．V区

V区では竪穴住居址７棟、掘立柱建物址12棟、溝状遺構２本を確認した。（第103図）

SH01・02（第77図）

確認調査時に検出していたものである。その際はＳＨ02のみであったが、今回の調査で２棟が切り合っていることを確認した。

残存状況は悪く、耕地造成時にＳＨ02が半壊されている。

土層の観察よりＳＨ01がＳＨ02に先行する。

ＳＨ01は規模（５ｍ）の円形住居址である。主柱穴は２本確認したがおそらく６本持つものと思われる。

ＳＨ02は規模（4.2m）の方形住居址と考えられる。この住居址内からは焼土・炭等が出土していることから焼失家屋と考えられる。主柱穴は３本検出しているがおそらく６本あったものと考えられる。また、このＳＨ02の周囲にめぐる柱穴(1)～(5)は屋根を支える支え木であろう。

さらに同心円上の位置にめぐる溝状遺構はＳＨ02の排水溝であろうか。

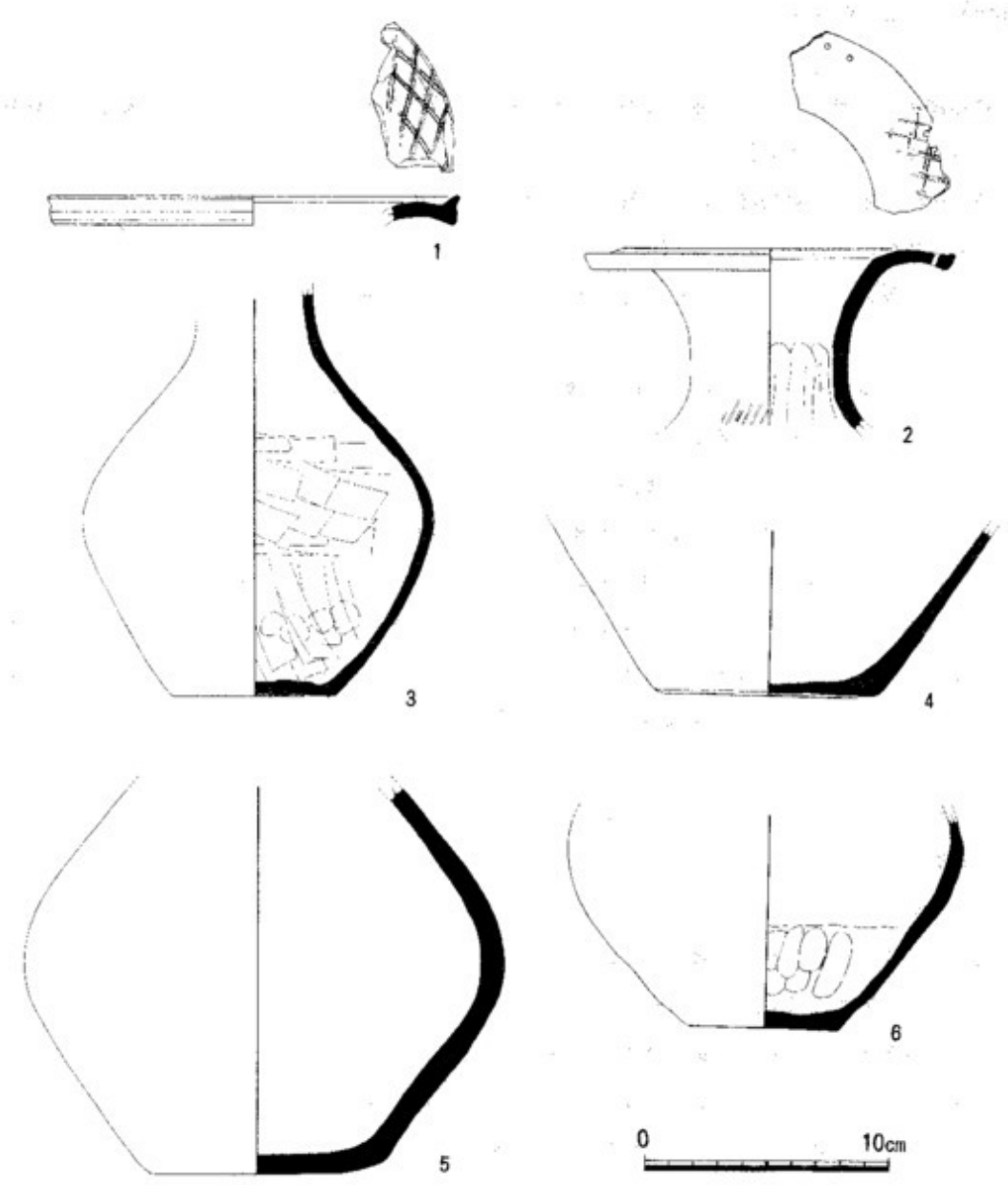
これらの住居址内からは弥生土器・石器・サヌカイト片が出土した。（第76図）

１はＳＨ02埋土から出土した。大きく外反する口縁部を持つ壺形土器である。口縁端部に２条の凹線文を持ち、内面口縁部には斜格子文を施す。２もＳＨ02埋土出土の壺形土器である。大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部は比厚しない。口縁部に２個一対の穿孔を持つ。外面頸部に左下がりの刻み目文を施す。３はＳＨ02内の周溝から出土した壺形土器である。周溝底面に接し外壁にもたれかけさせていたような状態で出土した。口縁部は欠損するが、内面は底部を指頭圧痕で調整したのち縦方向の板ナデ、その上部は横方向の板ナデ、体部上半から口縁部にかけては指ナデを施す。４はＳＨ02埋土出土の壺形土器底部である。磨耗のため調整は不明。５はＳＨ02床面出土の壺形土器である。磨耗のため調整は不明。６もＳＨ02床面出土の壺形土器である。内面体部下半に指頭圧痕が認められる。

１～６はサヌカイト製の石器である。（第78図）

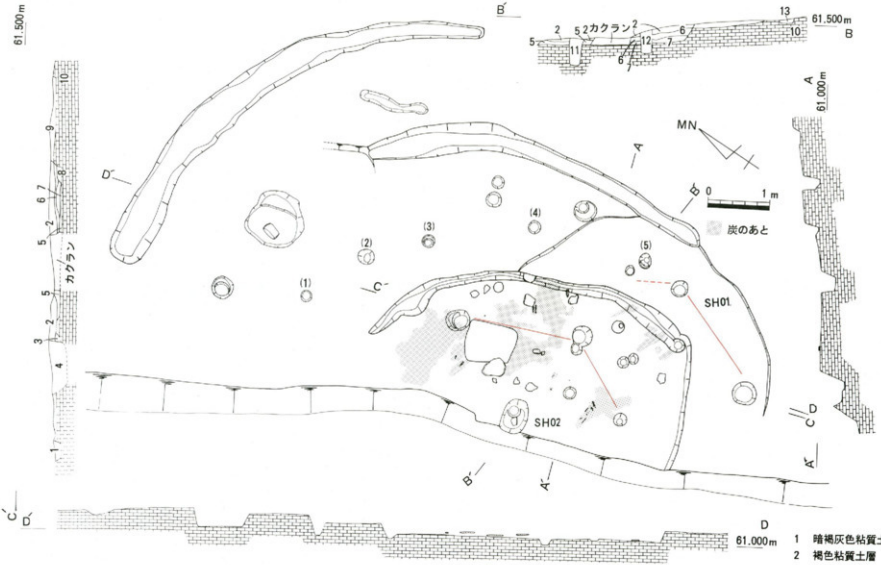
１はＳＨ01出土の凹基式石鏃である。２はＳＨ01出土の打製石錐である。３はＳＨ01出土のやや細みの凹基式石鏃である。4は大型の凸基式石鏃である。５はＳＨ02出土の刃器である。６はＳＨ02出土の平基式石鏃である。７・８・10はＳＨ02の床面から出土した叩き石である。９はＳＨ02床面出土の磨り石である。共に石材は砂岩と考えられる。

以上の出土遺物よりＳＨ01・ＳＨ02の住居址はほとんど時期差なく、弥生時代中期後半と考えられる。

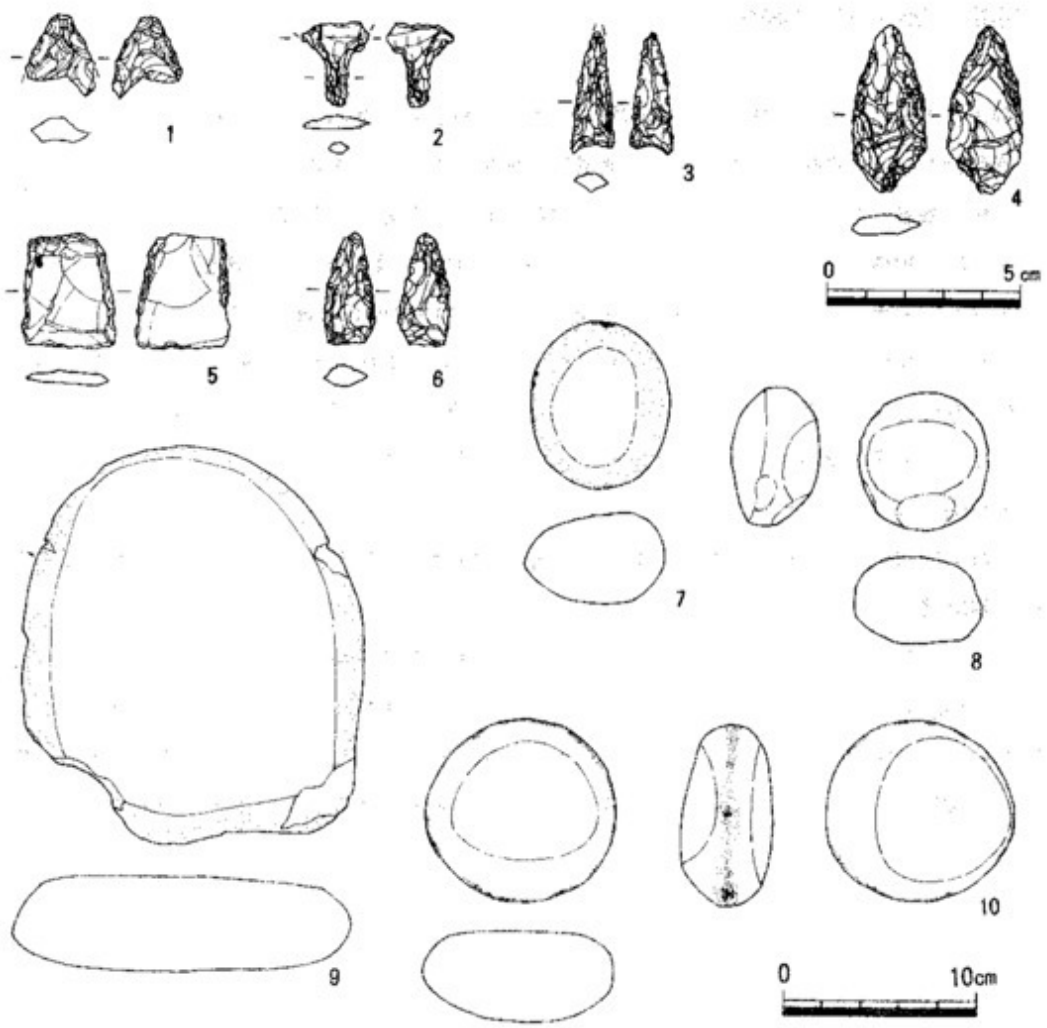


第76図　SH01・02出土土器実測図

第77図　SH01－02平・断面・土層図



1　暗褐灰色粘質土層（礫・炭混）
2　褐色粘質土層
3　褐黄色粘質土層（礫・炭混）
4　暗褐色粘質土層（礫・炭混）
5　青灰色粘質土層（炭混）
6　褐黄色粘質土層
7　明褐色粘質土層
8　青灰褐色粘質土層（炭混）
9　黄褐色粘質土層
10　黄色粘質土層（地山）
11　淡灰褐色粘質土層
12　暗褐黄色粘質土層
13　褐色粘質土層



第78図　SH01・02出土石器実測図

SH05・06・07（第82図）

調査区内の最上部に位置する。確認調査の際柱穴群として検出していたものである。

残存状況は悪く側壁の一部、柱穴、周溝等を確認したのみてある。

土層の観察よりＳＨ05→ＳＨ06→ＳＨ07の順に新しくなることが確認された。

ＳＨ05は規模（5.3m）の円形竪穴住居址と考えられる。主柱穴は４本確認した。

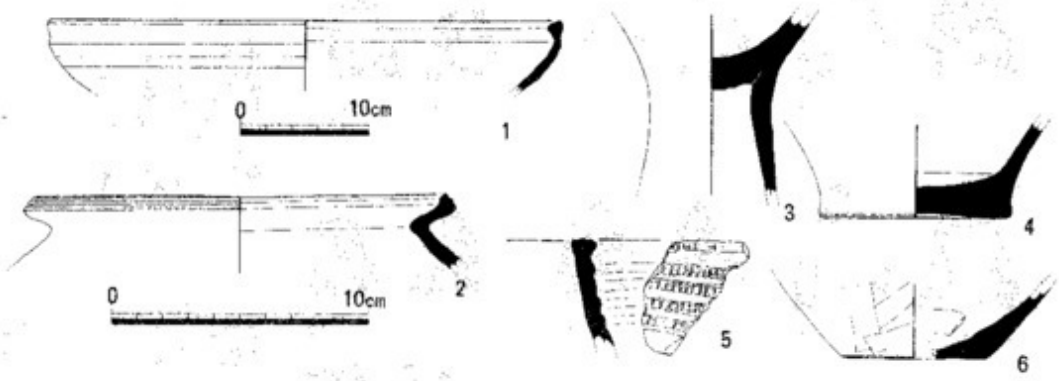
ＳＨ07は規模（4.4m）の円形竪穴住居址である。主柱穴は６本確認した。

ＳＨ07は規模（11.2m）の大型円形竪穴住居址である。主柱穴は４本確認したが、おそらく６本持つものであると考えられる。Ｐ－204はＳＨ07に伴う中央土坑であろう。また、同心円状の位置にめぐる溝状遺構もＳＨ07の排水溝であろうと思われる。

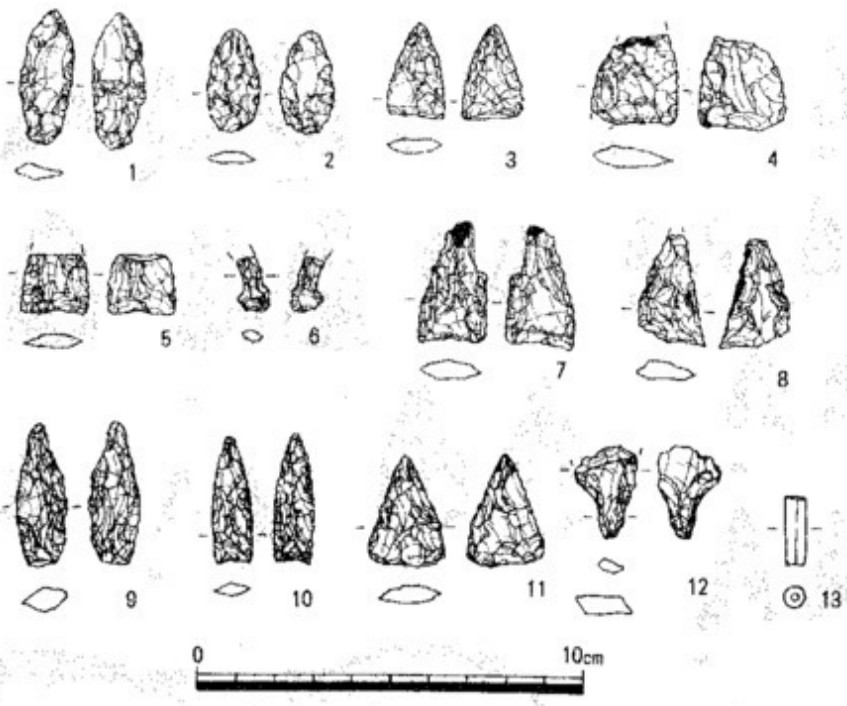
ＳＨ06・ＳＨ07の床面からは焼土・炭が出土している。

これら住居址内から弥生土器片と夥しい石器・サヌカイト片が出土している。（第79図・第80図・第81図）

１はＳＨ06出土の大型高坏である。器壁は多く剥落のため調整不明であるが、内面にわずかにハケメが認められる。２はＳＨ06出土の甕形土器である。体部から「く」の字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部は上方にのみ拡張し凹線文２条を施す。３はＳＨ07出土の高坏である。磨耗のため調整は不明。４はＳＨ07出土の甕形土器底部である。外面底部に指ナデがみられる。５・

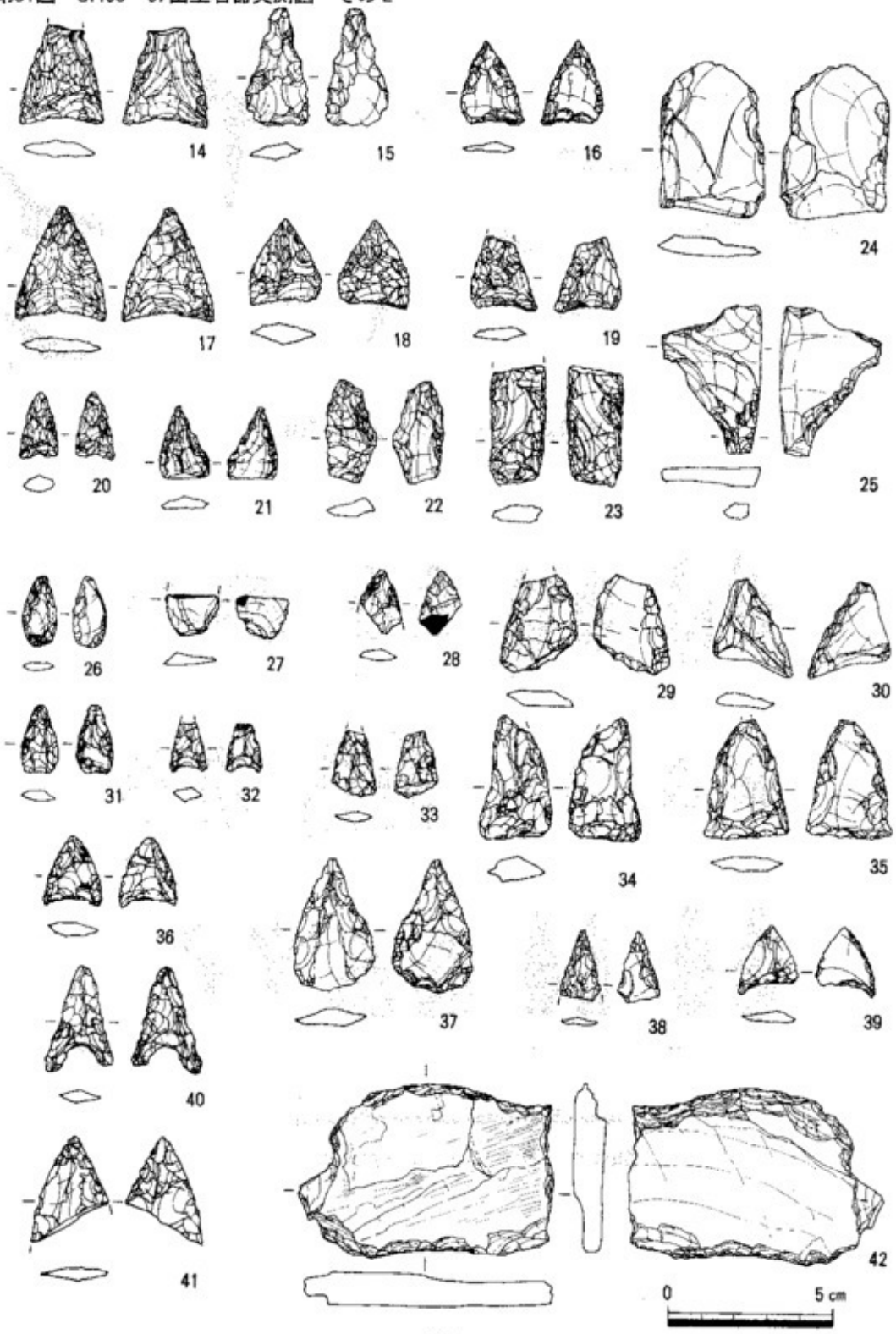


第79図　SH05～07出土土器実測図

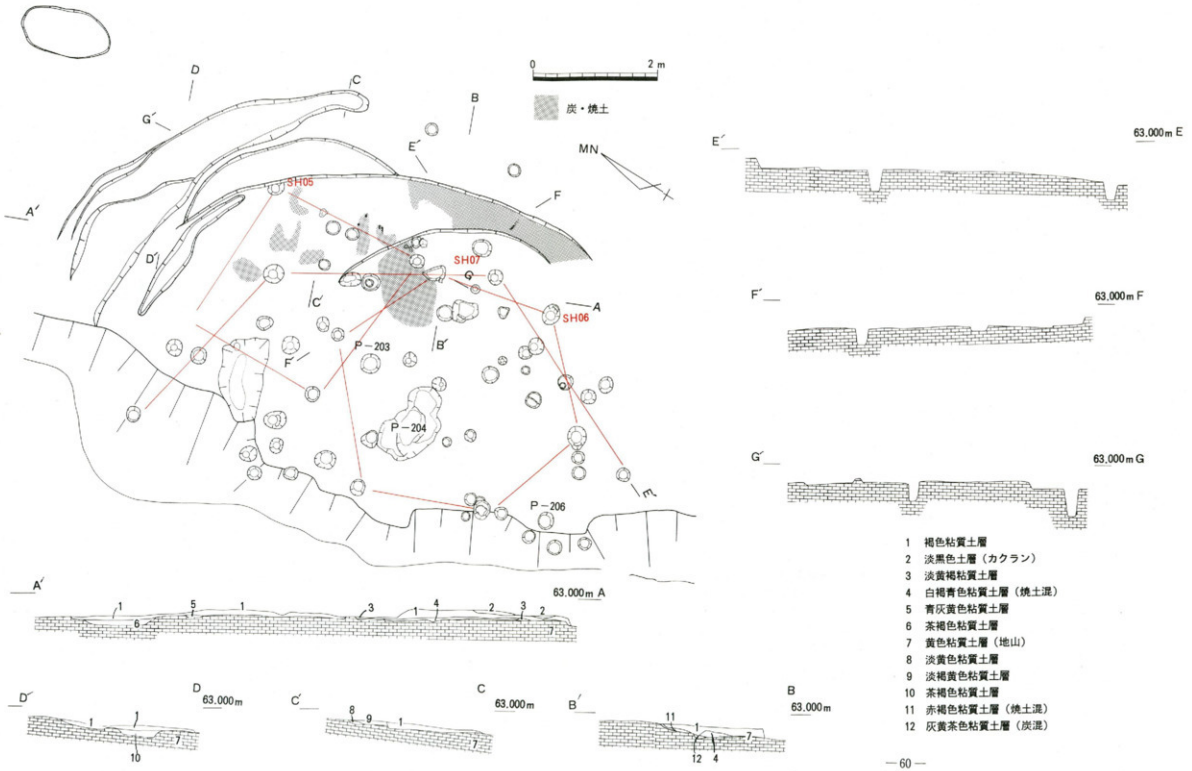


第80図　SH05～07出土石器実測図　その1

第81図　SH05～07出土石器実測図　その2



第82図　SH05～07平・断面・土層図



6はSH07の周溝内出土の土器である。5は直口壺の口縁部である。5条の凹線文を施しその間の凸部に刻み目文を施す。6は壺形土器底部である。内外面とも板ナデを施す。

1・2はSH05に伴うP－203から出土したもので、1は凸基Ⅱ式石鏃、2は凸基Ⅰ式石鏃である。3・4はSH07に伴うP－204から出土した平基式石鏃である。4はやや大型である。8はP－206出土の平基式石鏃である。5～7・9～25は住居址検出中に出土したものである。5は平基式石鏃である。6は打製石錐である。7は平基式の石鏃である。9・10は細みの平基式石鏃である。11は平基式石鏃である。12は打製石錐である。13は灰緑色の碧玉製管玉である。直径5㎜、穿孔径2㎜を計り、一方向から穿孔し、表面は平滑に磨き上げている。14・17は大型の凹基式石鏃である。16・18・19・21も平基式石鏃である。20は凹基式石鏃である。22は楔形石器である。23は小石刀である。刃部を鋭利に整形している。24はスクレイパーである。両縁に刃部を作る。25もスクレイパーであろう。

26～30はSH05内から出土した。26・27は平基式、29・30は凹基式の石鏃である。28は半壊するため形式は不明。31～37はSH06出土石器である。31・33は平基式石鏃である。32は凹基式石鏃である。先端部を欠損する。34・35は大型の平基式石鏃である。いずれも先端部を欠損する。36は完形の凹基式石鏃である。37はスクレイパーである。38～42はSH07から出土したものである。38は基部を欠損するため形態は不明であるがやや小型の石鏃である。39は凹基式の石鏃で完形である。40は基部が大きく内彎する凹基式石鏃である。41は大型の石鏃である。基部を欠損するため形態は不明。42は石包丁である。所謂「伊予石」と呼ばれる点紋角閃片岩製のもので一部を欠損する。

以上の出土遺物及び図化できなかったもののSH05出土の土器を観察しても3棟の竪穴住居址に大きな時期差は認められない。弥生時代中期後半であろう。

SH08（第83図）

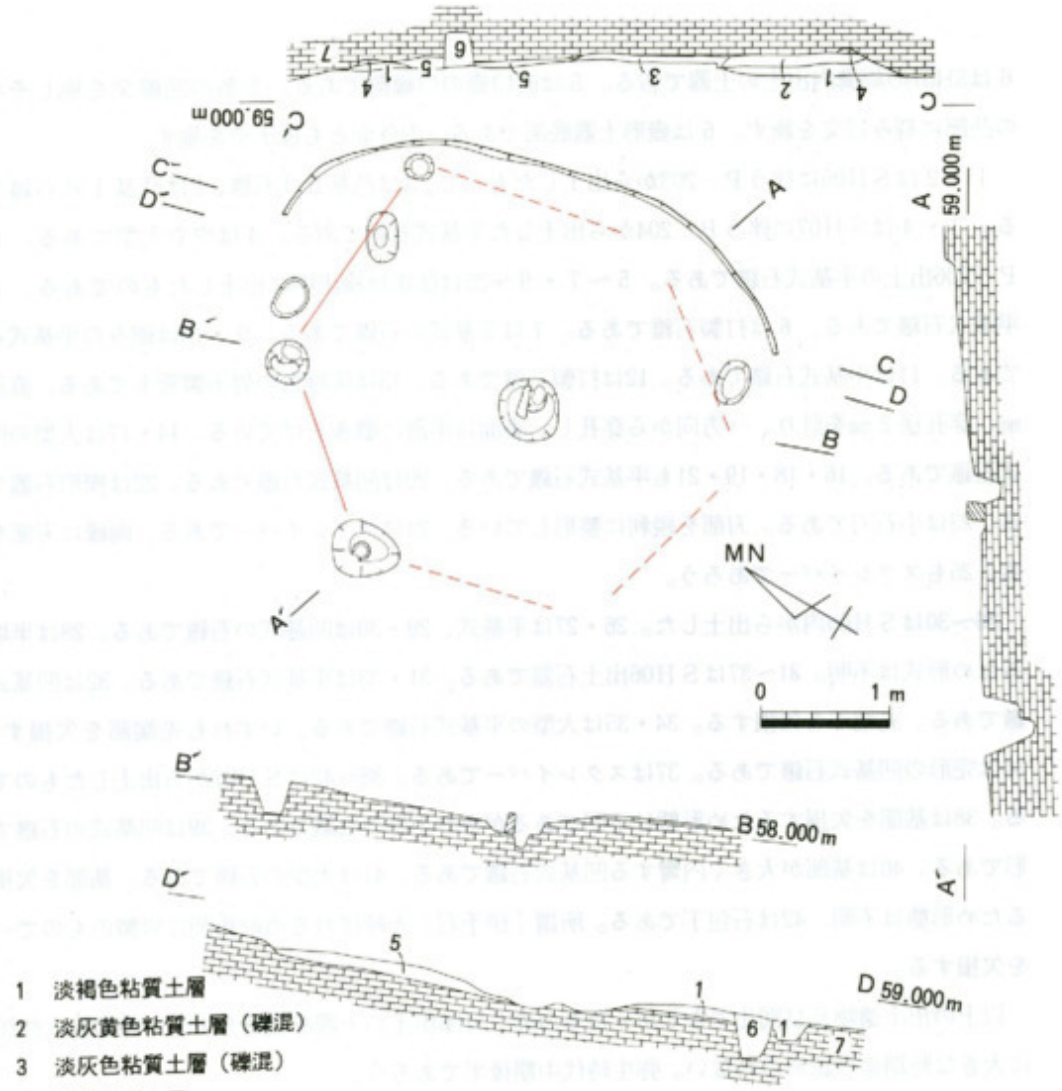
調査区の中央部で検出した。

残存状況は悪く側壁の一部と柱穴を確認したのみである。

規模（4.0m）の隅丸方形竪穴住居址である。主柱穴は3本確認したが、6本あったものと考えられる。ほぼ中心には中央土坑を持つ。土層の観察より、住居址内の東から南には周溝がめぐっていたと考えられる。

住居址内からほとんど遺物は出土しなかった。

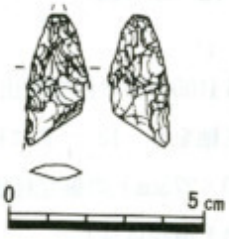
住居址廃絶後、なんらかの建物が営まれたらしく、柱穴が確認された。



1 淡褐色粘質土層
2 淡灰黄色粘質土層（礫混）
3 淡灰色粘質土層（礫混）
4 灰色粘質土層
5 白褐色粘質土層（礫混）
6 灰青色粘質土層
7 黄色粘質土層（地山）

第83図　SH08平・断面・土層図

SH11（第85図）



第84図　SH11出土石器

Ⅳ区Ⅴ区にまたがって確認された。

やはり残存状態は悪く、側壁の一部、柱穴を確認したのみである。

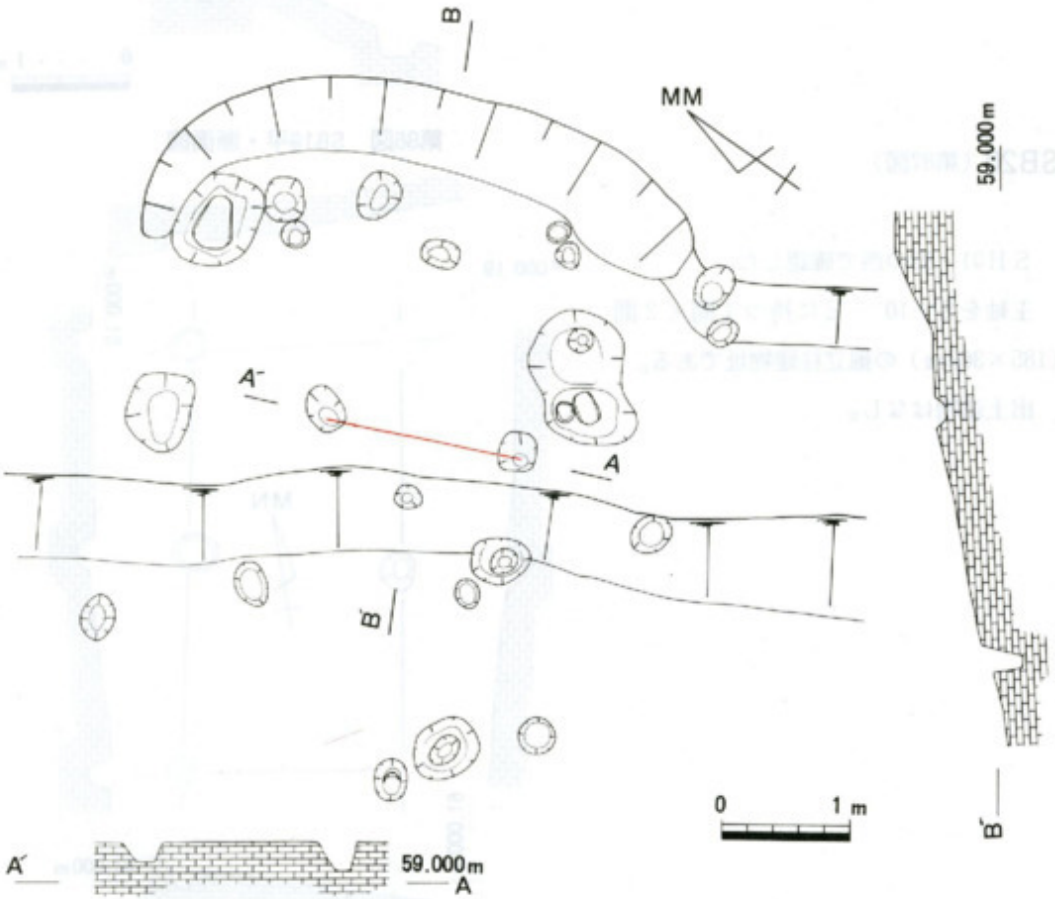
規模（4.4m）の隅丸方形竪穴住居址と考えられる。

住居址内からわずかに弥生土器片と石鏃が1点出土したのみである。

1はサヌカイト製の石鏃である。（第84図）

先端部と基部を欠損するため形式は不明。

ＳＨ11に切り合ってＳＢ56が存在するがその前後関係については不明である。



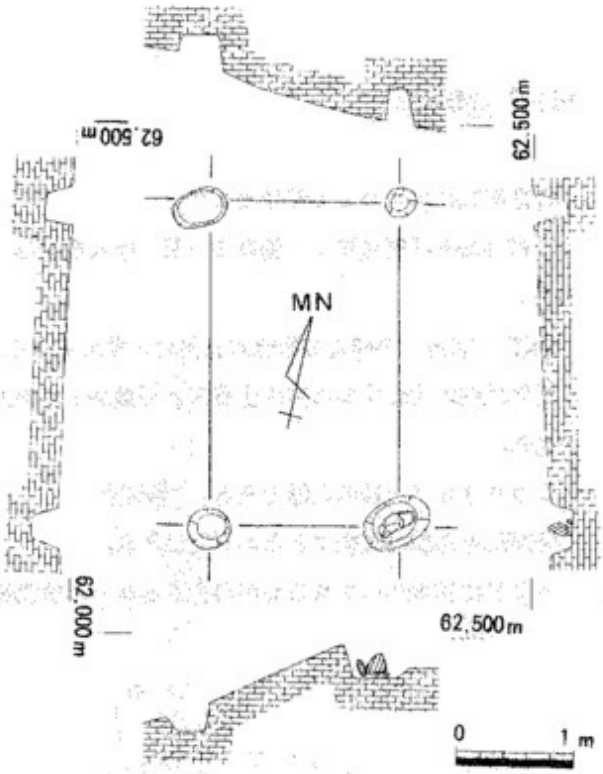
第85図　SH11平・断面図

SB19（第86図）

ＳＨ05～07の西で検出した。

主軸をＳ－12°－Ｅに持つ１間×１間（160×275cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



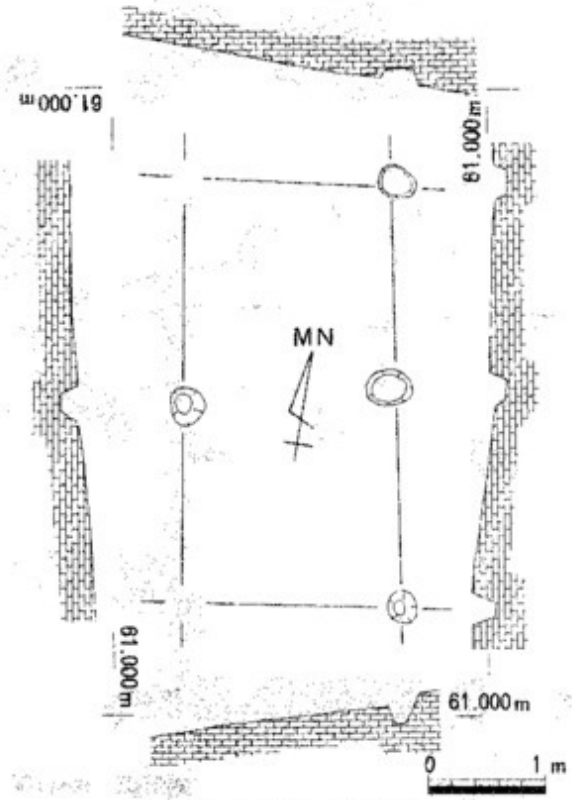
第86図　SB19平・断面図

SB20（第87図）

ＳＨ01・02の西で確認した。

主軸をＳ－10°－Ｅに持つ１間×２間（185×365cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第87図　SB20平・断面図

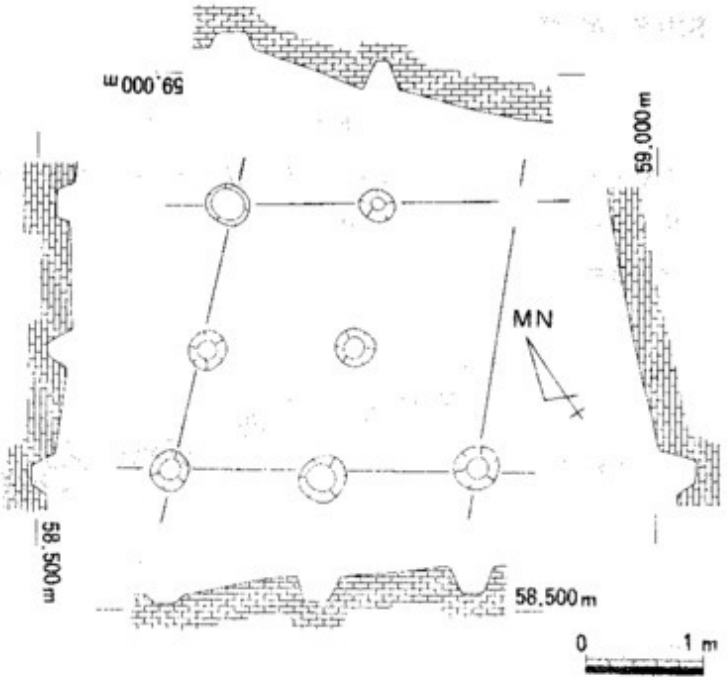
SB21（第88図）

ＳＨ11の西で確認した。

主軸をＳ－55°－Ｅに持つ１間×２間（230×250cm）の掘立柱建物址である。

中央にも柱穴を持ち、床面を支えていたものと考えられ、倉庫としての使用されていたものであろう。

出土遺物はなし。



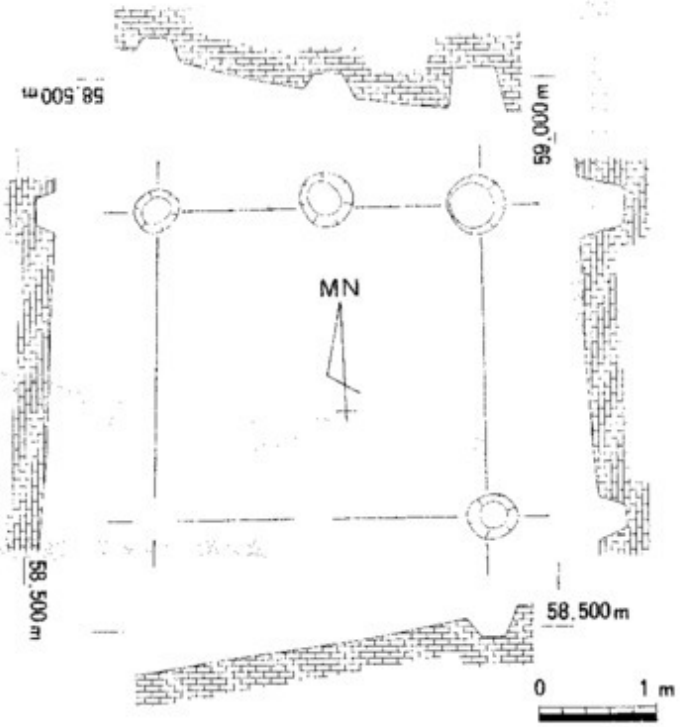
第88図　SB21平・断面図

SB55（第89図）

ＳＢ21に近接して存在する。

主軸をＳ－88°－Ｅに持つ１間×２間（260×290cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第89図　SB55平・断面図

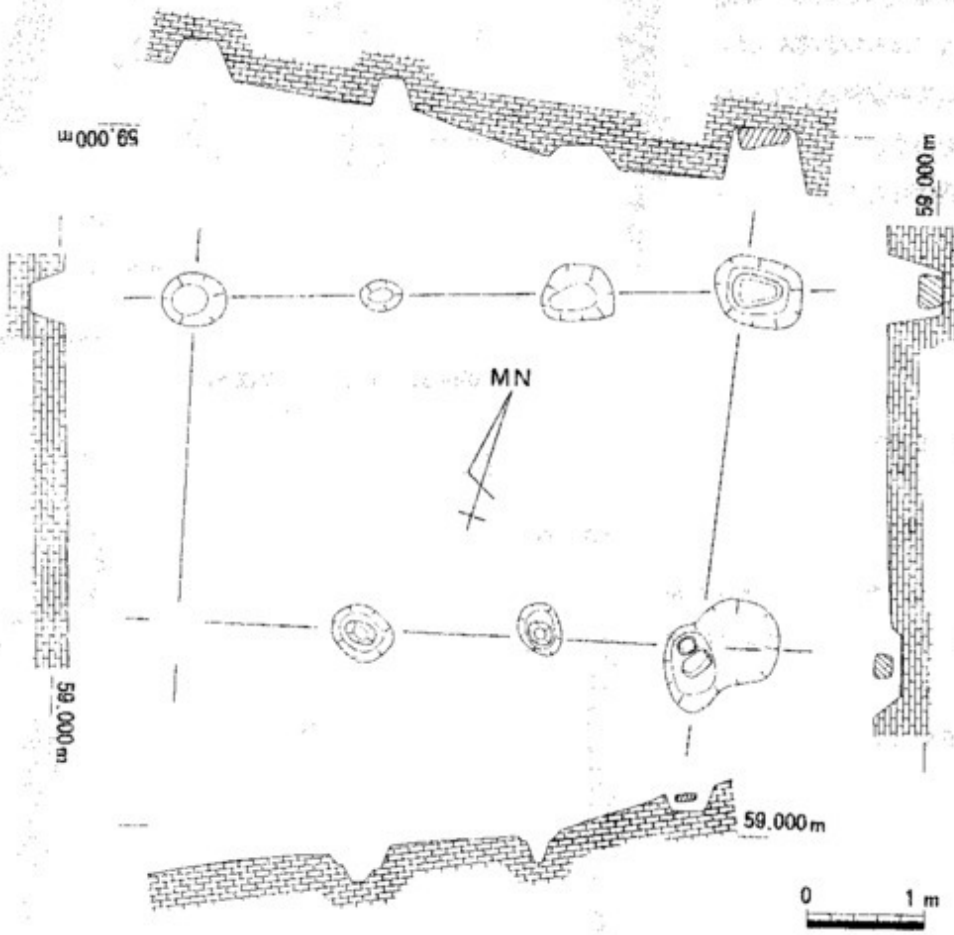
SB56（第90図）

ＳＨ11と切り合うが、その前後関係は不明である。

主軸をＮ－74°－Ｅに持つ１間×３間（270×440cm）の掘立柱建物址である。

柱穴は他と比べてやや大きく深い。

出土遺物はなし。



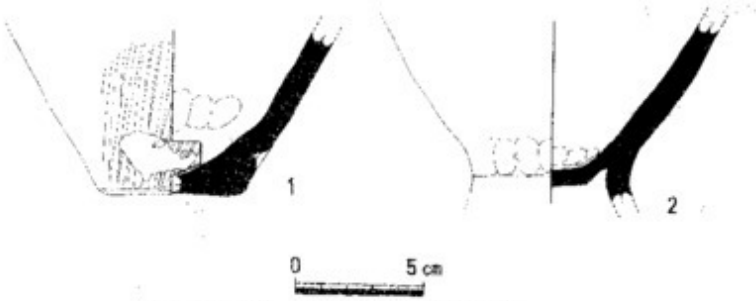
第90図　SB56平・断面図

SB22（第92図）

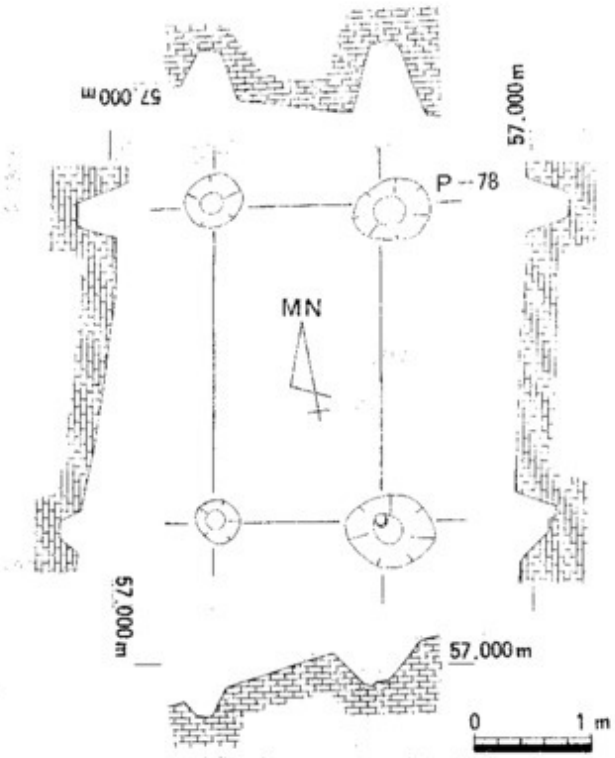
ＳＨ08の南ほとんど切り合う位置に存在する。

主軸をＳ－11°－Ｗに持つ１間×１間（140×270cm）の掘立柱建物址である。

Ｐ－78から弥生土器が出土している。（第91図）１は壺形土器底部である。外面は縦方向のヘラミガキ、体部下半に内面までは貫通しない２個１対の穿孔を持つ。内面は指頭圧痕が認められる。２は鉢形土器である。外面は鉢部と脚部の境に、内面は鉢部底部に指頭圧痕がみられる。弥生時代中期後半と考えられる。なお、切り合う土坑とはＳＢ22が先行するものと思われる。土坑内からも弥生土器片が出土している。



第91図　SB22出土土器実測図



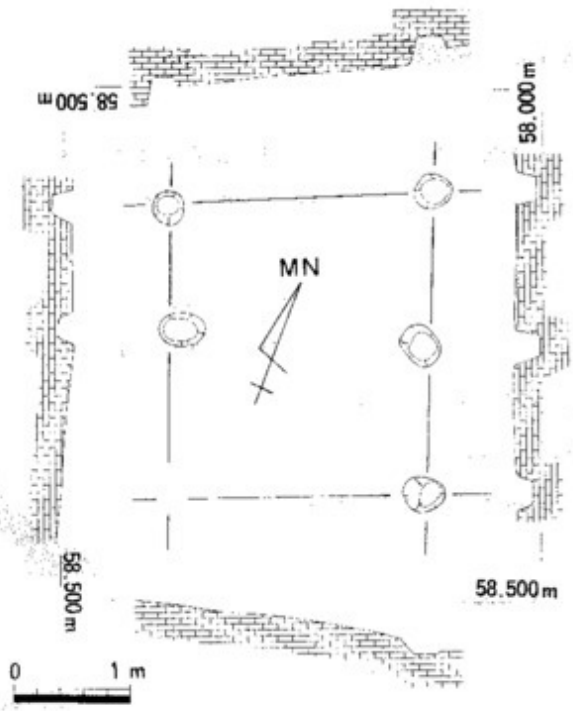
第92図　SB22平・断面図

SB23（第93図）

ＳＨ08の西に位置する。

主軸をＳ－21°－Ｅに持つ１間×２間（220×260cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



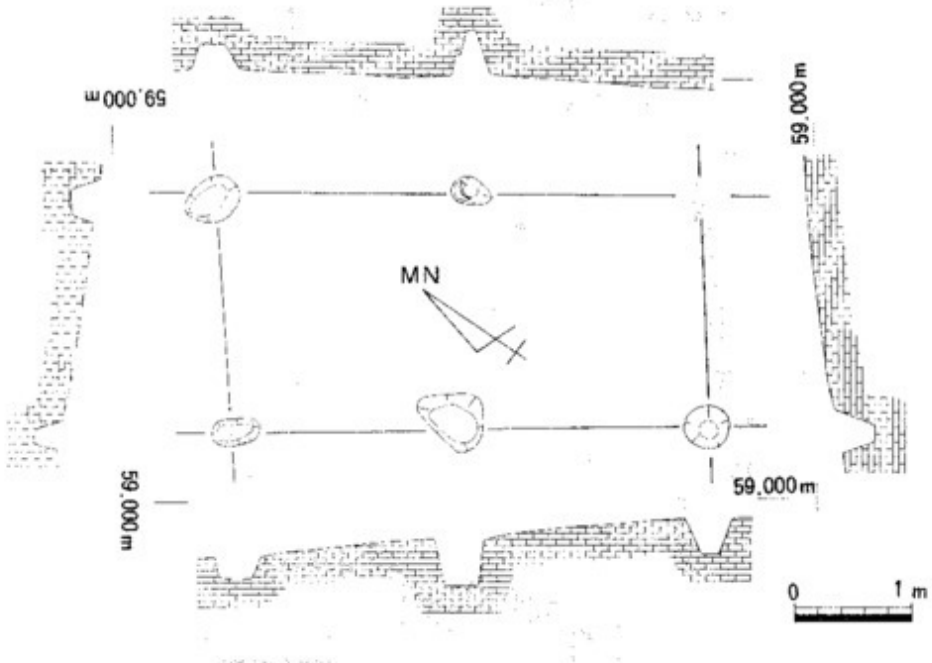
第93図　SB23平・断面図

SB24（第94図）

ＳＢ25と切り合う。その前後関係は不明である。

主軸をＳ－35°－Ｅに持つ１間×２間（200×405cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器片が出土している。



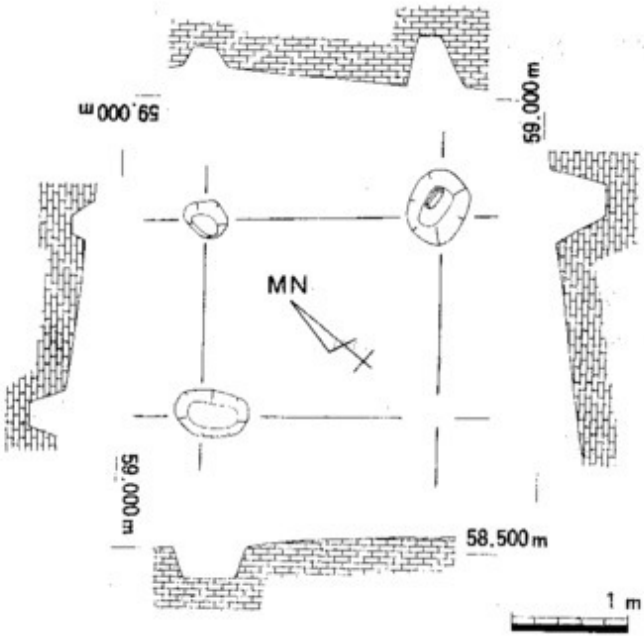
第94図　SB24平・断面図

SB25（第95図）

ＳＢ24と切り合うが、その前後関係については不明である。

主軸をＮ－50°－Ｅに持つ１間×１間（195×180㎝）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器片が出土している。



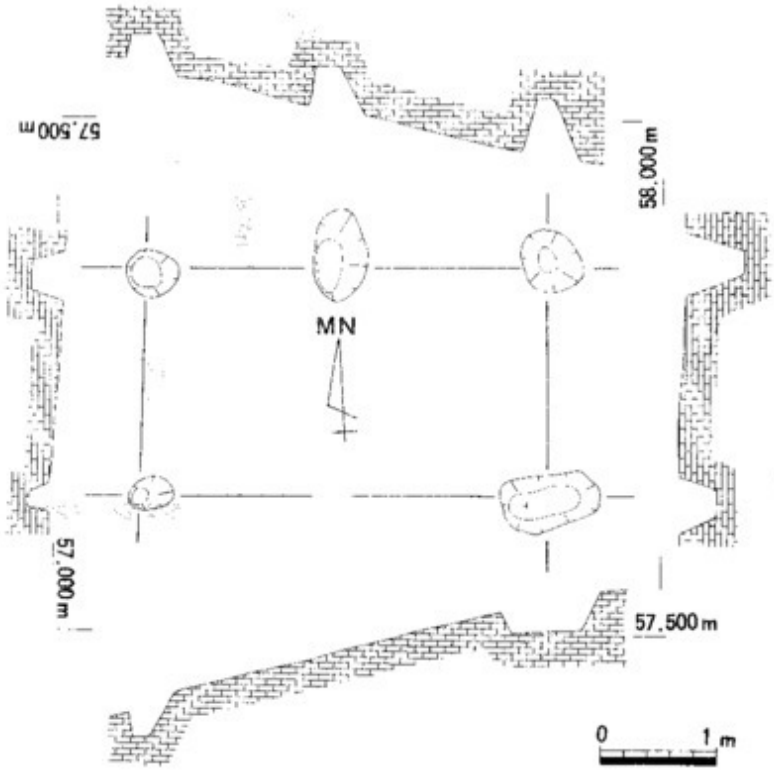
第95図　SB25平・断面図

SB26（第96図）

調査区の北端に位置する。

主軸をＳ－86°－Ｅに持つ１間×２間（200×345㎝）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第96図　SB26平・断面図

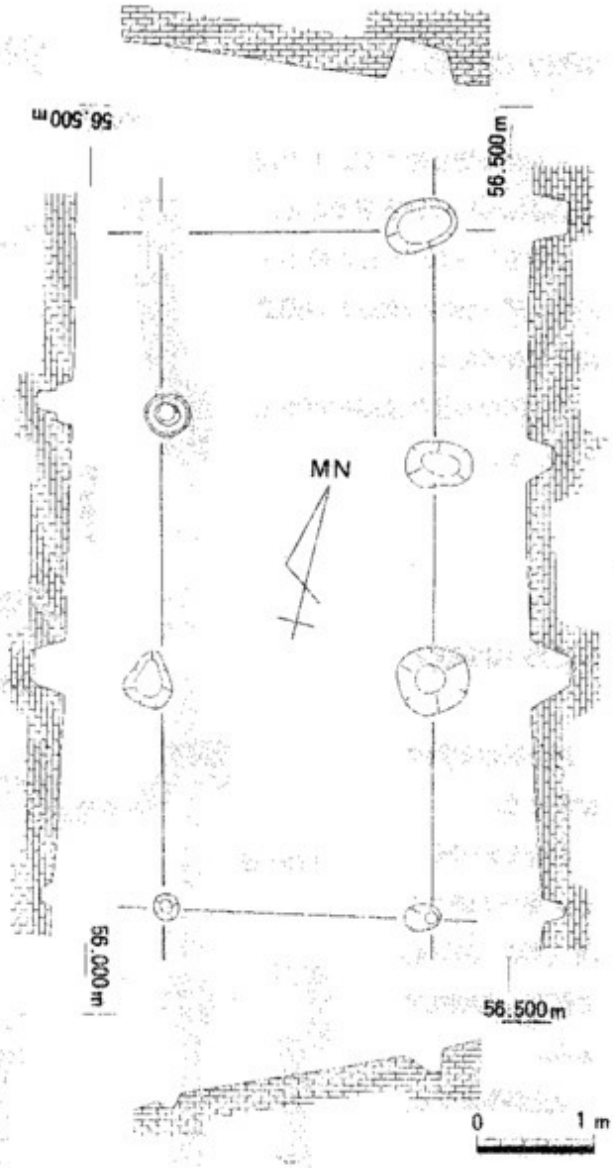
SB27（第97図）

V区内の西端に位置する。

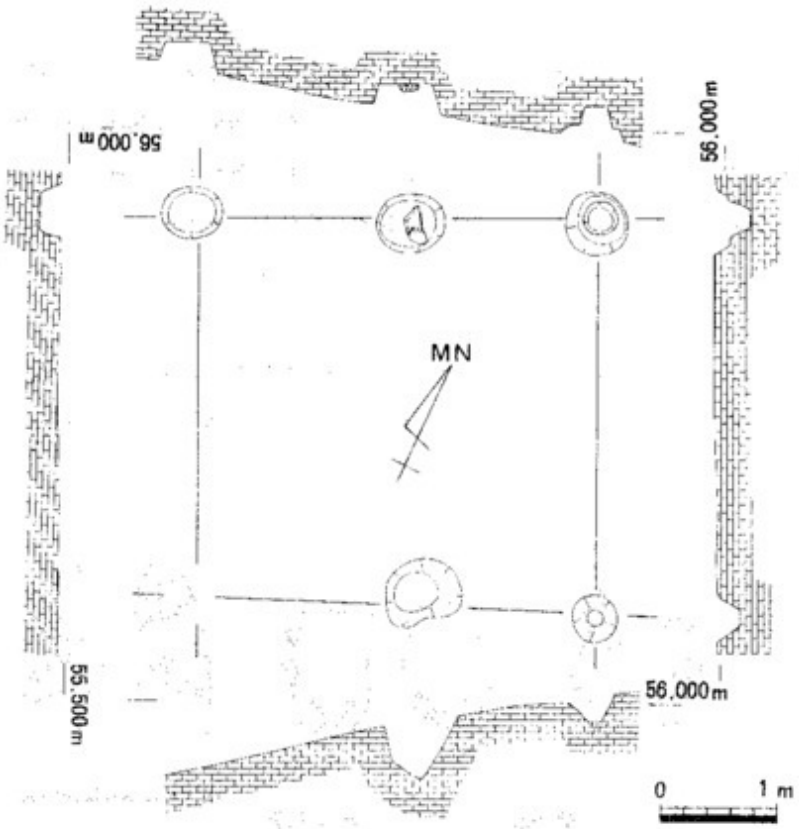
ＳＢ28と切り合うがその前後関係についは不明である。

主軸をＳ－13°－Ｅに持つ１間×３間（225×590cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第97図　SB27平・断面図



第98図　SB28平・断面図

SB28（第98図）

ＳＢ27と切り合うが、その前後関係は不明である。

主軸をＳ－62°－Ｅに持つ１間×２間（340×350cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。

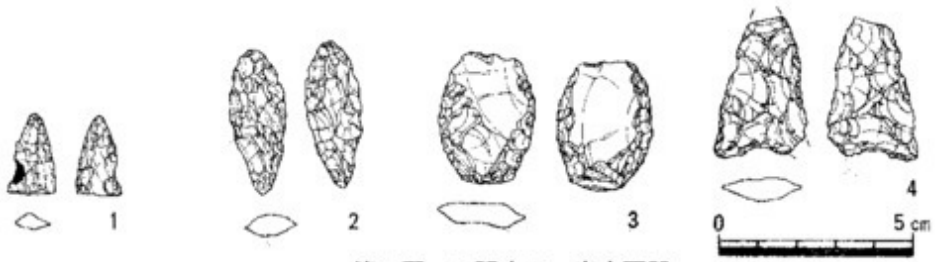
Ｖ区内Ｐ－出土土器・石器

Ｖ区内の柱穴から出土したもので、弥生土器と石器である。（第99図・第100図）

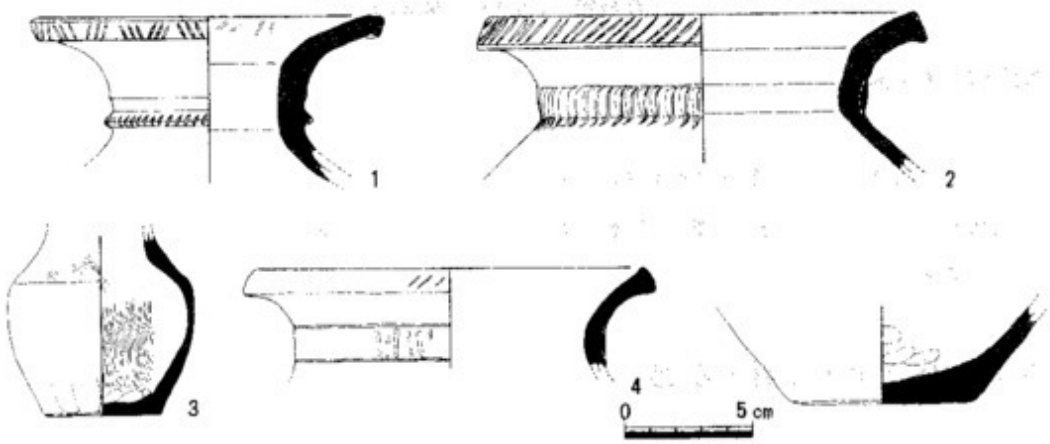
１は壺形土器である。大きく広がる口縁部を持ち、口縁端部は下方へやや拡張し、斜線文を施す。頸部には１条の突帯を貼り付け、突帯上に刻み目文を施す。内面に斜線文もしくは格子文の痕跡が残る。２は壺形土器である。短く外方へ立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は下方にやや拡張して左下がりの斜線文を施す。頸部には幅広の突帯を貼り付け、板状のものを押し付けて文

様としている。3はミニチュアの壺形土器である。口縁部を欠損する。外面は一部剥落しているが、体部上半にはハケメ、底部は縦方向の指ナデが認められ、内面は底部は指頭圧痕で調整した後ハケメを施す。祭祀用であろう。4は壺形土器である。短く外反する口縁部を持ち、口縁端部は上下にわずかに拡張する。口縁端部に斜線文、頸部に幅広の突帯を貼り付けた後、板状のものを押し付けて文様とした痕跡が認められる。5は壺形土器底部である。外面はナデ、内面は底部は指頭圧痕の後ナデを施している。(第100図)

1～4はサヌカイト製の石器である。1は石鏃である。基部を欠損するため形態は不明。2は凸基Ⅱ式石鏃である。3は削器である。4は先端部を欠損するが大型の凹基式石鏃である。(第99図)



第99図　V区内P－出土石器

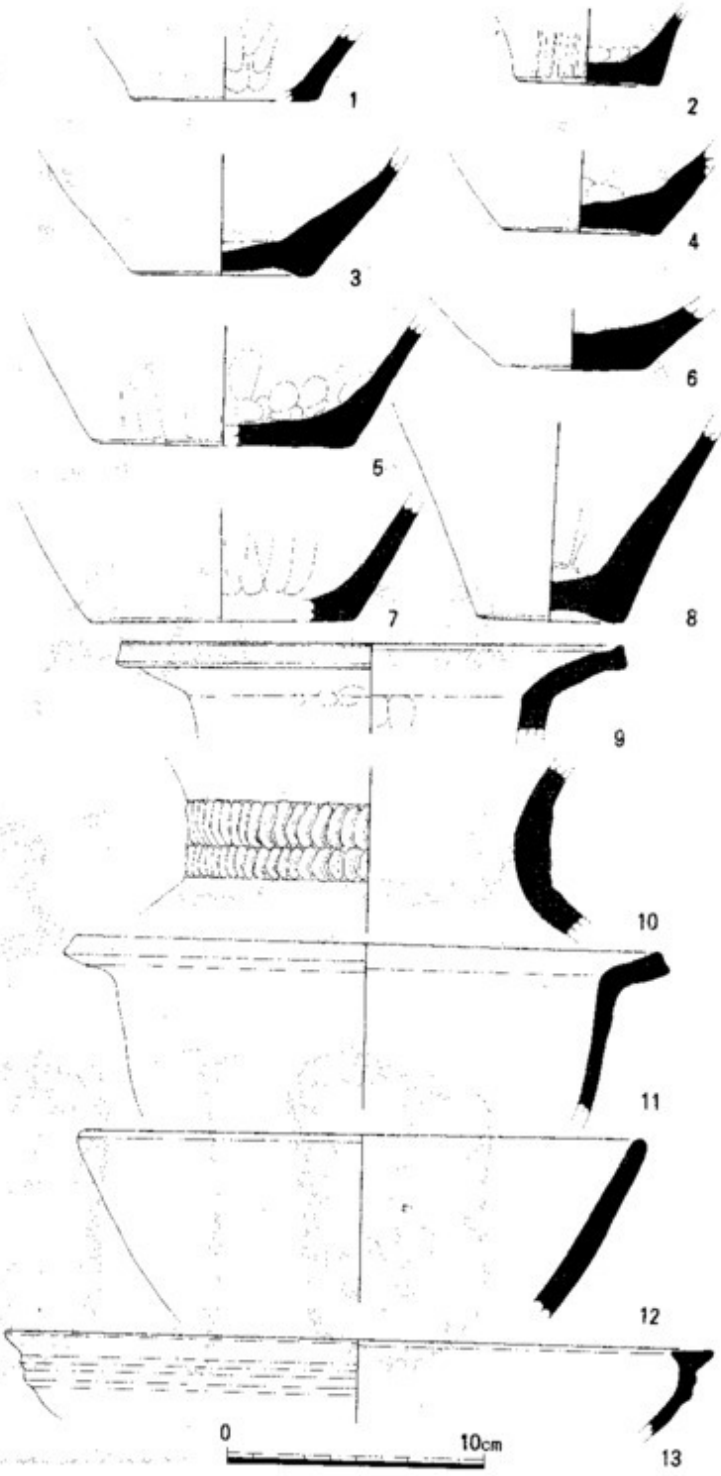


第100図　V区内P－出土土器

V区内出土土器・石器

重機による表土剥ぎ、もしくは遺構面検出中に出土したものである。(第101図・第102図)

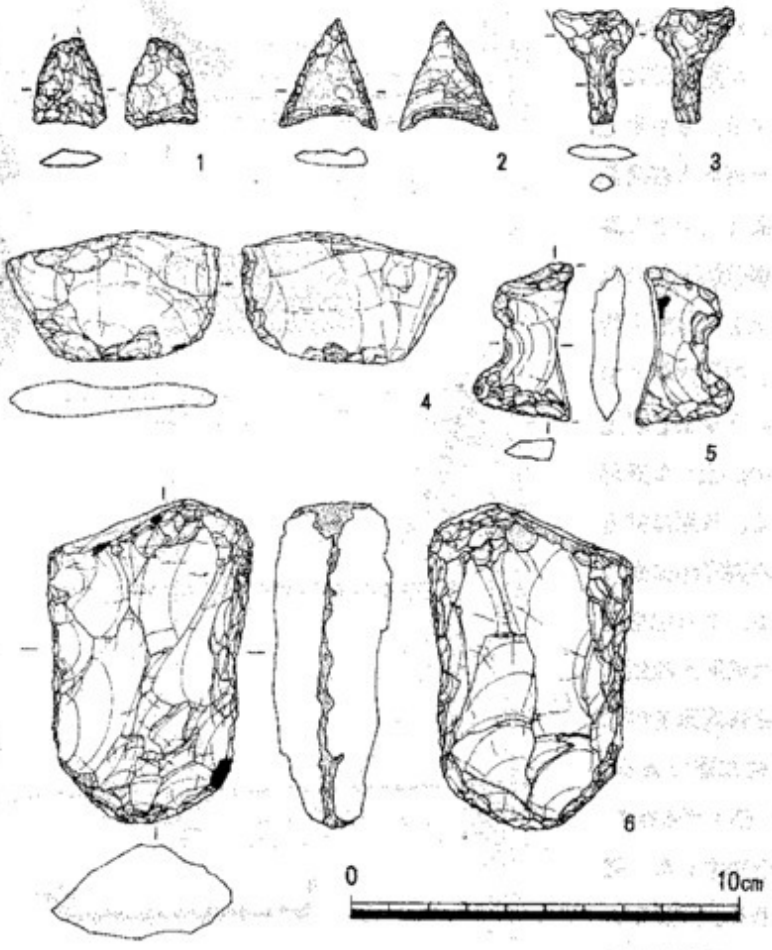
弥生土器・石器が出土した。1～8は底部である。1は壺底部である。内面に縦方向の指ナデが認められる。2は甕形土器の底部である。表土剥ぎ中出土した。外面に縦方向のヘラミガキ、内面底部は指頭圧痕で調整する。3も表土剥ぎ中出土した壺形土器底部である。内外面ともナデで調整する。4は調査区下部の包含層除去中出土した壺形土器の底部である。内面底部に指頭圧痕を施す。5は調査区上部包含層除去中出土した壺形土器底部である。外面は縦方向の板ナデ、内面底部は指頭圧痕で調整する。6は包含層除去中出土した壺形土器底部である。7も包含層除去中出土した壺形土器底部である。内面に縦方向の指ナデを施す。8は表土剥ぎ中出土した、甕形土器底部である。内面をナデ調整する。9は下部包含層



第101図　V区内包含層出土土器

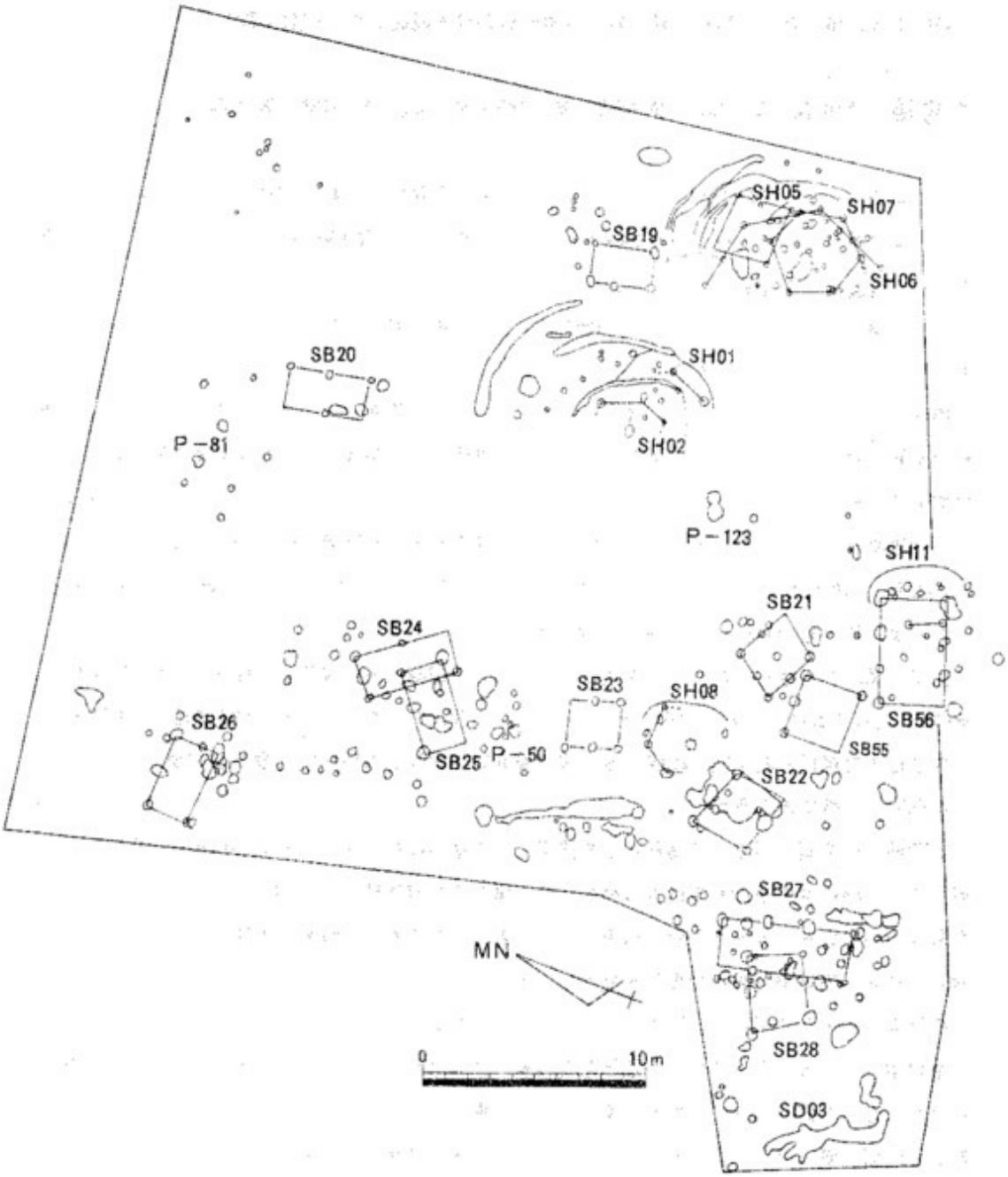
除去中出土した壺形土器である。口縁部が外方へ「ハ」の字形に開くもので、外面口頸部と内面体部に指ナデが認められる。10は上部包含層除去中出土したものである。幅広の突帯を2段を貼り付け、板状のものを押し付けて文様帯を構成している。短く外方へ広がる口縁部を持つものであろう。11は表土剥ぎ中出土した高坏形土器である。磨耗のため調整は不明。12は鉢形土器である。内面に縦方向の指ナデが認められる。13は上部包含層出土の鉢形土器である。口縁端部に平坦な面とその下に2条の凹線文を持つ。

1は凹基式の石鏃である。先端部をわずかに欠損する。2も凹基式石鏃である。いずれも包含層内より出土した。3は包含層より出土した打製石錐である。4も包含層内より出土した削器である。5は石包丁である。包含層より出土した。6は下部包含層より出土した打製石斧である。ごく一部を欠損するが長楕円形を呈する。顕著な使用痕が認められる。



第102図　V区内包含層出土石器

第103図　V区遺構全体図



6．VI区

VI区では古墳１基、住居址３棟、掘立柱建物址27棟を確認した。（第151図）

１号墳（第104図・第105図・第106図・第107図・第108図・第109図・第110図）

以前より縦1.4m、幅1.4m、厚さ0.3mの砂岩の板石が露出しており〝謎の巨石〟とされていた。この石より約４m南にも砂岩の石が露出しており、ボーリング調査の結果古墳と認定して掘り進めていったものである。

この古墳の周辺は南側で２m近く、西側で１m近く耕地間に段差があり、古墳から取り出したものであろう川原石で石垣を作っていた。

周濠は削平のため全周の約⅓を確認したのみであるが、径20mの円墳であると考えられる。調査の結果〝謎の巨石〟は古墳の奥壁であることが判明した。基底石として設置する際に穿孔したのであろう楔穴を持つ。

石室規模は玄室長辺4.55m、短辺奥壁2.1m、中央2.25m、玄門際1.8m、羨道長辺5.1m、短辺1.5～0.8mと羨道入り口に向いて次第に狭くなる、玄門を持ったやや胴張りの横穴式石室である。この石室規模は他の4基と比べて格段の差を持つ。

玄室の基底石は砂岩の板石を、玄門部は柱状の石を配置する。羨門石は柱状の石を２石配置し、東側は１石、西側は２石細目の板石を立てて使用し、他は板石もしくは方柱状石を直列に配置する。

羨道途中で細目の石を縦に配置する方法は観音寺市母神山古墳群内の鑵子塚古墳でみられるような副室の名残であろうか。

玄門部分に２個の川原石を境石として使用し、玄室内には下層に大きめの扁平な川原石を、上層に３～５cm程度の玉砂利を敷きつめている。境石の羨道側約1.2mの範囲内でも扁平な川原石を敷きつめている。ガラス玉が１点出土していることからもこの場所で追葬が行われた可能性が考えられる。奥壁際は最近の攪乱を受けている。

羨門部分の大型の川原石は閉塞石の一部と考えられる。

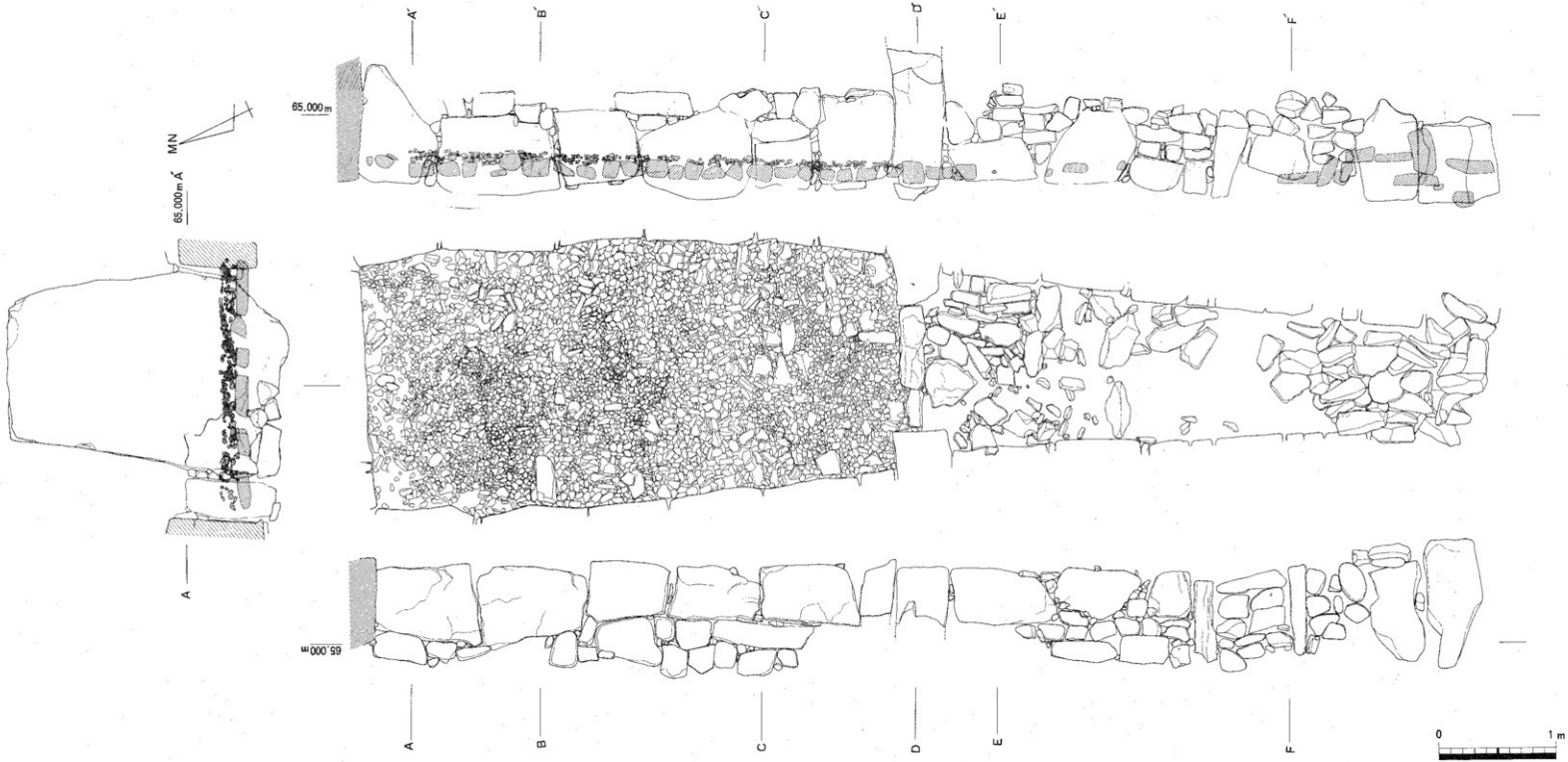
墓壙掘り方は地山面を整地し、版築した後掘り込んでおり、玄室内には大型の基底石を設置するためにさらに掘り込み、奥壁側はまた一段深く掘り下げている。

基底石設置の際には石の安定をはかるため控え石を多く使用している。

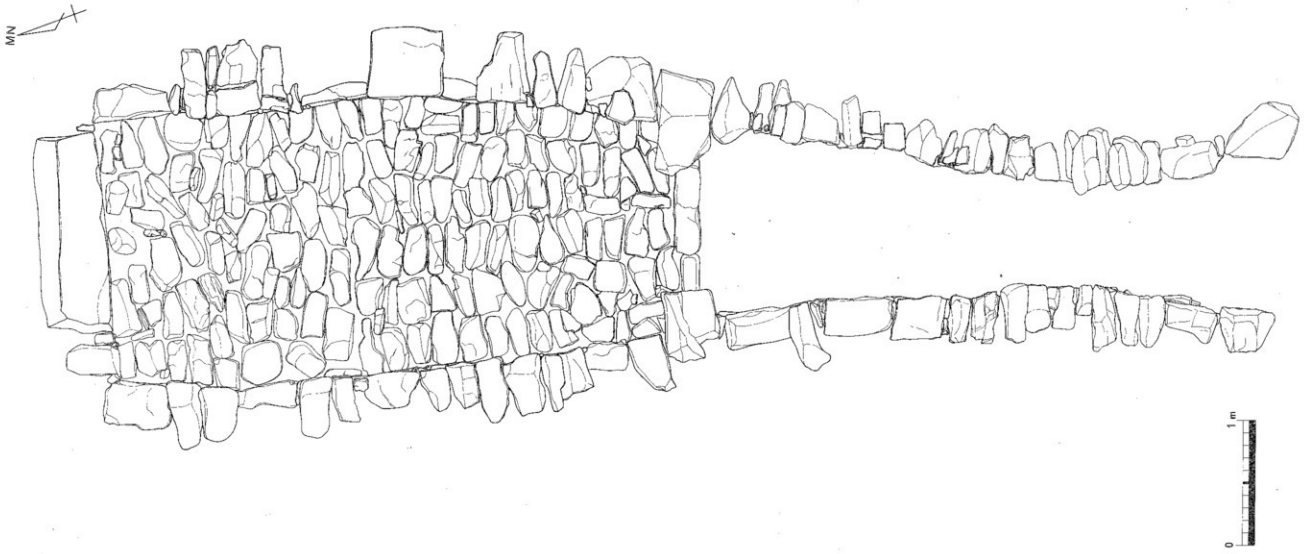
墳丘盛土は西側で密に確認された。

また、石室掘り方の西側部分では１号墳の構築によって破壊された竪穴住居址を検出した。さらに下層の地山面上では若干の柱穴も確認している。

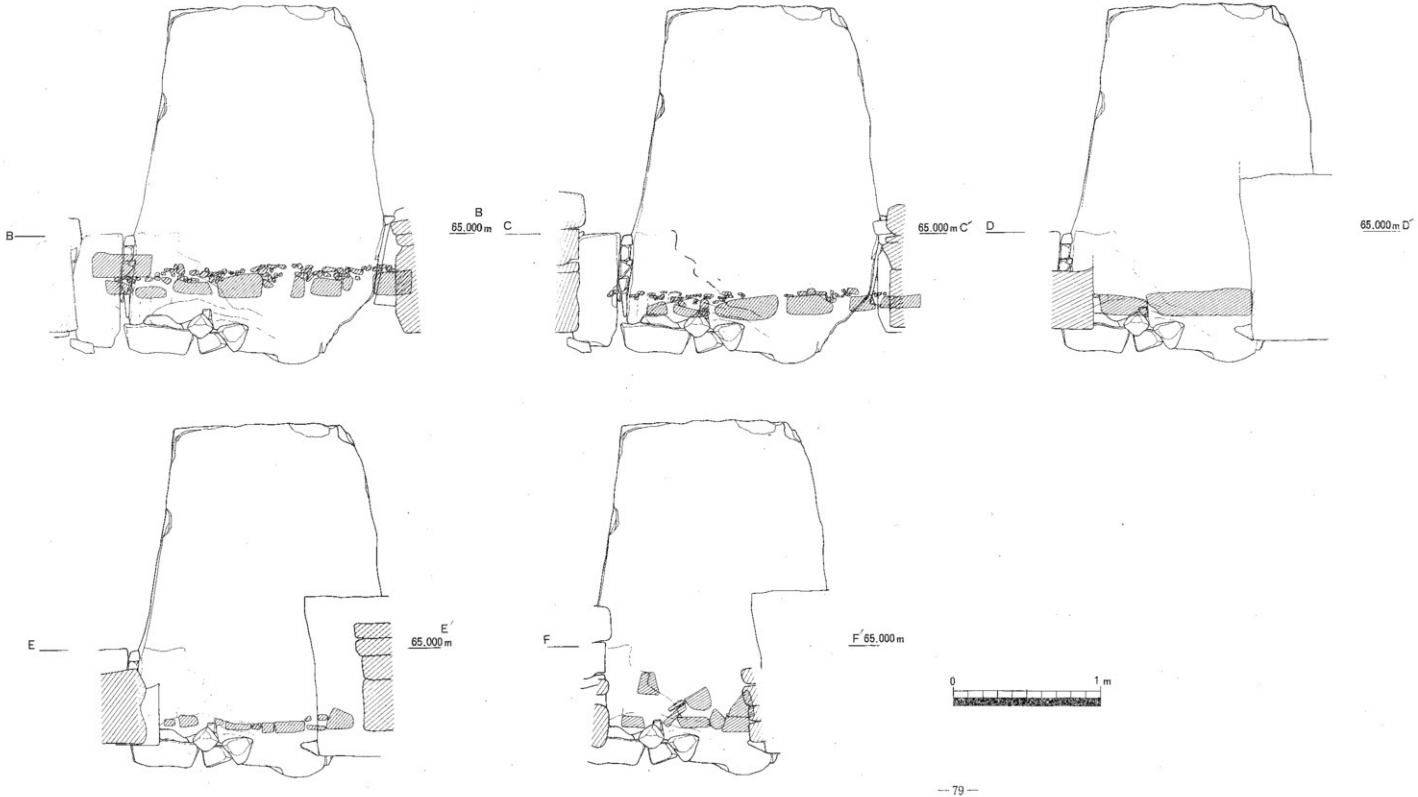
第104図　1号墳石室全体図



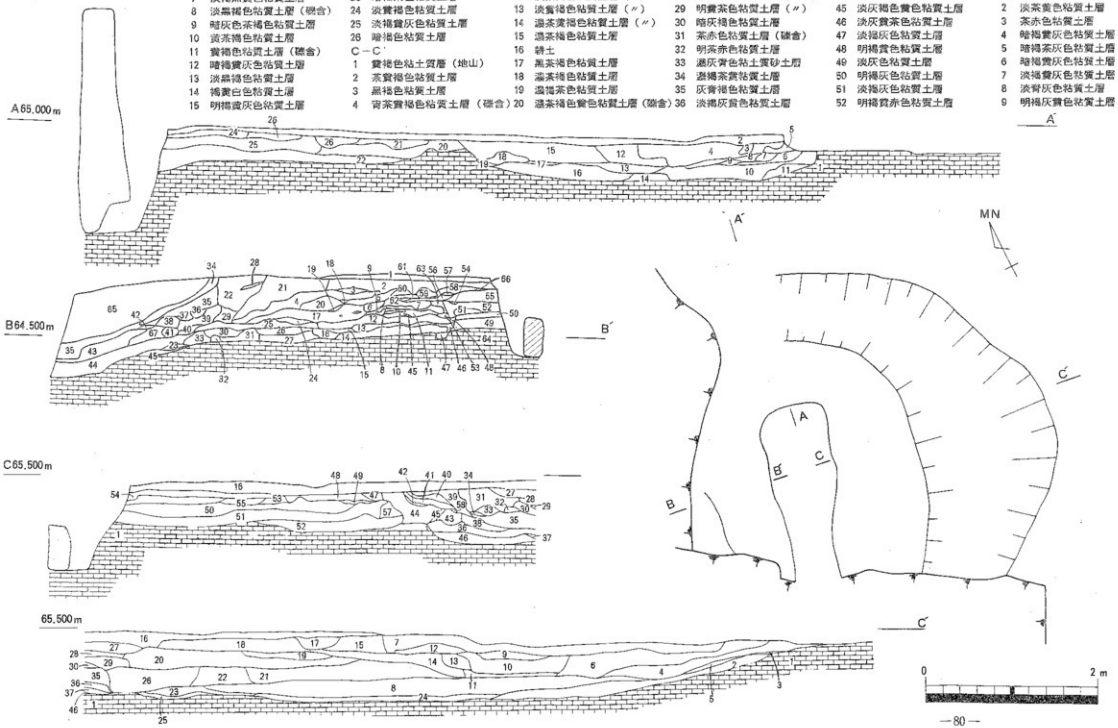
第105図　1号墳石室検出状況及び下層礫床



第106図　1号墳石室断面図



第107図　1号墳断面土層実測図



A－A'

1 茶黄色粘質土層（地山）
2 明青灰色粘質土層
3 淡灰青色粘質土層
4 淡褐黄灰色粘質土層（礫含）
5 淡灰白褐色粘質土層
6 暗褐茶色粘質土層
7 淡褐黒黄色粘質土層
8 淡黒褐色粘質土層（礫含）
9 暗灰色茶褐色粘質土層
10 黄茶褐色粘質土層
11 黄褐色粘質土層（礫含）
12 暗褐黄灰色粘質土層
13 淡黒褐色粘質土層
14 褐黄白色粘質土層
15 明褐黄灰色粘質土層
16 淡褐灰色粘質土層
17 淡黒褐色粘質土層
18 暗褐茶灰色粘質土層
19 淡黒褐色粘質土層
20 濃褐茶色粘質土層
21 明褐茶色粘質土層
22 黄茶赤色粘質土層
23 暗褐茶色粘質土層
24 淡黄褐色粘質土層
25 淡褐黄灰色粘質土層
26 暗褐色粘質土層

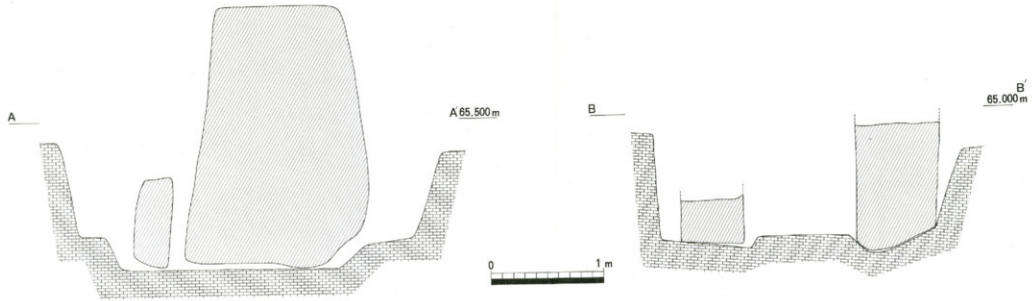
C－C'

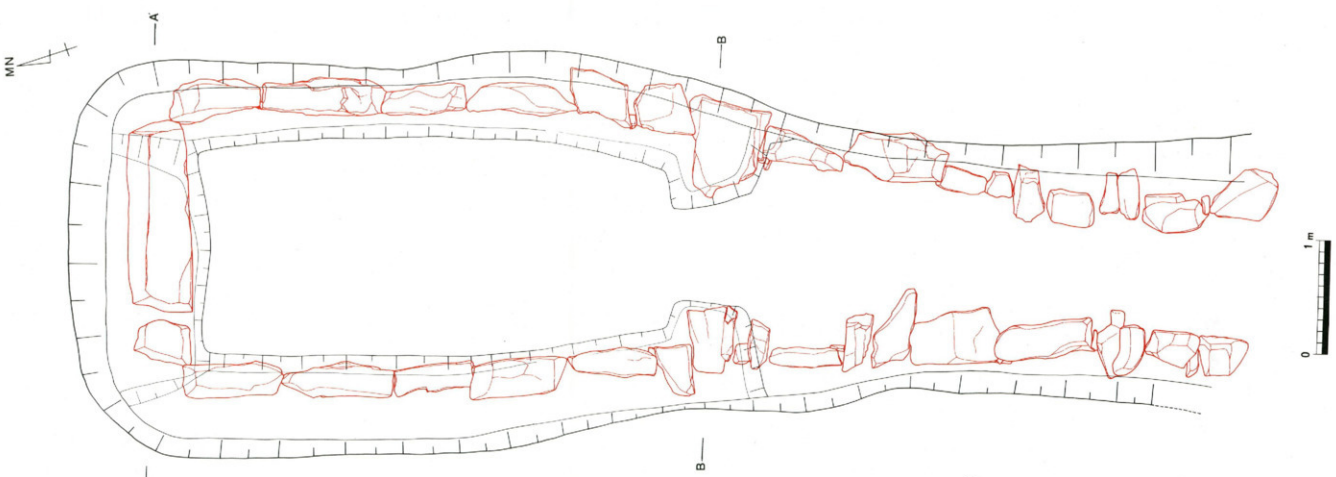
1 黄褐色粘土質層（地山）
2 茶黄褐色粘質土層
3 黒褐色粘質土層
4 青茶黄褐色粘質土層（礫含）
5 暗茶褐色粘質土層（雑含）
6 茶褐色粘質土層（礫含）
7 暗茶褐色粘質土層（礫含）
8 黒褐色粘質土層
9 明黄褐色粘質土層
10 暗茶黄褐色粘質土層（礫含）
11 暗黄褐色粘質土層（〃）
12 淡茶褐色粘質土層（〃）
13 淡黄褐色粘質土層（〃）
14 濃茶黄褐色粘質土層（〃）
15 濃茶褐色粘質土層
16 錆土
17 黒茶褐色粘質土層
18 濃茶褐色粘質土層
19 濃褐茶色粘質土層
20 濃茶褐色黄色粘質土層（礫含）
21 暗褐茶黄色粘質土層（礫含）
22 黄灰茶色粘質土層
23 濃褐灰色粘質土層
24 灰茶黄色粘質土層
25 黄灰赤色粘質土層
26 灰茶黄色粘質土層
27 淡黄褐色粘質土層（礫含）
28 暗灰茶黄色粘質土層
29 明黄茶色粘質土層（〃）
30 暗灰褐色粘質土層
31 茶赤色粘質土層（礫含）
32 明茶赤色粘質土層
33 濃灰青色粘土質砂土層
34 濃褐茶黄色粘質土層
35 灰青褐色粘質土層
36 淡褐灰白色粘質土層（礫含）
37 淡黄茶色粘質土層
38 濃褐茶黄色粘質土層
39 濃灰青褐色粘質土層
40 茶褐色粘質土層
41 濃灰青褐色粘質土層
42 青灰色粘質土層
43 淡灰褐色粘質土層
44 褐茶黄色粘質土層
45 淡灰褐色黄色粘質土層
46 淡灰黄茶色粘質土層
47 淡褐灰白色粘質土層
48 明褐灰黄色粘質土層
49 明褐灰黄色粘質土層
50 淡褐灰白色粘質土層
51 淡褐灰白色粘質土層
52 明褐黄赤色粘質土層
53 暗褐灰黄色粘質土層
54 暗褐黄灰色粘質土層
55 淡黄褐色粘質土層
56 淡褐灰黄色粘質土層
57 淡黄褐灰色粘質土層
58 茶褐色粘質砂土層

B－B'

1 錆土
2 淡茶黄色粘質土層
3 茶赤色粘質土層
4 暗褐黄灰色粘質土層
5 暗褐茶灰色粘質土層
6 暗褐黄灰色粘質土層
7 淡褐茶灰色粘質土層
8 淡黄灰色粘質土層
9 明褐灰黄色粘質土層
10 淡青灰褐色粘質土層
11 明褐黄灰色粘質土層
12 青灰色粘質土層
13 淡褐灰色粘質土層
14 明褐色粘質土層
15 褐灰色粘質土層
16 暗褐灰色粘質土層
17 暗褐黄色粘質土層
18 淡茶褐赤色粘質土層
19 暗褐黄灰色粘質土層
20 暗褐灰色粘質土層
21 淡褐色粘質土層
22 淡灰褐色粘質土層
23 淡灰褐色粘質土
24 淡褐黒色粘質土層
25 淡灰褐色粘質土層
26 暗褐色粘質土層
27 淡褐黄色粘質土層
28 淡黒褐色粘質土層
29 濃褐茶色粘質土層
30 淡褐茶色粘質土層
31 明褐色粘質土層
32 淡黄褐色粘質土層
33 褐色粘質土層
34 淡黒褐色粘質土層（礫含）
35 明褐茶色粘質土層（礫含）
36 淡茶黄褐色粘質土層（礫含）
37 暗褐茶色粘質土層
38 淡茶黄褐色粘質土層
39 濃褐黄色粘質土層
40 淡褐黄色粘質土層
41 暗褐茶色粘質土層
42 淡黄茶褐色粘質土層
43 淡茶黄褐色粘質土層
44 淡茶褐黄色粘質土層
45 淡茶褐色粘質土層
46 淡灰褐色粘質土層
47 淡褐色粘質土層
48 淡灰褐青色粘質土層
49 明褐色粘質土層
50 暗灰青褐色粘質土層
51 明褐色粘質砂土層
52 淡褐黄灰色粘質土層
53 淡灰褐色粘質土層
54 茶黄色粘質土層
55 濃褐黄灰色粘質土層
56 褐茶灰色粘質土層
57 濃褐黄灰色粘質土層
64 茶褐色粘質土層（地山）
65 暗褐色粘質土層
66 暗青灰色粘質土層
67 濃褐黄色粘質土層

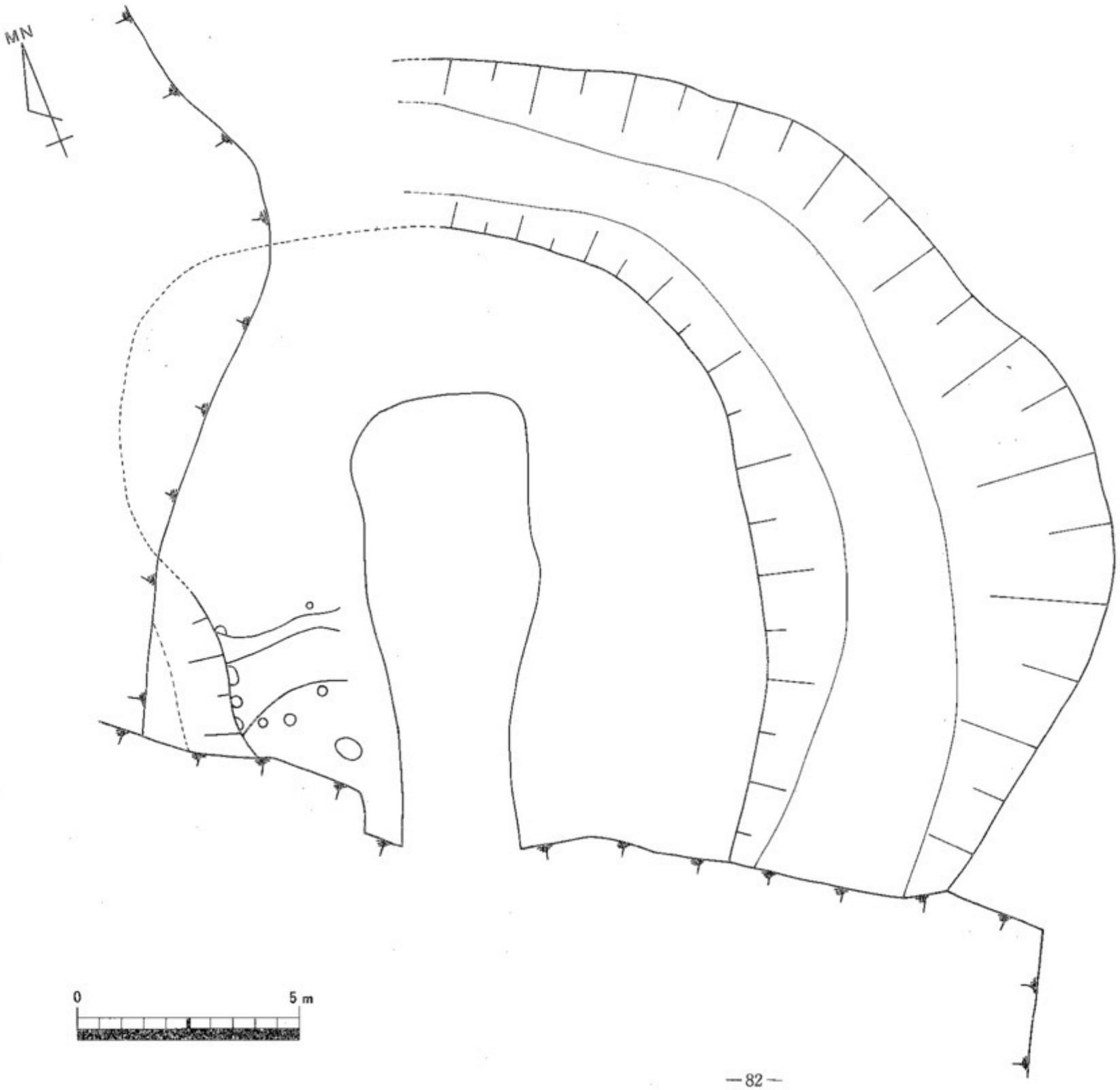
第108図　1号墳断面図





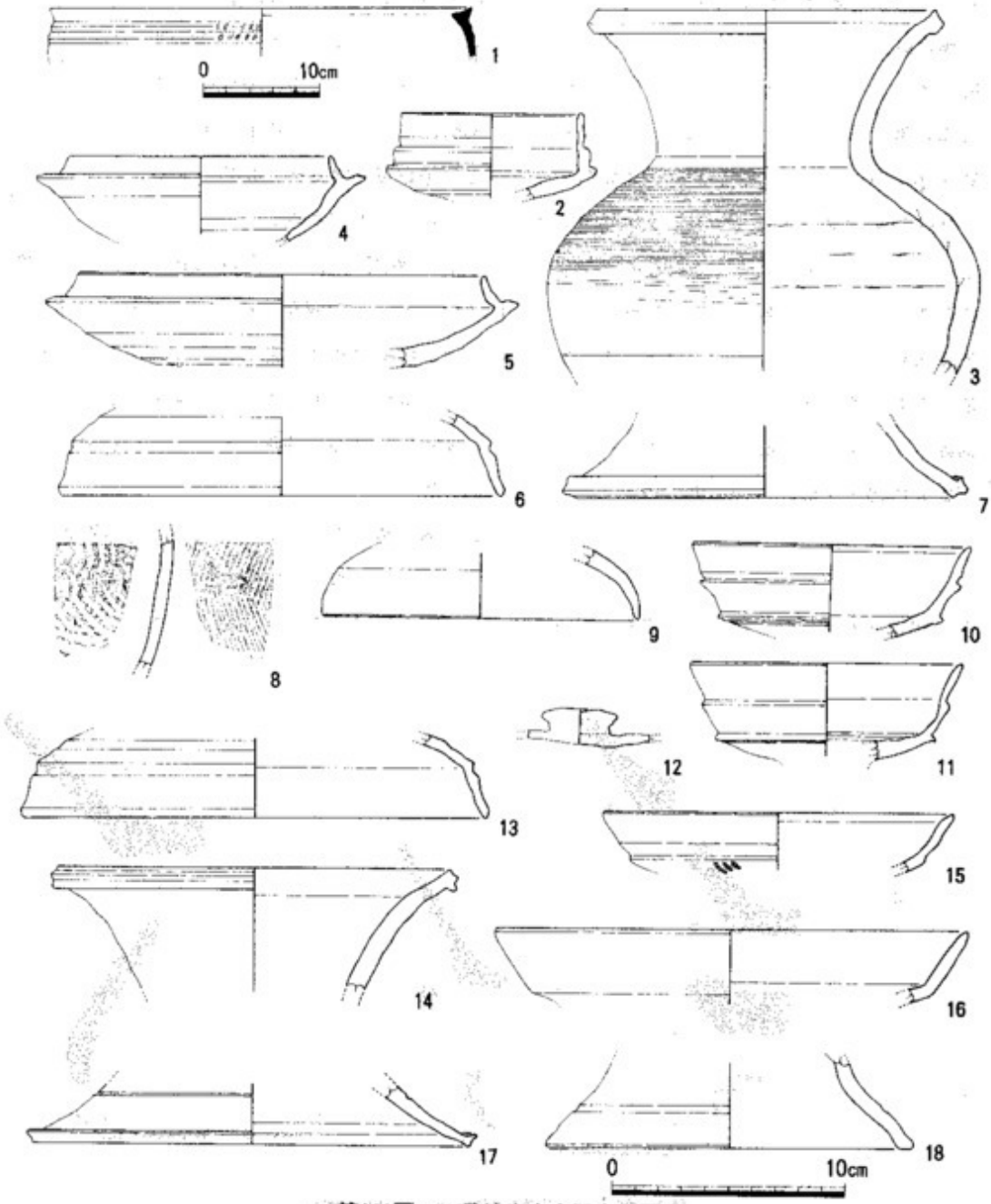
第109図　1号墳石室基底石・掘り方実測図

第110図　1号墳発掘終了実測図



出土遺物は盗掘及び後世の開墾によって多くは出土しなかった。(第111図・第112図)

1は玄室内の上層礫床に混在して出土した弥生土器の大型高坏形土器である。弥生時代中期後半と思われる。2は羨道部から出土した須恵器の高坏形土器である。3は玄室内から出土した広口壺である。体部上半にカキメを施し、ほぼ中央部はヨコナデ、体部下半はヘラケズリで調整す



第111図　1号墳出土土器実測図

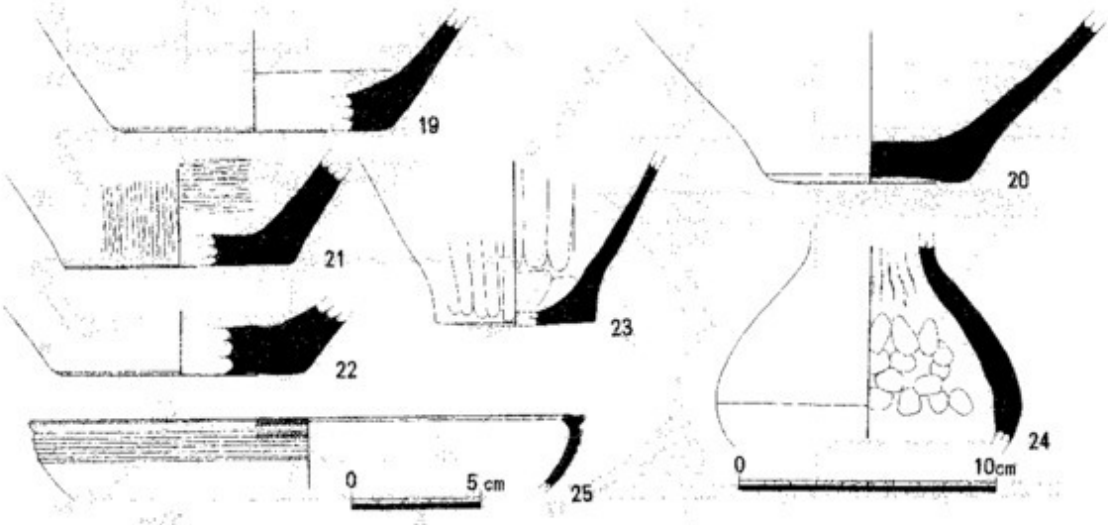
る。4・5・7・13は墳丘上より出土したものである。4は須恵器の坏身である。5は須恵器の高坏である。外面底部をヘラケズリしている。7は須恵器の高坏の脚部である。13は須恵器の高坏蓋である。5とセットを成すものであろう。6・8～12・14～18は1号墳の西側の低くなっている耕地との段差部分を整地中に出土したものである。6は須恵器の高坏蓋で5と同じものである。8は須恵器甕の体部である。細片ばかりが少量出土している。9は須恵器・坏蓋である。10は須恵器・高坏で、蓋を伴わないものである。11も10と同じく蓋を伴わない須恵器・高坏である。同じタイプのものであるが、若干整形手法に差がみられる。12はつまみを持つ須恵器である。14は須恵器・広口壺である。磨滅及び自然釉のため調整は不明。15は須恵器・甕である。16も須恵器・甕である。17は須恵器・高坏の脚部である。18は須恵器・脚付壺の脚部である。

19～25は周濠内から出土したものであるが、すべて弥生土器である。

19・20は壺底部である。磨耗のため調整は不明。21は甕底部である。外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。22は壺底部である。内外面ともナデで調整する。23は甕底部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面体部は縦方向のナデ、底部は指頭圧痕が認められる。24は壺体部である。内面体部に指頭圧痕が認められる。25は大型高坏形土器である。口縁端部は面を持ち、斜格子文を施す。口縁部下に4条の凹線文を施し、端部と上2条の凸部に刻み目文を施す。

石器も周濠内・墳丘上から多く出土している。(第113図)

1～3は周濠内から出土した。1は凸基Ⅱ式石鏃で風化度が高い。2・3は凹基式石鏃である。4は石室内裏込め土から出土した平基式石鏃である。5～11は墳丘上から出土した。5・6・8・9・12は凹基式石鏃、10・11は平基式石鏃である。11は大型である。7は削器である。完存して

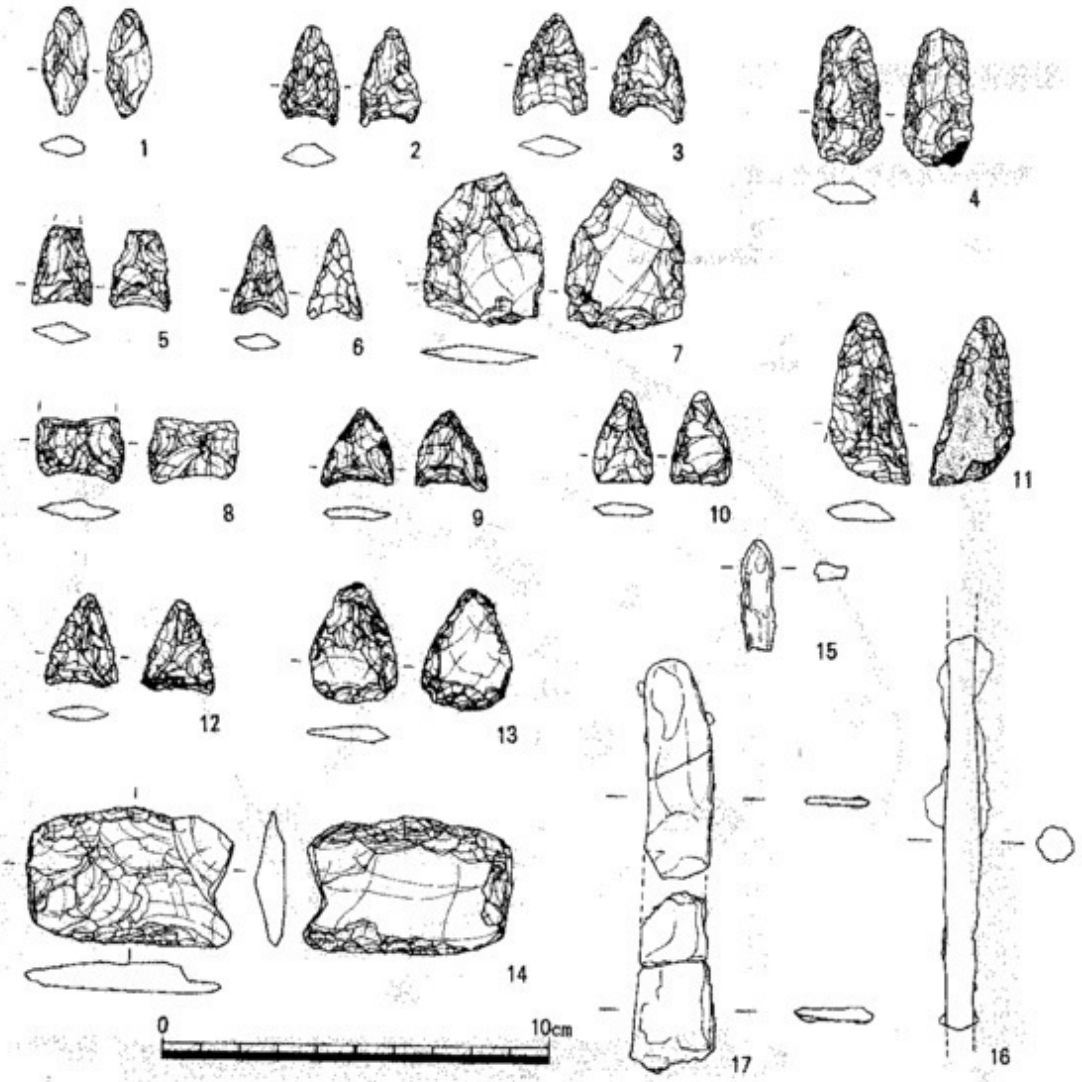


第112図　1号墳周濠内出土土器実測図

いる。13は凸基Ⅰ式石鏃である。14は石包丁である。完存している。以上14点の石器は全てサヌカイト製である。

15～17は玄室内から出土した鉄製品である。15は刀子の先端部である。16は鉄鏃の茎部である。壁際から出土した。17は玄室床面上から出土した鎌である。基部を欠損している。また、玄室内から耳環3個、羨道よりガラス玉1個が出土した。(第114図)

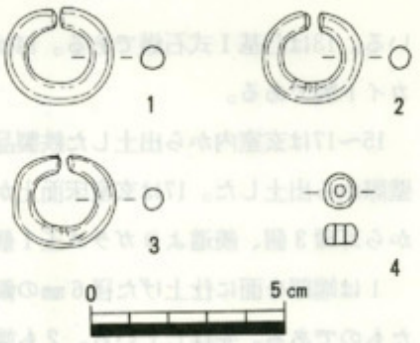
1は端部を面に仕上げた径6㎜の銅地金を長径2.8cm、短径2.5cmのほぼ輪形に曲げて金箔を貼ったものである。完存している。2も端部を面に仕上げた径6㎜の銅地金を直径2.5cm、短径2.3cmと1と比べてややこぶりの輪形に曲げて金箔を貼ったものである。金箔の極く一部を破損している。3も端部を面に仕上げた径5㎜の銅地金を直径2.6cm、短径2.3cmの輪形に曲げて金箔を貼っ



第113図　1号墳出土遺物実測図

たものである。2とほぼ同規模であるので対になるものであろう。4は羨道から出土したガラス製臼玉である。直径8㎜のドーナツ状の断面形を呈し、穿孔は一方向からである。色調は藍色を呈する。

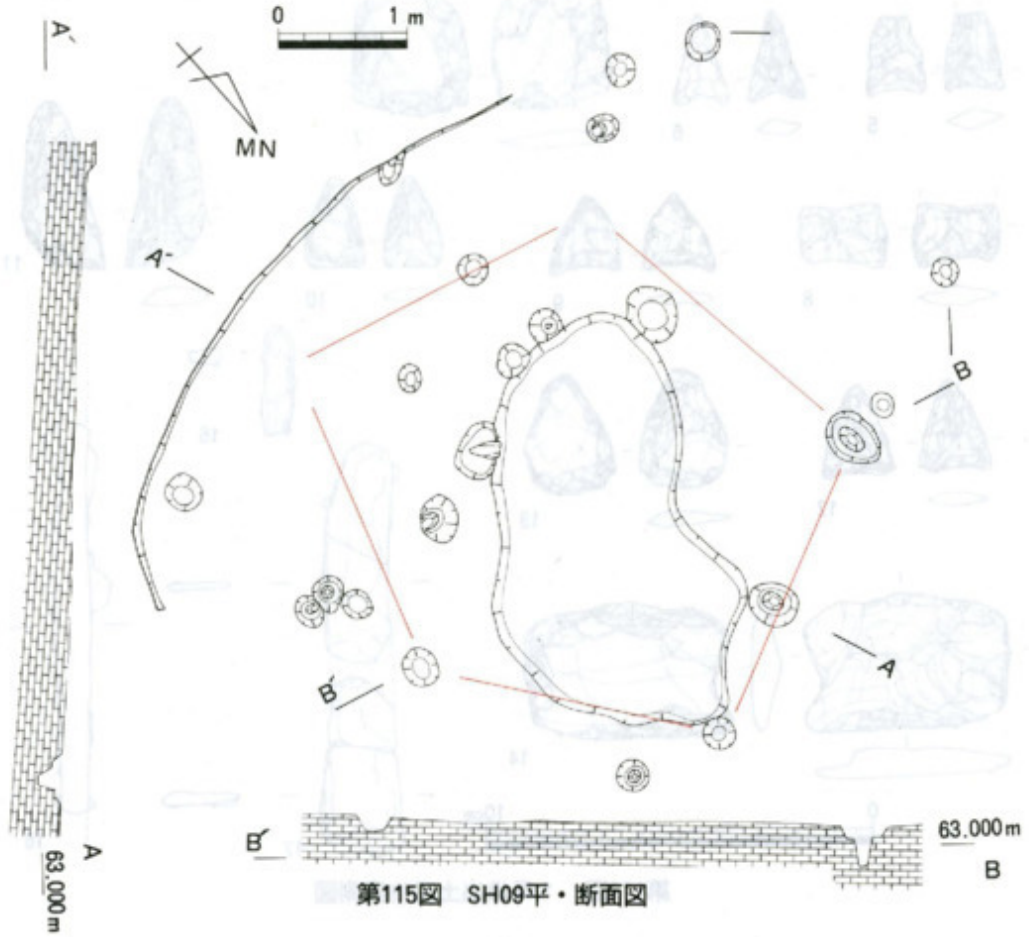
1号墳の時期を決定しうる資料は非常に少ないが、石室内出土遺物から6世紀末かと考えられる。その他石室内から追葬の痕跡は窺えないものの、墳丘上もしくは石垣部分より出土したものも1号墳の資料とするならば7世紀前半頃の追葬が考えられる。



第114図　1号墳出土装身具

SH09（第115図）

調査区の北西部で検出した。



第115図　SH09平・断面図

残存状況は非常に悪く、側壁を全周の⅓と柱穴を確認したのみである。

規模（5.4m）の円形竪穴住居址で、主柱穴は2本確認したが、本来5本持つものと思われる。ほぼ中央部に掘り込まれた土坑は後世のものである。

出土遺物はなし。

SH10（第118図）

調査区の東部、1号墳の東側に位置する。

床面まで削平され、柱穴のみ残存する。一部の柱穴を再利用した立て替えが認められる。

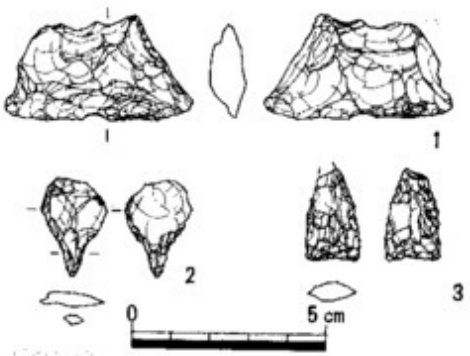
前後関係は確認されなかったが、一方の主柱穴は8本、もう一方の主柱穴は9本持ち、中央の焼土坑は一か所検出している。

平面形態及び規模は不明。

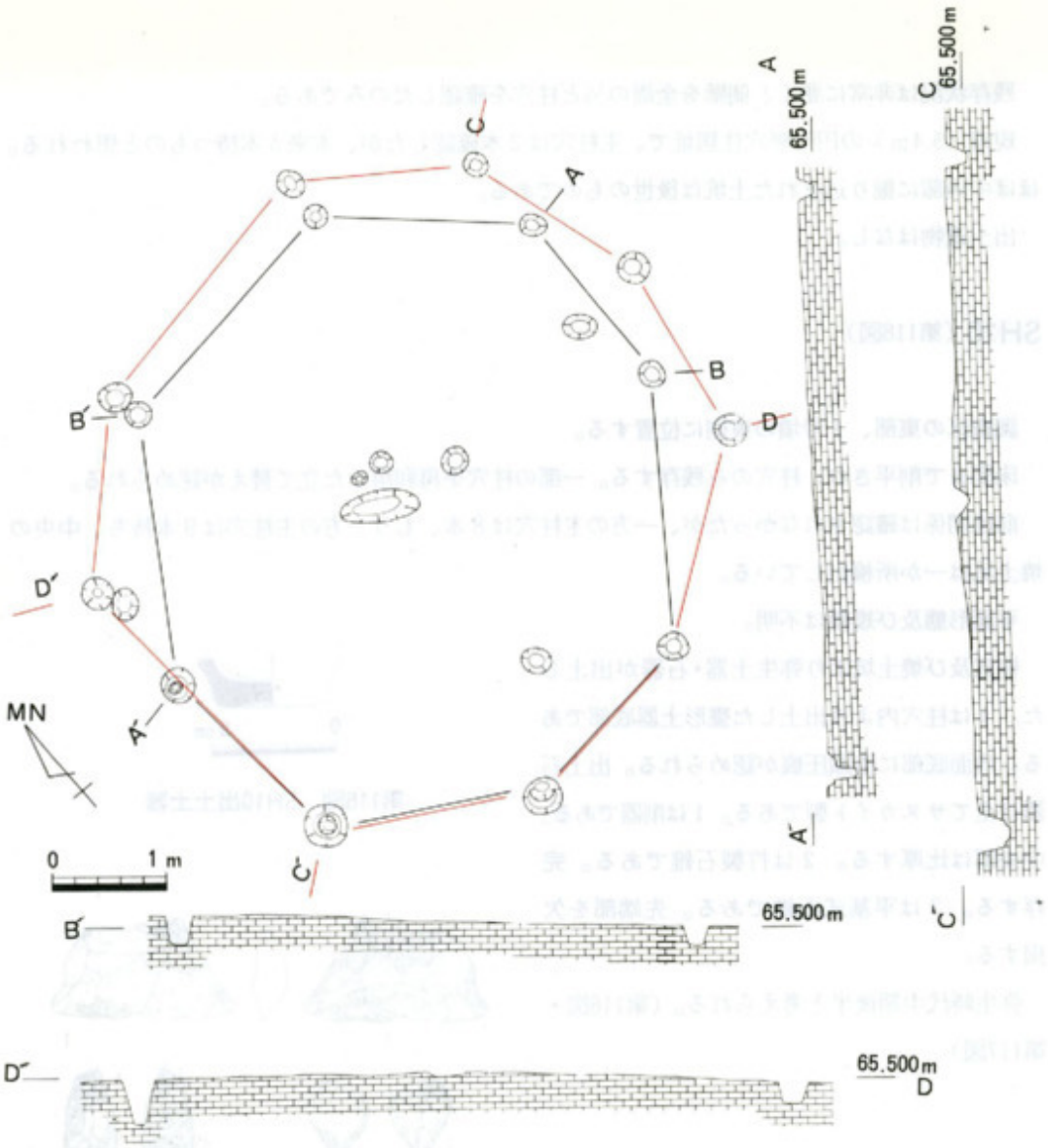
柱穴及び焼土坑より弥生土器・石器が出土した。1は柱穴内より出土した甕形土器底部である。内面底部に指頭圧痕が認められる。出土石器は全てサヌカイト製である。1は削器である。中央部は比厚する。2は打製石錐である。完存する。3は平基式石鏃である。先端部を欠損する。

弥生時代中期後半と考えられる。（第116図・第117図）

第116図　SH10出土土器



第117図　SH10出土土器



第118図　SH10平・断面図

SH12（第120図・第121図）

1号墳の西側墳丘下層、包含層上で確認した。

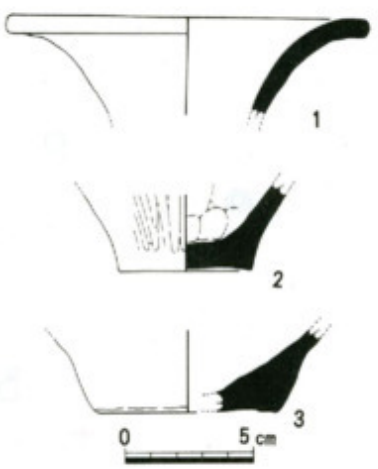
約½を1号墳に、¼を果樹園開墾の際に破壊されている。

径（7.4m）の円形竪穴住居址と考えられる。主柱穴は2本確認したが、本来は6本あったと考えられ、ほぼ中心に中央土坑を持つ。

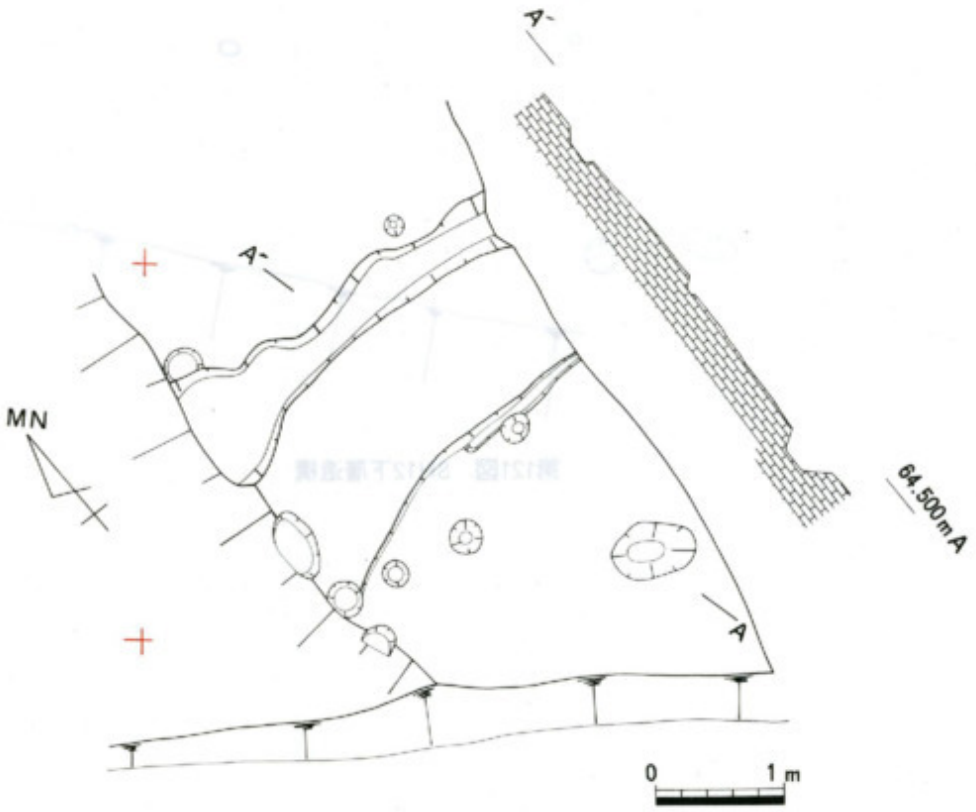
さらに、同心円状の位置に周溝をめぐらしていた痕跡が残るが、範囲については不明である。住居址内からは、少量の土器片及びサヌカイト片が出土した。(第119図)

1は壺形土器の口縁部である。大きく外方に「ハ」の字形に開く口縁部を持つ。調整は磨耗のため不明。2は甕形土器底部である。外面に縦方向のヘラミガキ、内面は指頭圧痕が認められる。弥生時代中期後半と考えられる。3は壺形土器底部である。

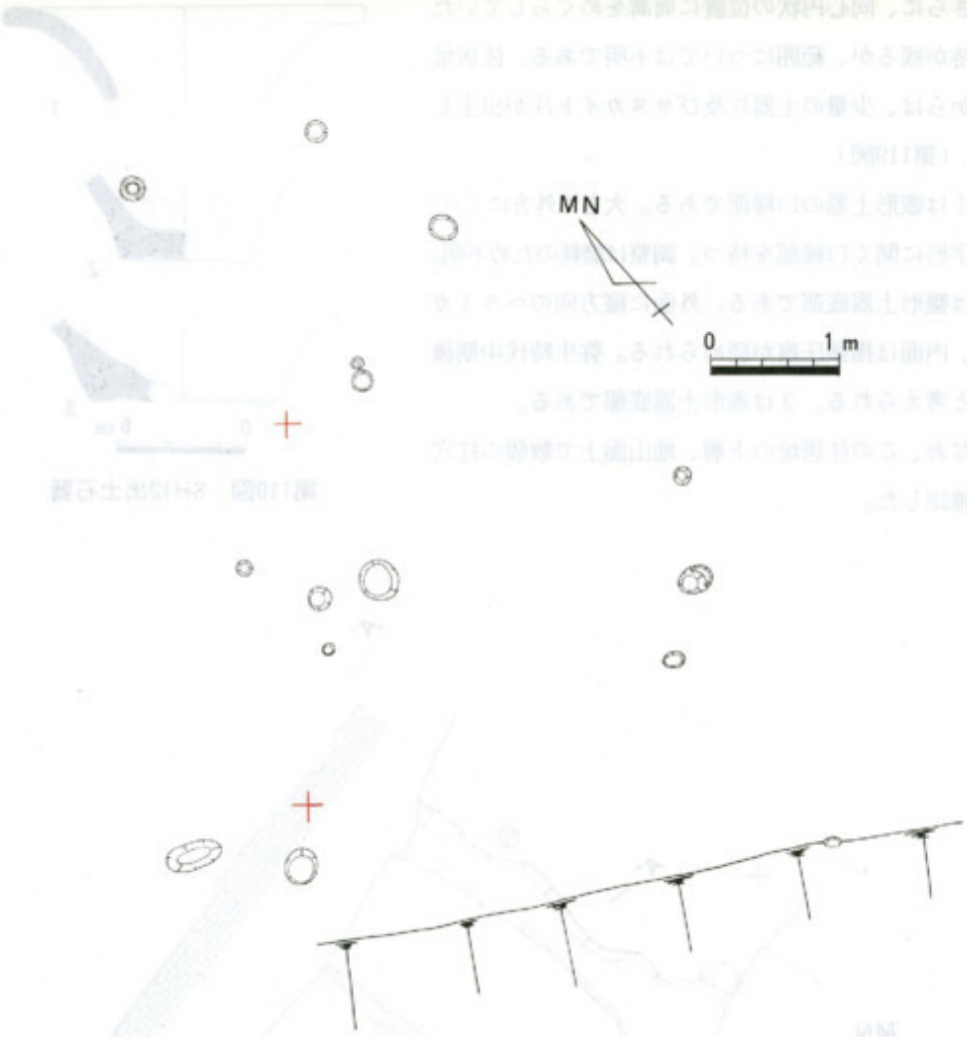
なお、この住居址の下層、地山面上で数個の柱穴を確認した。



第119図　SH12出土石器



第120図　SH12平・断面図



第121図　SH12下層遺構

SB29（第122図）

調査区西部に位置し、ＳＨ09と切りあう。しかしながらその前後関係は不明。

主軸をＮ－41°－Ｅに持つ１間×２間（215×355cm）の掘立柱建物址である。

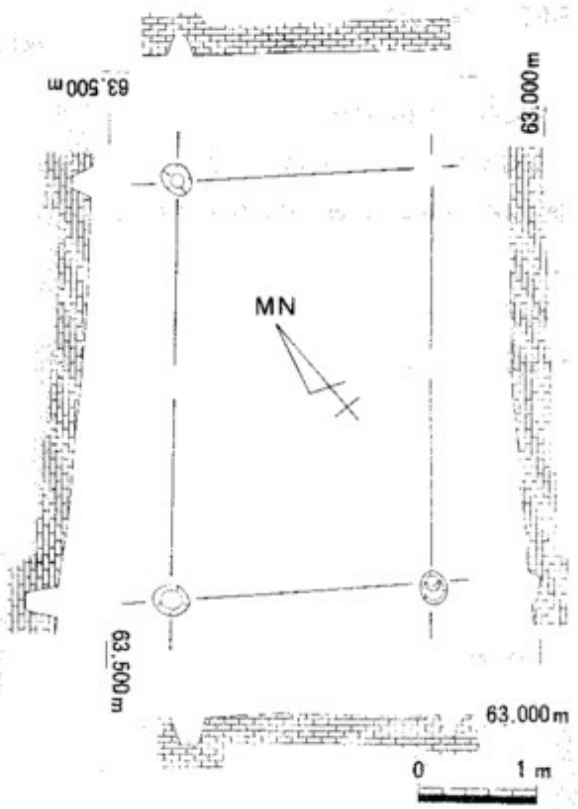
柱穴内からサヌカイト片が出土している。

SB30（第123図）

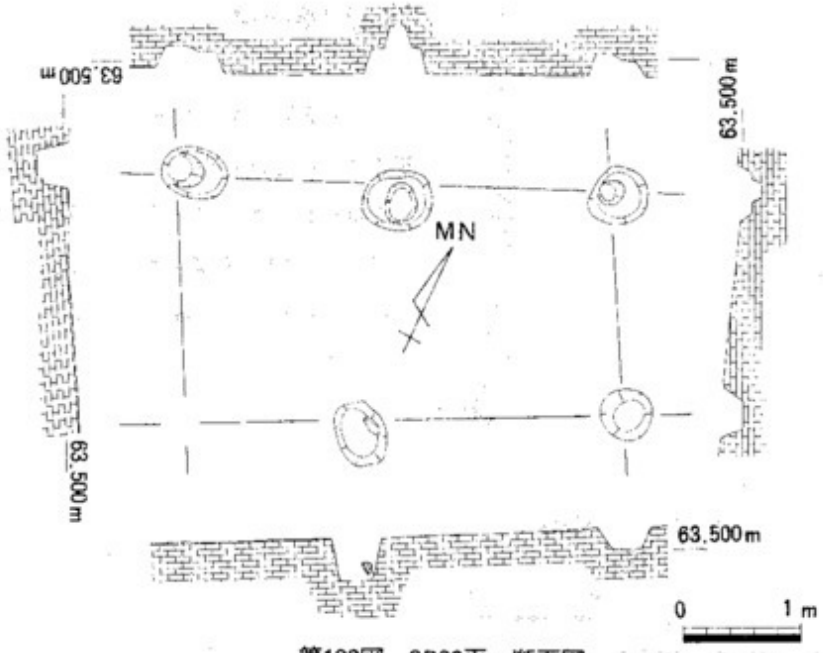
ＳＢ33と平行して検出した。

主軸をＮ－65°－Ｅに持つ１間×２間（220×365cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第122図　SB29平・断面図



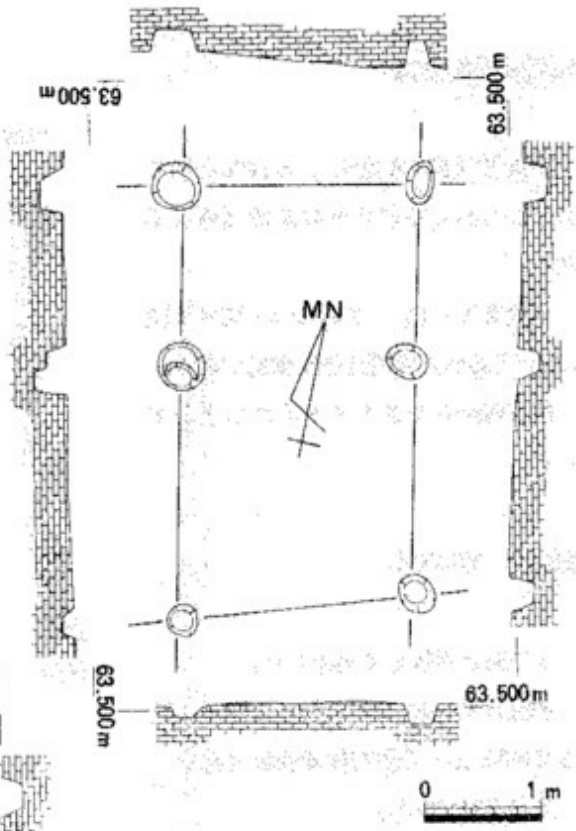
第123図　SB30平・断面図

SB31（第124図）

調査区の西部に位置する。

主軸をS－11°－Eに持つ1間×2間（200×350cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



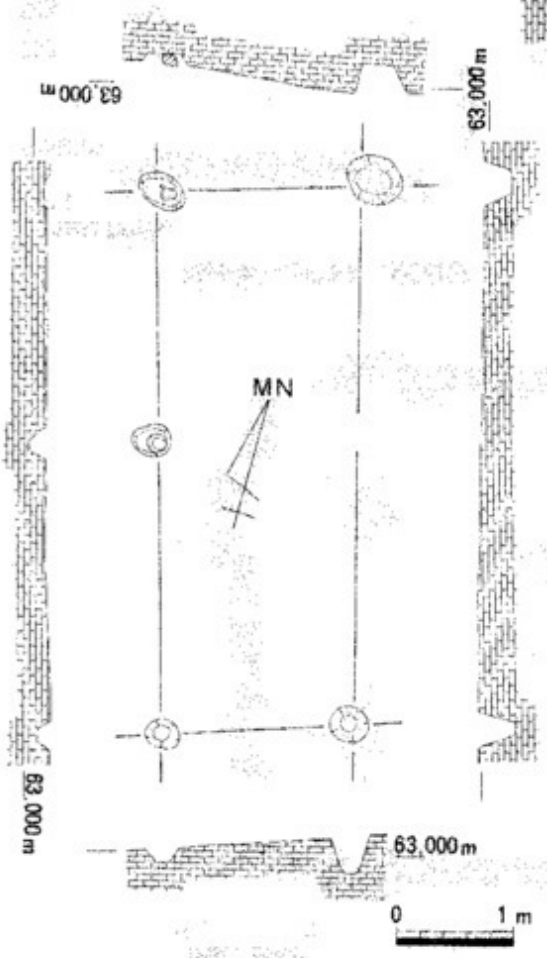
第124図　SB31平・断面図

SB32（第125図）

SB31と切りあって検出したが、その前後関係については不明。

主軸をS－28°－Eに持つ1間×2間（185×460cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。

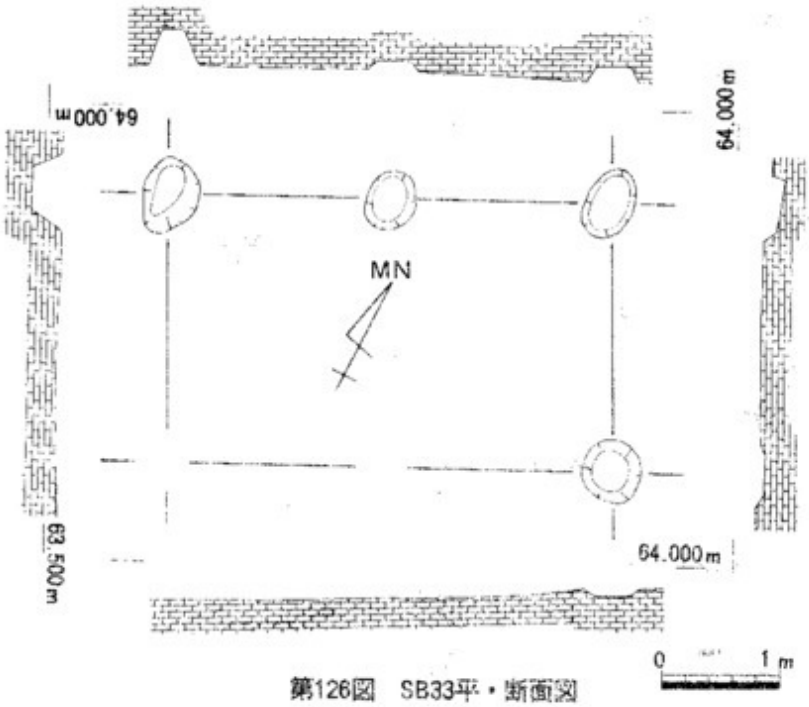


第125図　SB32平・断面図

SB33（第126図）

ＳＢ30と切りあって検出した。

主軸Ｎ－64°－Ｅに持つ１間×２間（230×370cm）の掘立柱建物址である。出土遺物はなし。



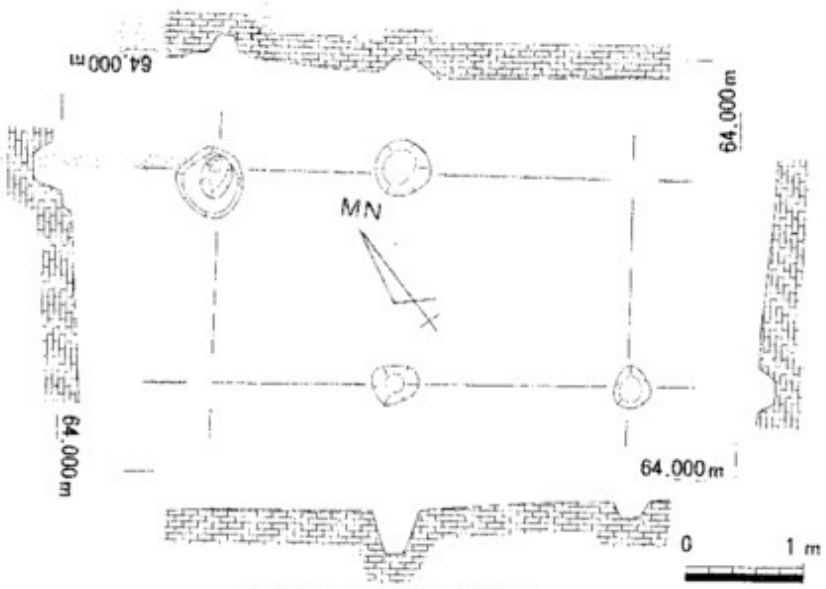
第126図　SB33平・断面図

SB34（第127図）

ＳＢ32の東に位置する。

主軸をＳ－52°－Ｅに持つ１間×２間（185×365cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第127図　SB34平・断面図

SB35（第128図）

ＳＢ34の北東に位置する。

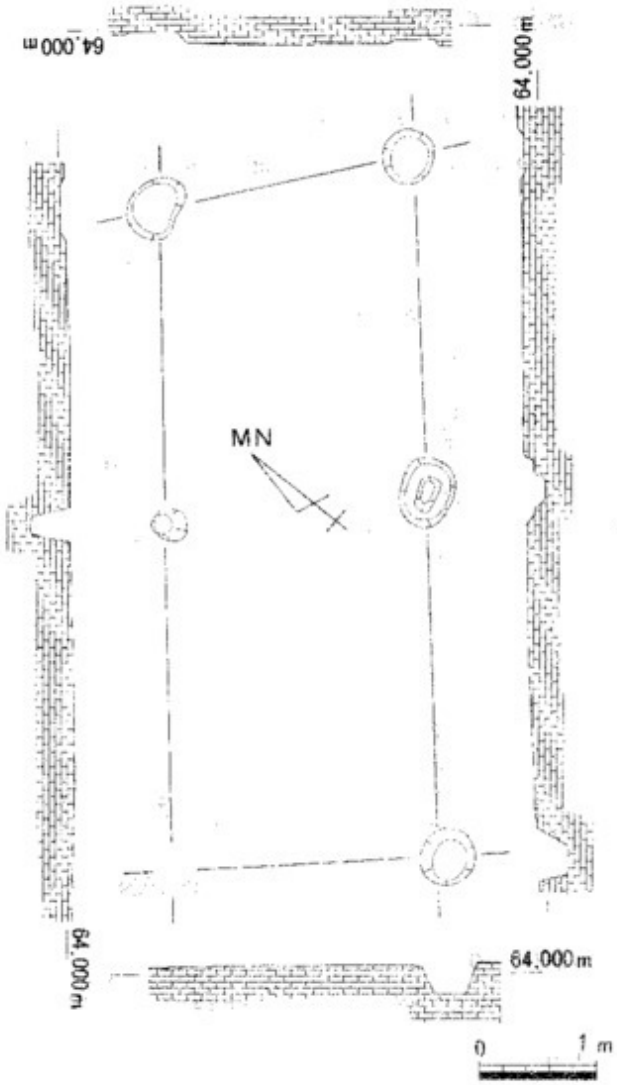
主軸をＮ－49°－Ｅに持つ１間×２間（240×565cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。

SB36（第129図）

ＳＢ37・39と切りあって検出した。しかしながらその前後関係については不明である。　主軸をＮ－42°－Ｅに持つ１間×２間（290×310cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内より弥生土器・サヌカイト片が出土している。



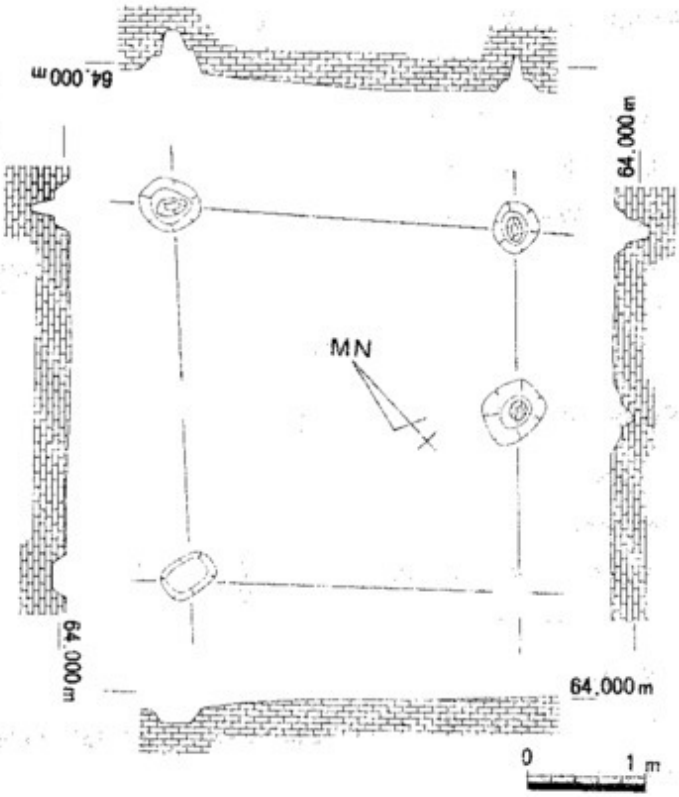
第128図　SB35平・断面図

SB37（第130図）

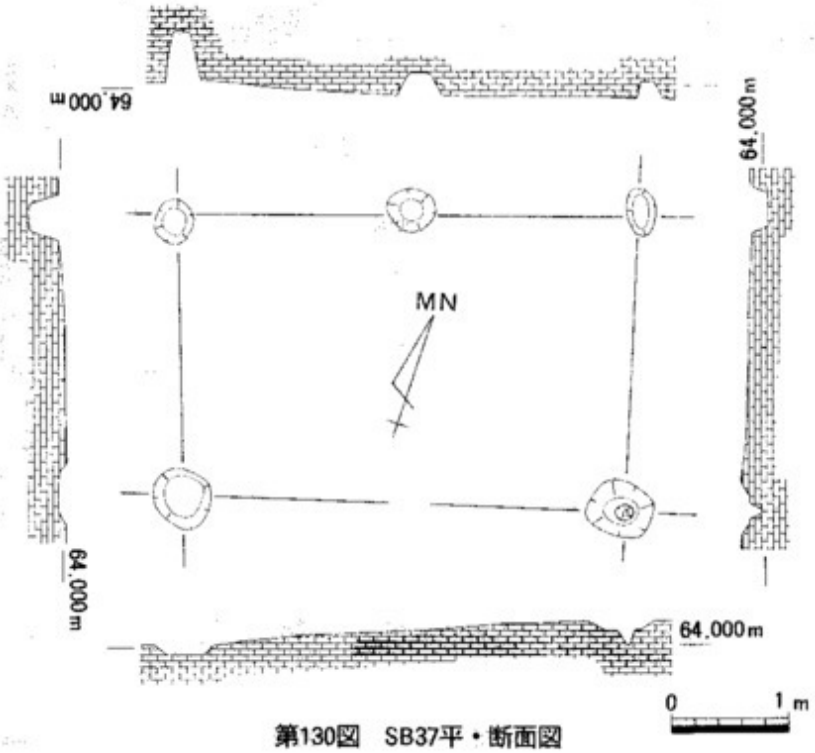
ＳＢ37と切りあうが、その前後関係については不明である。

主軸をＮ－71°－Ｅに持つ１間×２間（230×310cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内より弥生土器・サヌカイト片が出土している。



第129図　SB36平・断面図



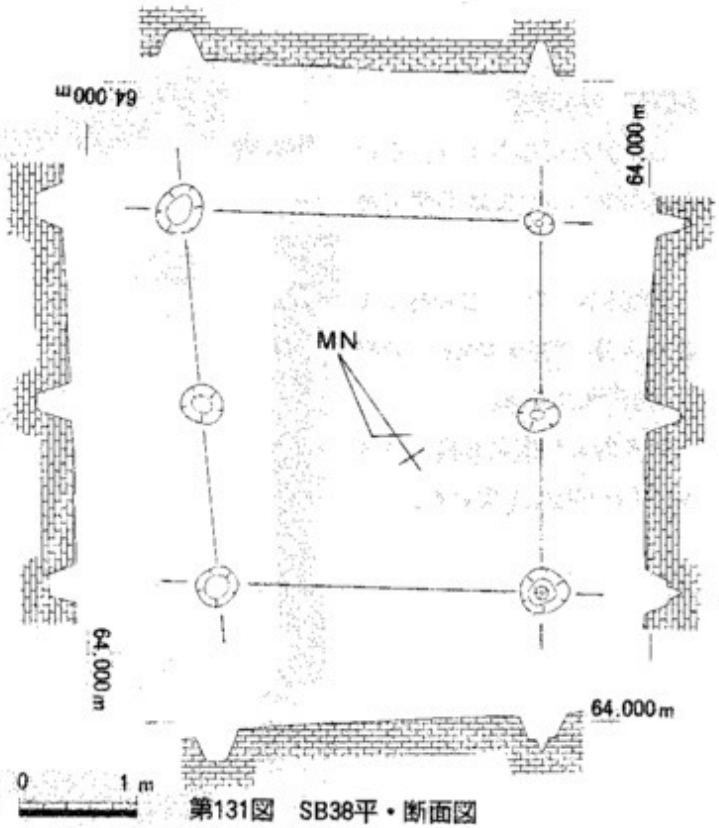
第130図　SB37平・断面図

SB38（第131図）

ＳＢ39の西に位置する。

主軸Ｎ－31°－Ｅに持つ1間×２間（280×305cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内よりサヌカイト片が出土している。



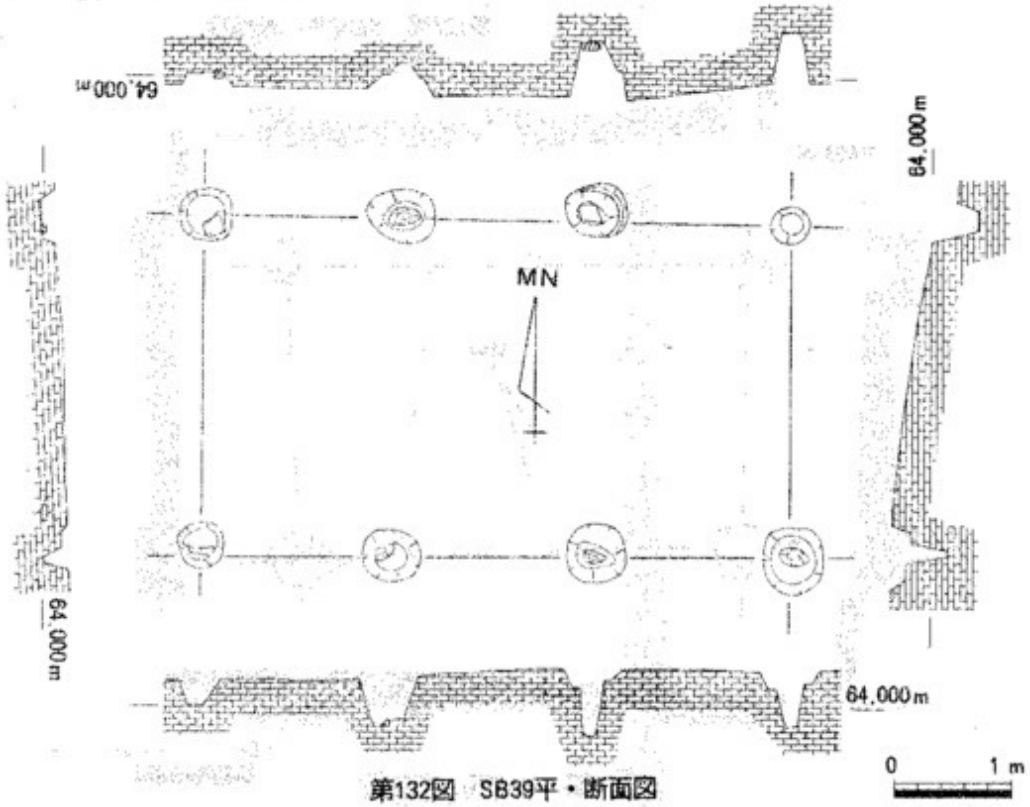
第131図　SB38平・断面図

SB39（第132図）

ＳＢ36と切りあうが、その前後関係は不明である。

主軸をＳ－89°－Ｅに持つ１間×２間（280×505cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



第132図　SB39平・断面図

SB40（第133図）

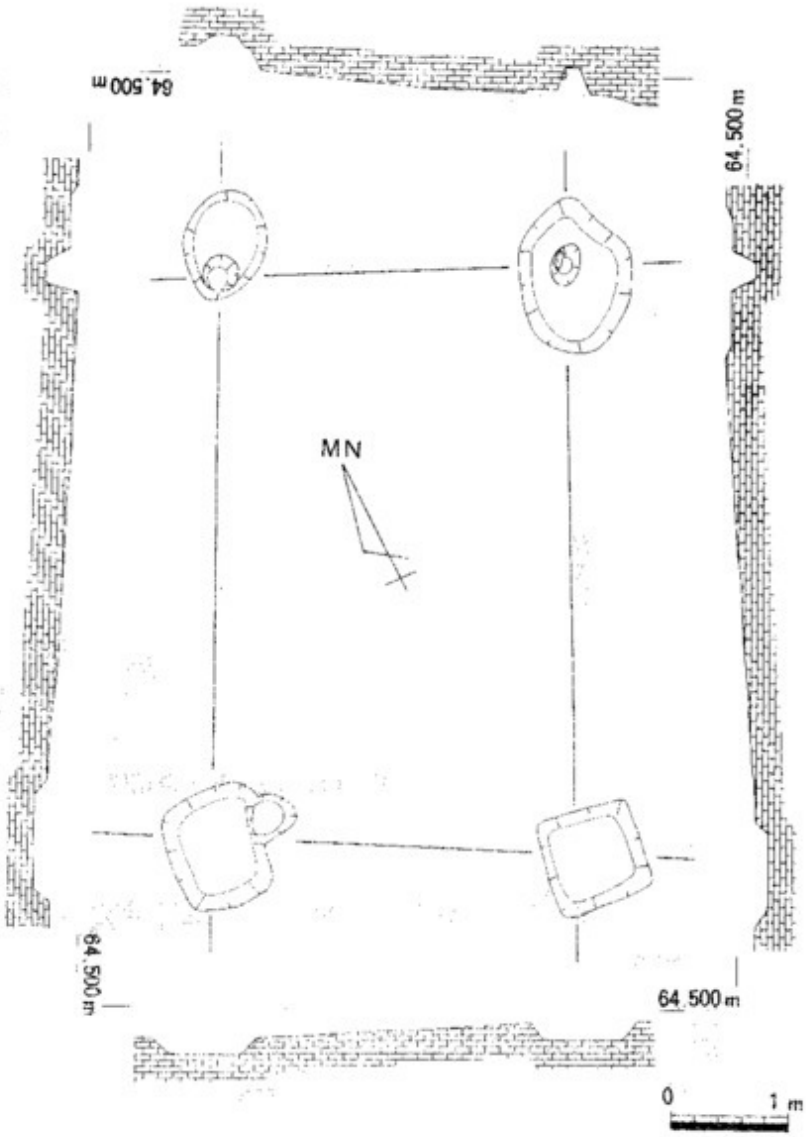
調査区のほぼ中央に位置する。

主軸をN－25°－Eに持つ1間×1間(300×500cm）の掘立柱建物址である。

柱穴の掘り方は約1mと大きく、柱根の残るものも認められる。

他と比べて特異な1棟である。

出土遺物はなし。



第133図　SB40平・断面図

SB41（第134図）

ＳＢ40の東に位置する。

主軸をN－66°－Eに持つ1間×2間(295×320cm）の掘立柱建物址である。

中央に支えであろう柱穴を1本持ち、高床式倉庫と考えられる。

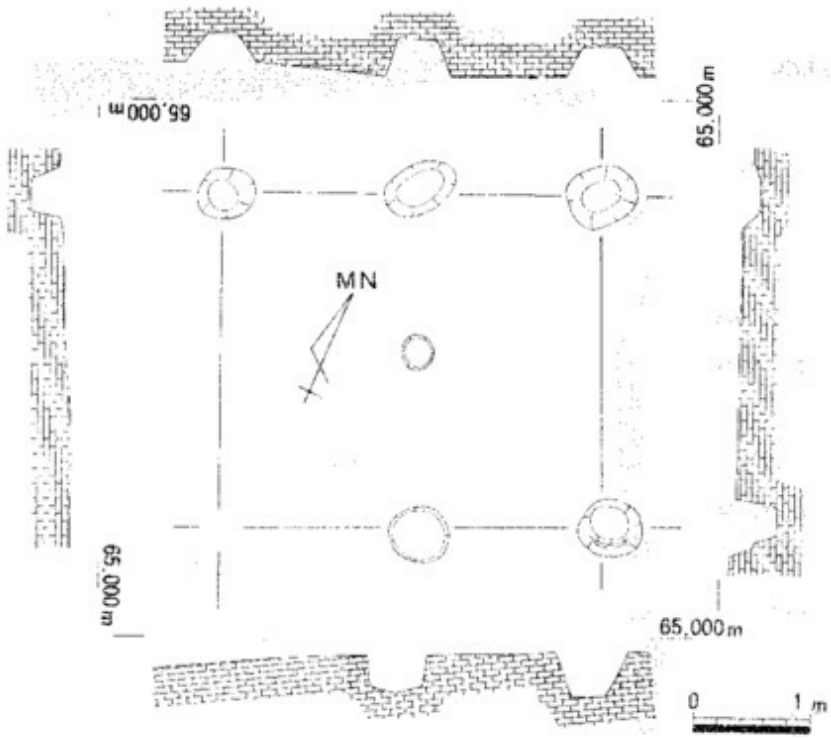
柱穴内からサヌカイト片が出土している。

SB42（第135図）

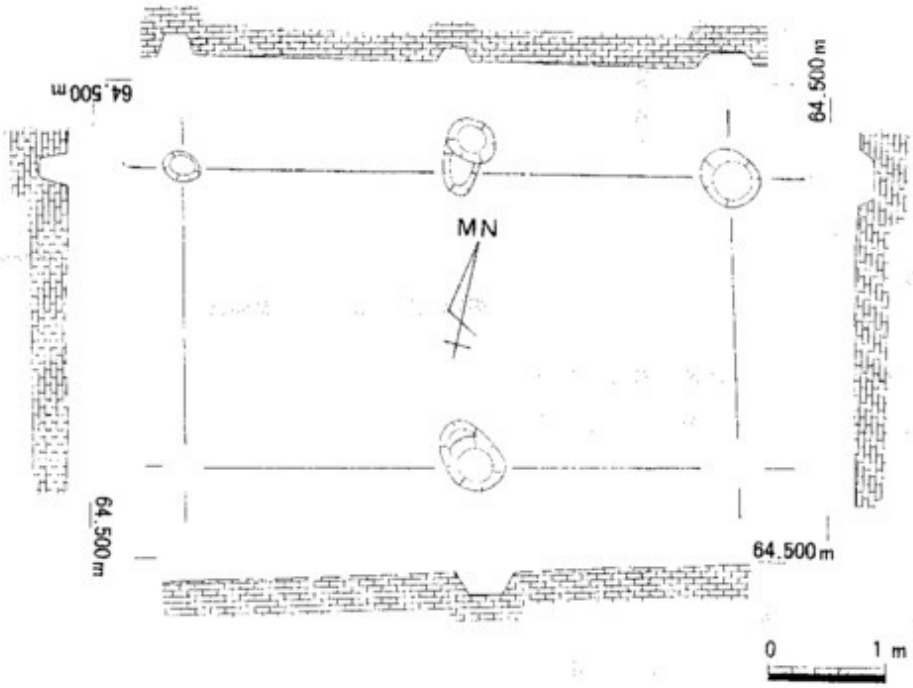
ＳＢ40の南東に位置する。

主軸をN－78°－Eに持つ1間×2間(250×470cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



第134図　SB41平・断面図



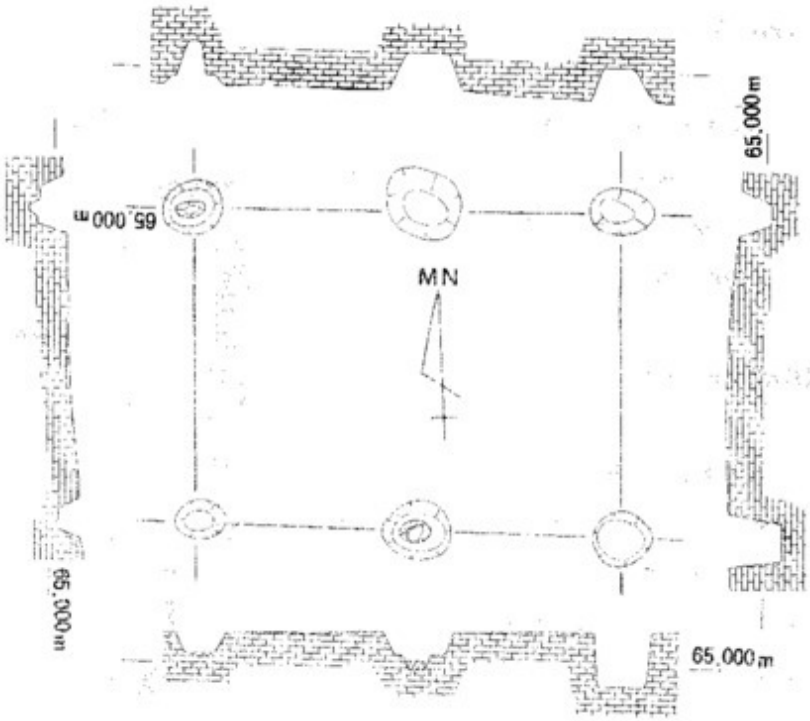
第135図　SB42平・断面図

SB43（第136図）

調査区のほぼ中央に位置する。

主軸をS－87°－Eに持つ1間×2間（280×360cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内からサヌカイト片が出土している。



第136図　SB43平・断面図

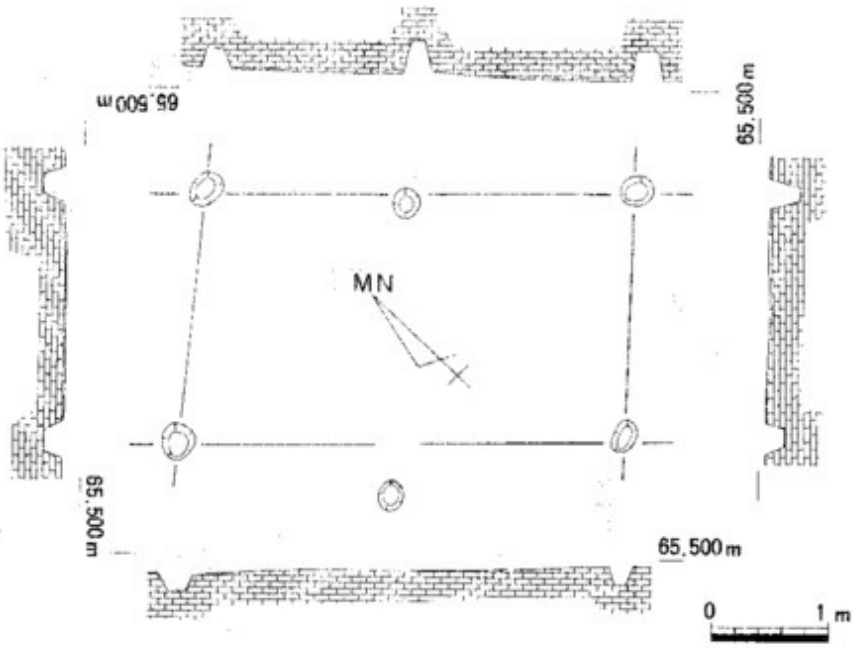
0　1m

SB44（第137図）

SB43の東に位置する。

主軸をS－44°－Eに持つ1間×2間（220×380cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第137図　SB44平・断面図

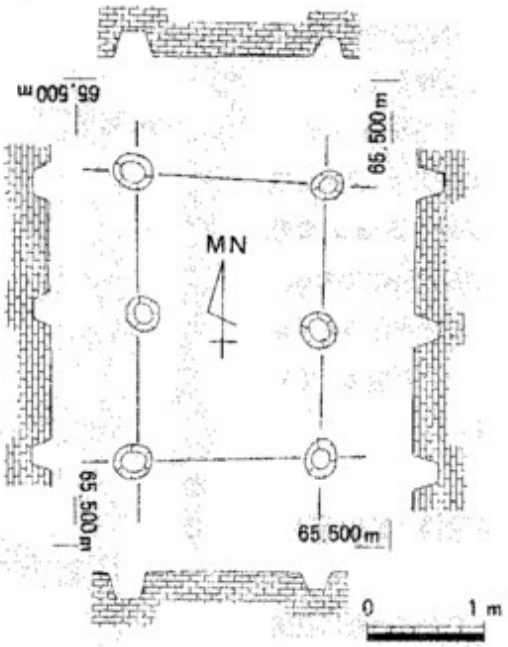
0　1m

SB45（第138図）

1号墳周濠の外側に位置する。

主軸をほぼ南北に持ち、1間×2間（190×250cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



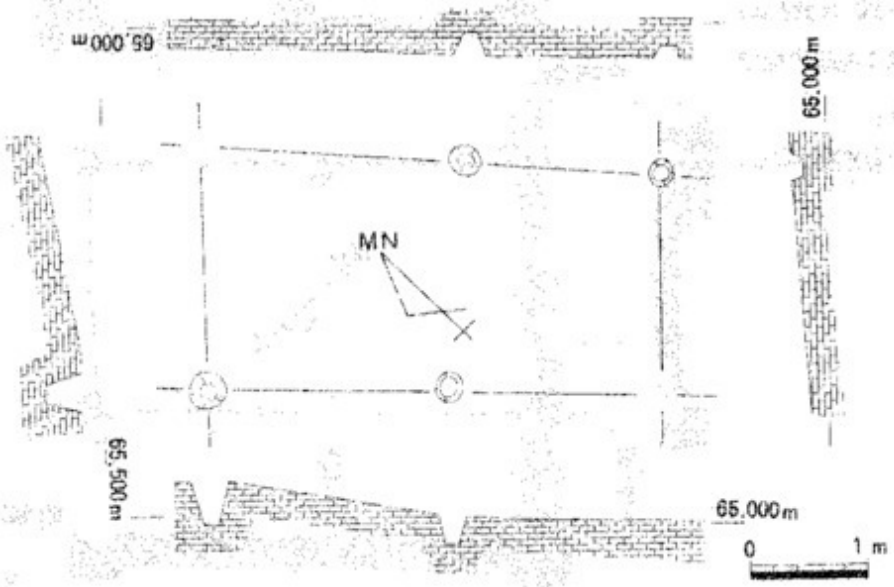
第138図　SB45平・断面図

SB46（第139図）

1号墳周濠内で検出された。

主軸をS－42°－Eに持つ1間×2間（200×390cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



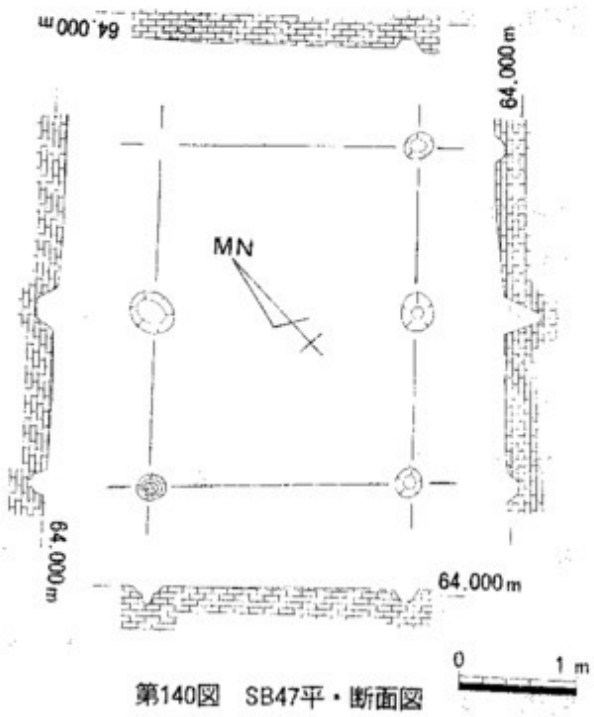
第139図　SB46平・断面図

SB47（第140図）

ＳＢ52と切りあって検出した。

主軸をＮ－43°－Ｅに持つ１間×２間（220×285cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



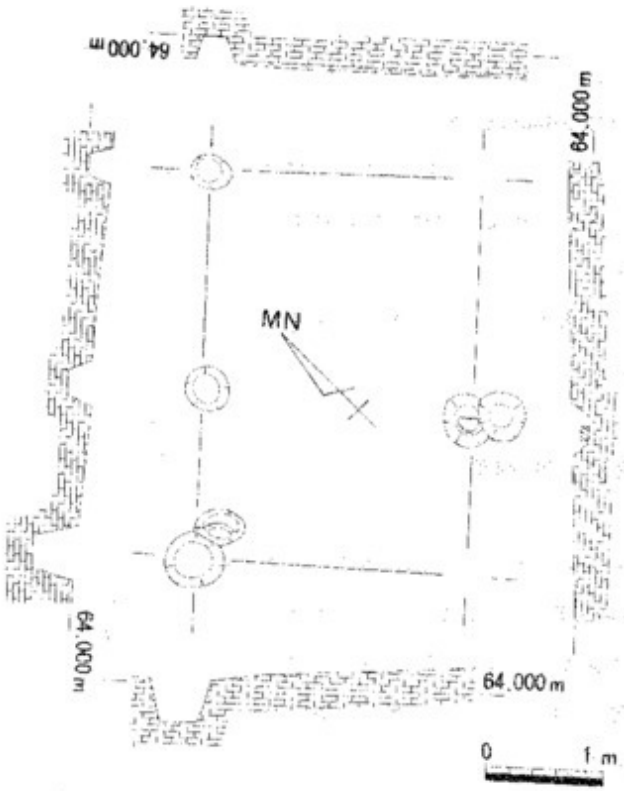
第140図　SB47平・断面図

SB48（第141図）

ＳＢ49・52と切りあって検出したが、その前後関係は不明である。

主軸をＮ－47°－Ｅに持つ１間×２間（230×340cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内からサヌカイト片が出土している。



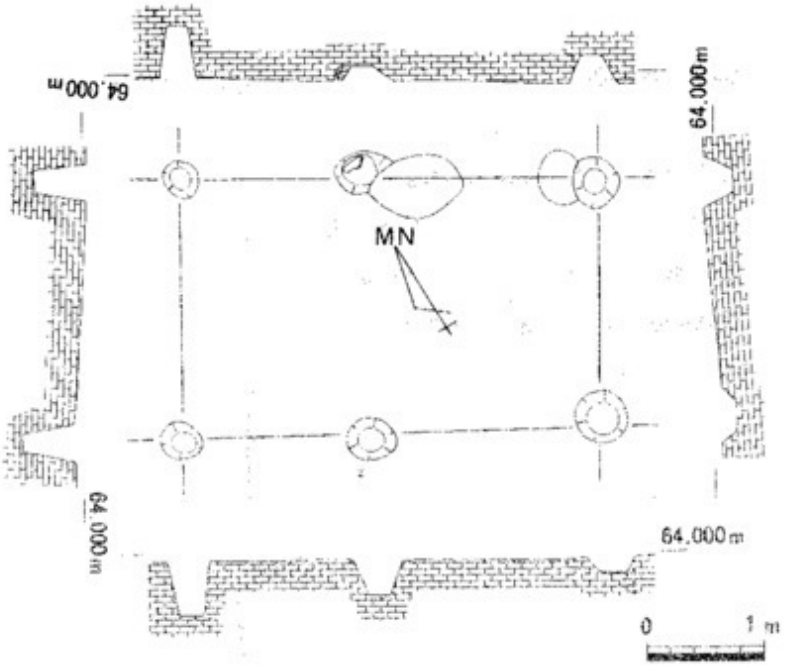
第141図　SB48平・断面図

SB49（第142図）

ＳＢ48・50・51・52と切りあうが、その前後関係は不明である。

主軸をＳ－60°－Ｅに持つ１間×２間（205×355cm）の掘立柱建物址である。

柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



第142図　SB49平・断面図

SB50（第143図）

ＳＢ47・48・49・52と切りあうが、その前後関係は不明である。

主軸をＳ－13°－Ｅに持つ１間２間（185×330cm）の掘立柱建物址である。

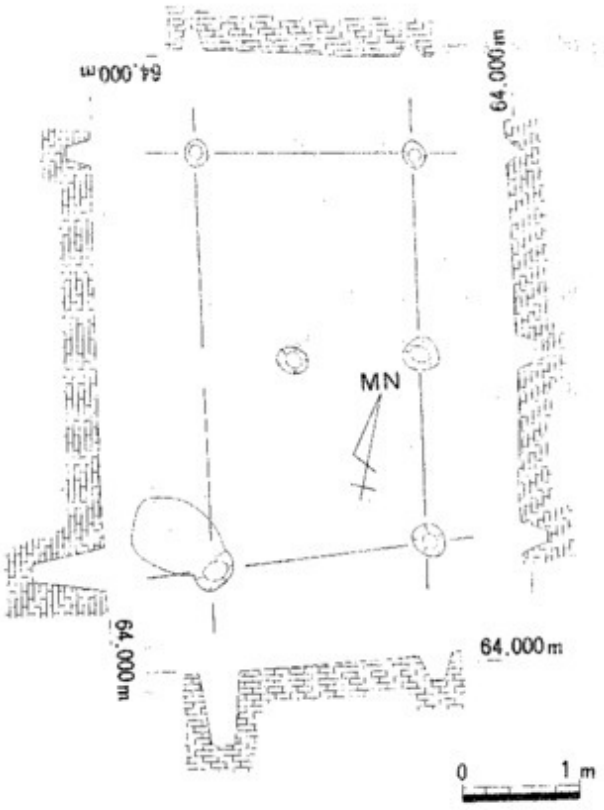
柱穴内からサヌカイト片が出土している。

SB51（第144図）

ＳＢ48・49・52と切りあうが、その前後関係については不明である。

主軸をＮ－41°－Ｅに持つ１間×２間（230×315cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第143図　SB50平・断面図

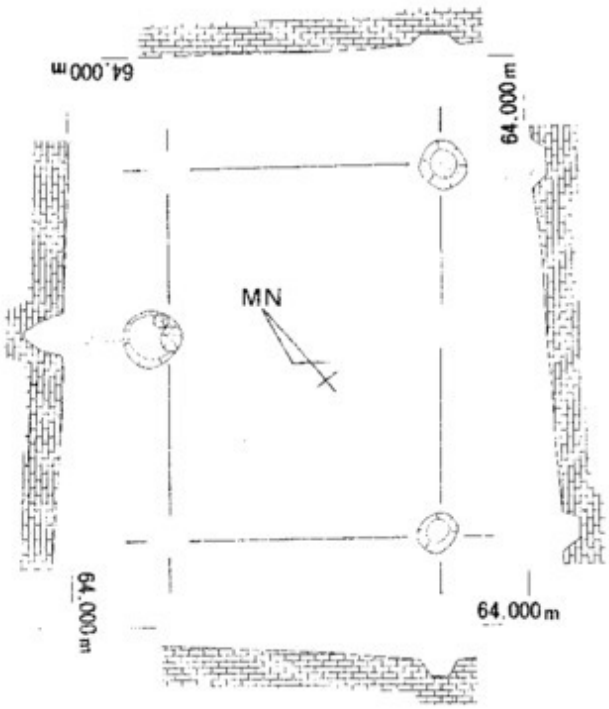
SB52（第145図）

ＳＢ48・49・50・51と切りあうが、その前後関係については不明である。

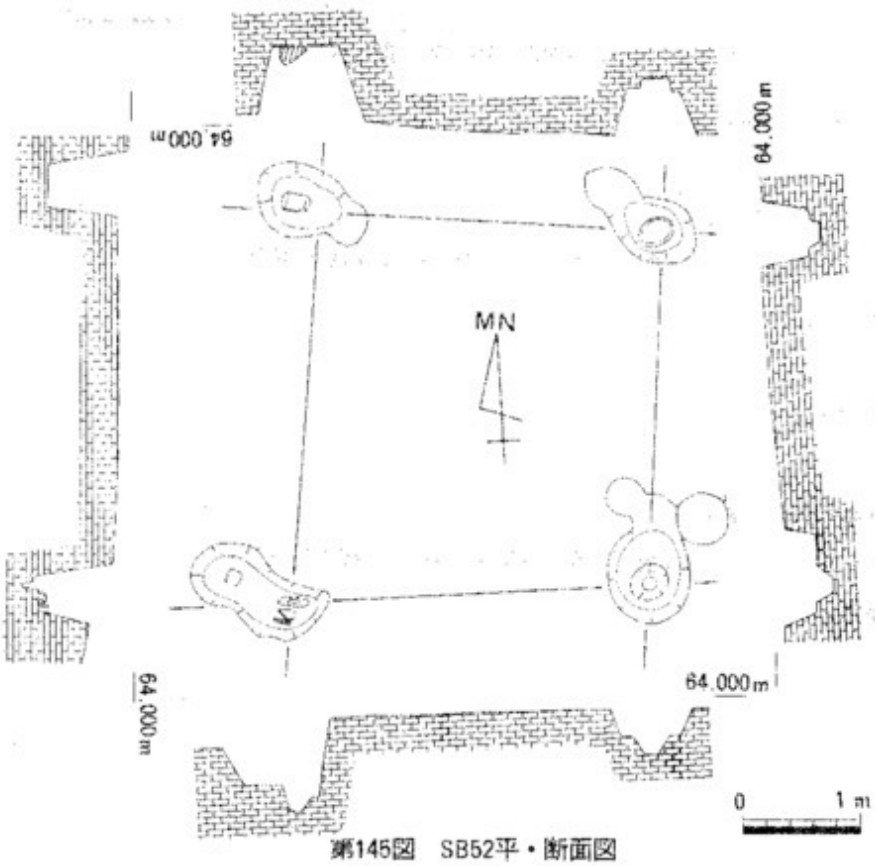
主軸をＳ－87°－Ｅに持つ１間×１間（300×300cm）の掘立柱建物址である。

他の掘立柱建物址に比べて柱穴間距離は長い。

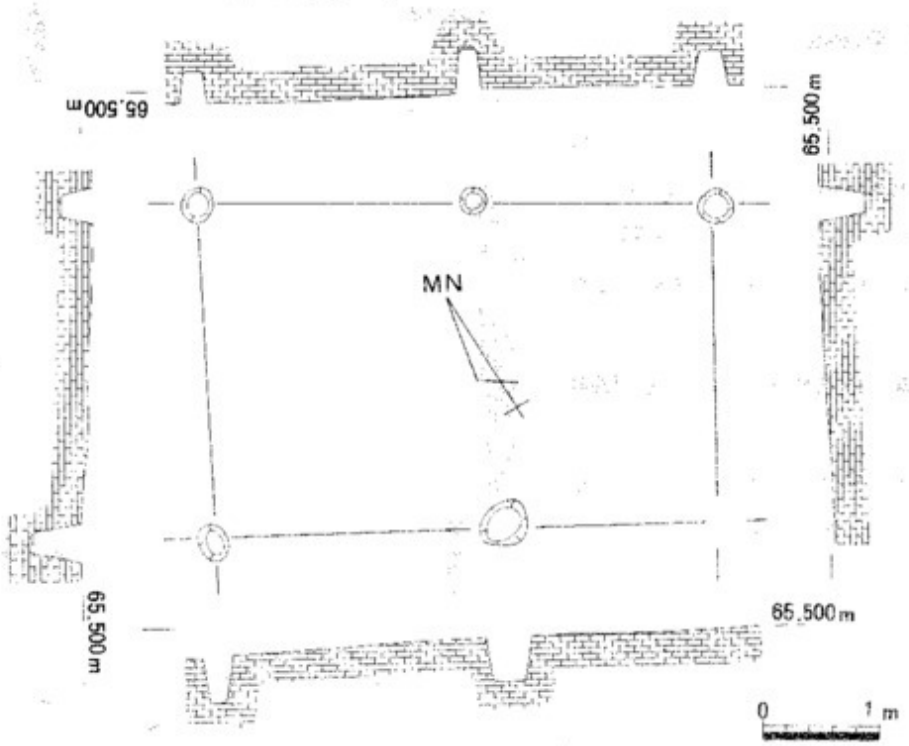
柱穴内から弥生土器・サヌカイト片が出土している。



第144図　SB51平・断面図 0　1m



第145図　SB52平・断面図



第146図　SB53平・断面図

SB53（第146図）

調査区の北部に位置する。

主軸をS－59°－Eに持つ1間×2間（270×445cm）の掘立柱建物址である。

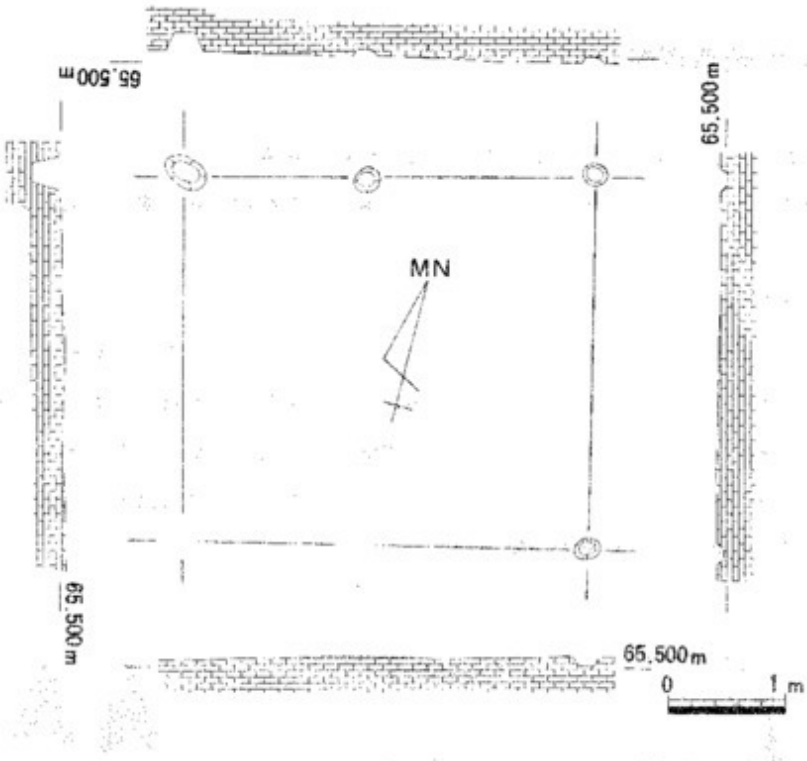
出土遺物はなし。

SB54（第147図）

1号墳周濠外側に位置する。

主軸をN－77°－Eに持つ1間×2間（320×350cm）の掘立柱建物址である。

出土遺物はなし。



第147図　SB54平・断面図

VI区内P－出土遺物

調査区内の柱穴内出土の土器・石器である。(第148図・第149図)

石鏃2点と土器1は同一ピットから出土した。

第148図　VI区内P－出土石器

1は弥生土器の甕形土器である。口縁端部を欠損するが、口縁部が短く「ハ」の字形に屈曲するものである。2は弥生土器・甕形土器底部である。外面はナデ、内面は底部に指頭圧痕が認められる。石器はサヌカイト製である。1は凸基Ⅱ式石鏃である。2は平基式石鏃で、先端部を欠損している。その他、多くの柱穴内から弥生土器片・サヌカイト片が出土している。

第149図　VI区内P－出土土器

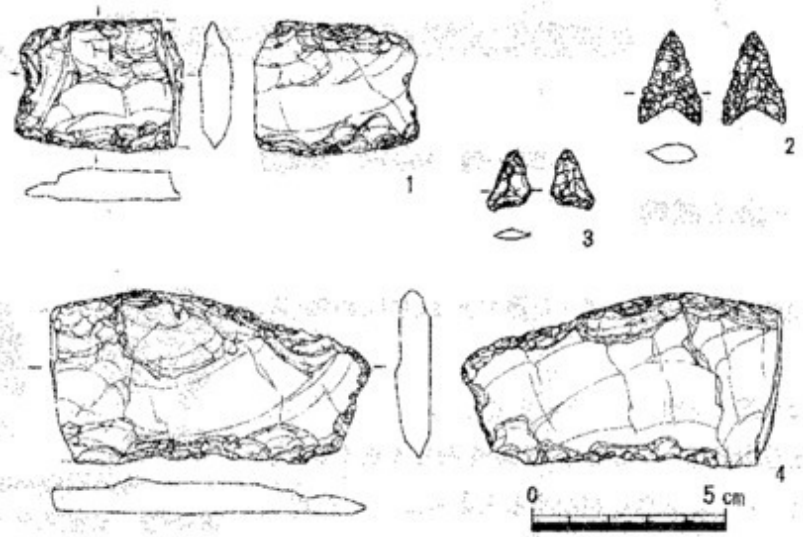
VI区内出土表採資料

調査区内耕土・包含層出土もしくは地山上採集資料である。

VI区内は耕土下地山に至る所が大部分を占め、検出した住居址から考えても大きく削平を受けたものと思われる。

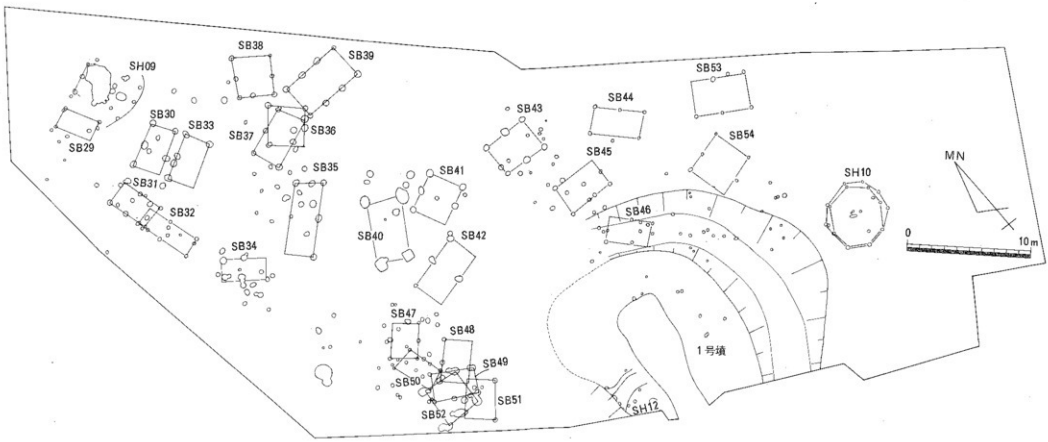
採集した資料は石器のみである。(第150図)

1・4はSB47～52が切りあっている地点の包含層内から出土した。いずれもサヌカイト製の石包丁であるが、1はほぼ半壊する。2は調査区内の北東部分で重機による表土剥離後、地山面上で採集したものである。この1点のみ材質は黒曜石と思われ、やや灰色がかった色調を呈していることから大分県姫島産のものと考えられる。完存している。3は調査区内包含層出土のものである。やや白色風化した小型の石鏃である。



第150図　VI区内出土表採資料

第151図　VI区遺構全体図



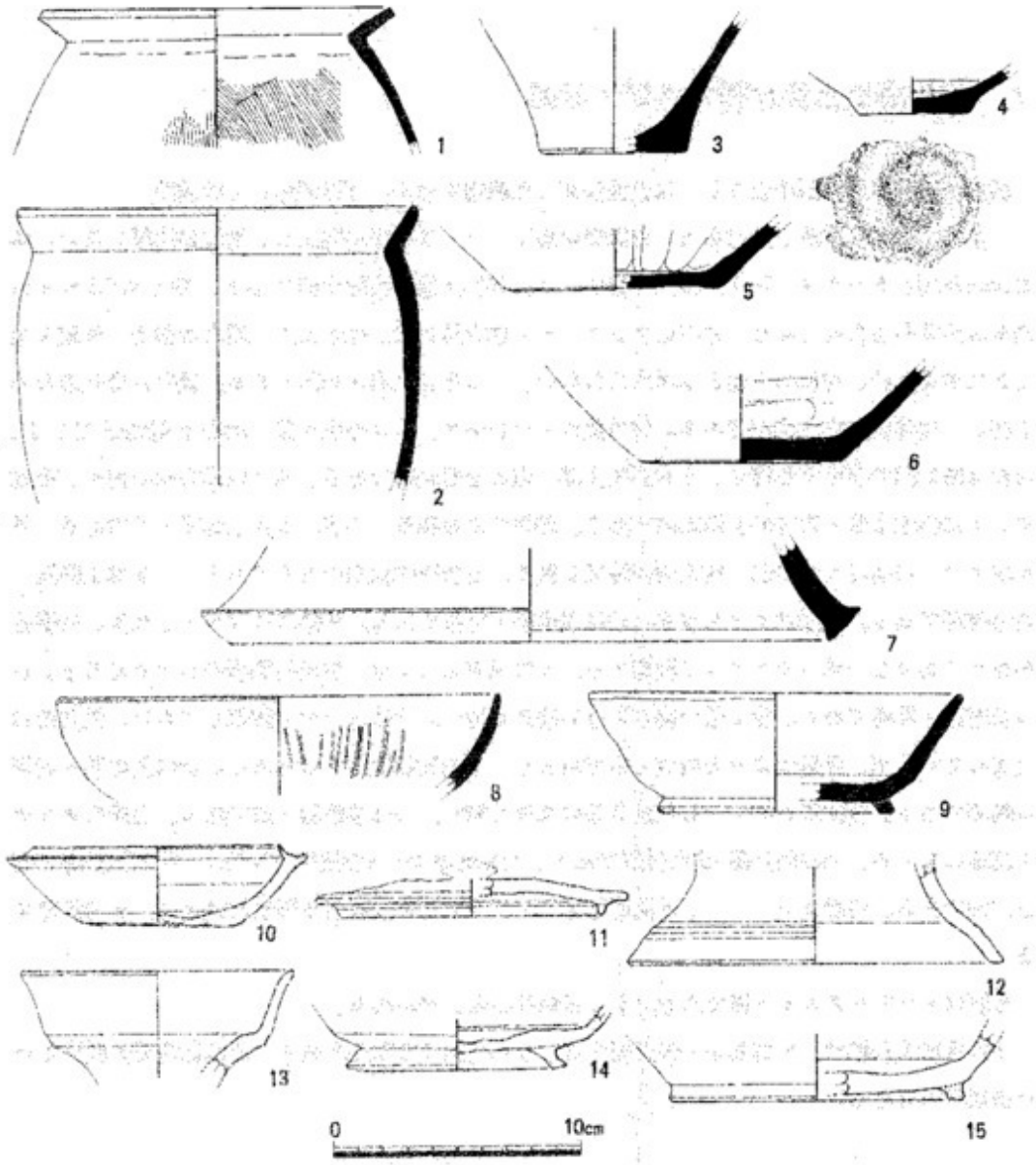
7．包含層出土及び採集土器・石器

調査区全域の包含層出土もしくは表面採集した遺物である。(第152図・第153図)

1は弥生土器・甕形土器である。口縁部は短く「ハ」の字形に屈曲し、端部は比厚しない。体部は内外面ともハケメ（7～8／cm）を施す。2は弥生土器・甕形土器である。胎土に0.5～4㎜程度の角閃石を含んでおり、色調はチョコレート色を呈する。他の出土土器とは胎土・色調を全く異にするため、地元の土器とは考えられない。3は弥生土器・底部である。調整は磨耗のため不明。4は弥生土器・底部である。内外面にナデを施す。5は弥生土器・壺形土器底部である。内面は縦方向の指ナデを施す。6も弥生土器・壺形土器底部である。内面は横方向の指ナデを施す。7は弥生土器・高坏形土器脚部である。磨耗のため調整は不明。8は土師器・坏である。外面はナデ、内面はナデの後、縦方向の暗文を施す。古墳時代後期のものであろう。9は土師器・高台付坏である。外面はナデを施す。10は須恵器・坏身である。全体にヨコナデした後、外面底部をヘラ切りし一部ヘラケズリで調整する。6世紀末もしくは7世紀初等頃のものであろう。11は須恵器・坏蓋である。極く低い扁平に近い器高を持つ。全体にナデで調整しており、天井部は欠損しているが、宝珠つまみを持つものであろう。7世紀前半のものである。12は須恵器・高坏の脚部である。全体にヨコナデした後2条の沈線を施す。13は須恵器・甕である。全体をヨコナデ調整している。14は須恵器・高台付壺である。全体をヨコナデ調整している。15は須恵器・高台付坏である。内面はヨコナデ、外面底部はヘラケズリした後高台を張り付けヨコナデで調整する。

石器はすべてサヌカイト製である。1は石槍状石器と思われる。

2は平基式石鏃で、先端部を一部欠損する。3は凸基Ⅱ式石鏃である。4は基部を欠損するため種類不明である。



第152図　包含層出土及び採集土器実測図

第153図　包含層出土及び採集石器実測図

第4章　まとめ

今回調査した平岡遺跡では、竪穴住居址12棟、掘立柱建物址56棟、溝状遺構3本、柵状遺構1本、土壙墓1基、古墳7基を確認した。

これらは後世の桑畑・果樹園への開墾・攪乱等により残存状況は非常に悪く、遺物の出土量も非常に少ない。

古墳は横穴式石室5基、小竪穴式石室2基が、調査区の南東部に集中して築かれている。

出土遺物より、まず1号墳が6世紀末に築造され、ついでほとんど時期差無く2・3・4・5号墳が築造された。そして、1・3号墳に追葬が行われた頃、6号墳が築造されたものと考えられる。（7号墳については時期不明。）

これら7基の古墳は同一尾根上に立地し、立地・規模の点から1号墳被葬者にこの尾根を墓域とした集団の首長の地位が与えられるものと考えられ、盟主墳を中心として造営された古墳群の集団構成が窺われる。さらに、これから東に延びる尾根上、代の池を挟んで西の尾根上にも古墳は確認されており、これら全てを平岡古墳群として捉えるのか、もしくは東に延びる尾根のみ同じと捉え1号墳を盟主墳とするのかその関連も注目される。

土壙墓は調査区の南端に1基のみ単独で検出した。

出土遺物より平安時代のものと考えられるか、調査区内では同時期と思われる遺構・遺物は確認されていない。調査範囲外に拡がる可能性がある。

竪穴住居址と掘立柱建物址・溝状遺構・柵状遺構は一部を除いて遺物は出土しなかったが、埋土の色調、包含層出土土器等から全て弥生時代中期後半と考えられる。

掘立柱建物址56棟は

(1)　尾根の稜線に対して併行

SB01,03,05,06,07,08,09,10,11,15,16,17,18,19,20,24,27,29,31,32,34,44,46,50,53

(2)　尾根の稜線に対して直交

SB02,12,13,25,28,30,33,35,36,38,40,45,47,48,51

(3)　(1)と(2)の中間

SB04,14,21,22,37,39,41,42,43,54,55

の3類に分類可能で、うち検出状況から(1)が最古と考えられている。同様の状態の住居址はSH03,05,06で、これらは同時期と考えられる。この他の住居址については分類不可能であるが二時期に分けられるものと考えられる。しかしながら、出土遺物でみるかぎり、時期差は認められない。

掘立柱建物址は全て梁間1間、桁行1～4間で、床面積も1棟以外は20㎡以下と小さいことから住居址としての使用は考えられず、全て倉庫と思われる。

うち、SB21,41等のように中央部に柱を持つもの、削平があるものの柱穴の深さが深いものなどは高床倉庫としての使用が考えられる。

この平岡遺跡は阿讃山脈の雲辺寺山系の一支脈の先端部に立地し、河川が流れ、水田可耕地と思われる土地を見下ろす高台に位置する。

同じような立地条件は平岡遺跡より西へ約1.1kmに位置する観音寺市岩鍋遺跡や三豊郡財田町吉田遺跡でもみられ、また多少低い丘陵部ではあるが、やはり周辺部より高い三豊郡山本町高額遺跡、三谷遺跡等弥生時代中期後半の集落址は水の便のよい平野部よりも丘稜部・山麓部に営まれる傾向が窺える。しかし、同時期の高地性集落で著名な紫雲出山遺跡は周辺に水田耕作可耕地を持たず、前述の諸遺跡とは立地条件をやや異にするようである。

この傾向が当時の気候条件によるものか、所謂「倭国の大乱」によるものであるかは不明であるが、平岡出土の石器のうち石鏃が占める割合は72パーセントと高く、うち大型の石鏃は12パーセントを占める。またその種類も紫雲出山遺跡同様凹基式石鏃が主として認められており、出土土器同様共通の傾向が認められる。

さらに注目すべきはVI区内表採の石鏃である。

平岡出土の石器のほとんどがサヌカイト製であるのに対し、この石鏃は大分県姫島産の黒曜石製である。観音寺市樋の口遺跡出土の縄文時代晩期の九州、鐘ケ崎式土器の搬入品、古墳時代中期の丸山古墳・青塚古墳の阿蘇凝灰岩製の石棺の使用等、九州と三豊地方との深い関わりが窺われる一資料である。

土器・石器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	形態・調整・及び手法上の特徴
		口径	器高	底径				
5－2	弥生土器底部			4.0	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面　茶褐色 内面　赤茶色	内外面とも指ナデ、外面底部と体部の境に指頭圧痕が認められる。
5－3	弥生土器底部			9.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面　黄褐色 内面　褐茶色	外面底部と体部は指ナデ。以外は不明。
5－4	弥生土器甕				2㎜以下の砂粒を含む。	不良	黄褐色	不明。
5－5	弥生土器底部			10.4	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面　赤褐色 内面　黄褐色	不明。
8－1	須恵器短頸壺蓋		2.4	7.8	細砂粒を含む。	良好	青灰色	全体にヨコナデ。外面天井部はヘラケズリ。
8－2	須恵器短頸壺	6.0	7.4		1㎜以下の砂粒を含む。	良好	灰色	全体にヨコナデ 外面底部はヘラケズリ。体部ほぼ中央に一本の沈線を持つ。ロクロ回転方向は時計回り。
8－3	須恵器平瓶	10.6			微砂粒を含む。	良好	淡灰色	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はカキメ、内面はヨコナデ。
17－1	須恵器坏身	10.8	3.0		微砂粒を含む。	不良	灰白色	全体にヨコナデ。内面底部は仕上げナデ。底部はヘラ切りの後、外面底部との境にヘラケズリ。
17－2	須恵器坏身	10.2	2.8		1㎜以下の砂粒を含む。	良好	灰色	全体にヨコナデ。内面底部は仕上げナデ。外面底部はヘラ切り。
17－3	須恵器坏身	10.2	3.3		1㎜以下の砂粒を少量含む。	やや不良	淡灰色	全体にヨコナデ。内面底部は仕上げナデ。外面底部はヘラケズリ。ロクロ回転方向は時計回り。
17－4	須恵器坏身	10.0	3.2		1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	灰色	全体にヨコナデ。内面底部は仕上げナデ。外面底部はヘラケズリ。ロクロ回転方向は時計回り。
17－5	須恵器坏蓋		2.7	10.8	1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。外面天井部はヘラケズリの後つまみを付ける。内面天井部は仕上げナデ。
17－6	須恵器坏蓋		2.3	10.9	1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。外面天井部はヘラケズリの後つまみを付ける。内面天井は仕上げナデ。ロクロ回転方向は時計回り。
17－7	須恵器コップ形土器	8.4	5.3		1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。内面底部は仕上げナデ。外面底部はヘラケズリ。
17－8	須恵器高坏	9.2	8.9	6.6	1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。坏部に波状文、列点文を施す。
17－9	須恵器甕	24.0			微砂粒を含む。	良好	青灰色	全体にヨコナデ。

挿図番号	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	形態・調整・及び手法上の特徴
		口径	器高	底径				
17－10	須恵器壺	15.4			微砂粒を含む。	良好	灰色	外面口頸部はタタキの後ヨコナデ。体部はカキメ。内面はヨコナデ。
17－11	須恵器壺			6.0	微砂粒を含む。	良好	灰色	内外面ともヨコナデ。外面底部はヘラ切り。
17－12	須恵器高杯蓋		5.4	17.9	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 茶赤色 内面 暗灰色	全体にヨコナデ。内面天井部は仕上げナデ。外面天井部はヘラケズリの後つまみを付ける。ロクロ回転方向は時計回り。
17－13	須恵器盤	25.8			微砂粒を含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。外面はヘラケズリ。
23－1	土師器壺				微砂粒を含む。	普通	淡黄褐色	不明。
23－2	須恵器短頸壺蓋		3.0	10.2	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	暗灰色	全体にヨコナデ。外面はヘラケズリ。
23－3	須恵器高坏			8.1	微砂粒を含む。	良好	淡灰色	全体にヨコナデ。
23－4	土師器甕	25.0			2㎜以下の砂粒を含む。	普通	淡黄褐色	外面口縁部はヨコナデ。体部はハケメ。内面口縁部はハケメ、体部は指頭圧痕。
27－1	須恵器坏	12.8			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	灰白色	全体にヨコナデ。外面底部はヘラケズリ。ロクロ回転方向は時計回り。
27－2	須恵器平瓶	5.8	12.5		2㎜以下の砂粒を含む。	不良	白灰色	不明。
39－1	須恵器高台付皿				2㎜以下の砂粒を含む。	普通	暗灰色	全体にヨコナデ。外面底部はヘラ切り。内面見込み部は指頭圧痕。
49－1	弥生土器甕	20.6			1㎜以下の砂粒を含む。	良好	褐茶色	外面はナデ。内面は不明。
49－2	弥生土器甕	20.2			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	外面・内面体部上半及び口縁部はナデ。内面体部下半は指頭圧痕。
49－3	弥生土器底部			6.6	2㎜以下の砂粒を含む。	普通	外面 赤褐色 内面 黒褐色	外面は縦方向のヘラ磨き。底部はナデ。内面は板状のものでナデ。
54－1	弥生土器底部			10.8	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面赤褐色 内面 乳黄褐色	不明。
56－1	弥生土器ミニチュア壺			2.0	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	乳黄褐色	外面は指頭圧痕。

挿図番号	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	形態・調整・及び手法上の特徴
		口径	器高	底径				
58－1	土師器坏			7.3	微砂粒を含む。	良好	暗灰色	底部はヘラ切り。
58－2	土師器坏	10.3	3.1	6.3	微砂粒を含む。	良好	褐茶色	底部はヘラ切り。
60－1	弥生土器壺	16.9			2㎜以下の砂粒を含む。	普通	淡赤褐色	内外面ともナデ。口縁端部は斜線文。
60－2	弥生土器壺	14.6			2㎜以下の砂粒を含む。	普通	外面 赤褐色 内面 黒褐色	不明。
60－3	弥生土器壺				2㎜以下の砂粒を含む。	普通	外面 赤褐色 内面 乳黄褐色	外面はナデ。以外は不明。
60－4	弥生土器壺				2㎜以下の砂粒を含む。	良好	乳黄褐色	不明。内面口縁部に斜格子文の痕跡が残る。
60－5	弥生土器鉢形土器の脚			14.2	2㎜以下の砂粒を含む。	普通	淡赤茶色	外面はナデ。
60－6	弥生土器底部			4.0	砂粒をほとんど含まない。	良好	淡黄褐色	内面下半・外面底部はナデ。
60－7	弥生土器底部			5.4	2㎜以下の砂粒を含む。	普通	淡黄褐色	不明。
60－8	弥生土器底部			9.6	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	黒褐色	外面底部はナデ。体部はヘラ磨きの後ナデ。内面はナデ。
60－9	弥生土器底部			8.0	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	乳黄褐色	外面底部はナデ。内面は指頭圧痕。
60－10	弥生土器底部			7.8	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	乳黄茶色	外面はナデ。内面は指ナデ。
60－11	弥生土器底部			4.4	2㎜以下の砂粒を含む。	普通	外面 茶褐色 内面 黄褐色	内面は板状のものでナデ。
61－1	弥生土器甕	24.2			2㎜以下の砂粒を含む。	普通	外面 黒褐色 内面 赤色	内面口縁部はナデ。以外は不明。
61－2	弥生土器底部			5.0	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	赤色 黒褐色	内面下半は指頭圧痕。外面体部はナデ。
62－1	弥生土器底部			4.4	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 茶褐色 内面 淡茶褐色	外面底部は指ナデ、体部はヘラ磨き、内面は指ナデ。
62－2	弥生土器底部			11.2	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶黄色	内面は指ナデ、外面は不明。

挿図番号	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	形態・調整・及び手法上の特徴
		口径	器高	底径				
66－1	弥生土器ミニチュア壺			4.1	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡赤茶色 淡黄褐色	外面底部はナデ、体部下半は指頭圧痕、口縁部はナデ、内面は板状のものによるナデ。
73－1	弥生土器鉢	23.0			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黒褐色	不明。
73－2	弥生土器甕			7.4	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	暗茶色	内外面とも指頭圧痕。
73－3	弥生土器底部			9.1	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶色	内面底部は指頭圧痕。
76－1	弥生土器壺	16.6			1㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 乳黄褐色 内面 黒色	外面はナデ。口縁端部に凹線文。内面は斜格子文。
76－2	弥生土器壺	14.9			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黒褐色	外面口頸部に斜線文。内面口縁部に斜線格子文。口縁部に二個一対の穿孔。
76－3	弥生土器壺			6.5	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	褐色 赤褐色	内面下部は指頭圧痕の後縦方向の板ナデ、中央部は横方向の板ナデ、上部は指ナデ。外面は不明。
76－4	弥生土器底部			8.7	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	褐色 赤褐色	不明。
76－5	弥生土器底部			8.7	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	黄褐色	不明。
76－6	弥生土器底部			6.1	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶赤色	不明。
79－1	弥生土器高坏	39.6			3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	不明。
79－2	弥生土器甕	15.9			3㎜以下の砂粒を含む。	良好	茶褐色	外面はナデ。口縁端部は凹線文。
79－3	弥生土器高坏				3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	不明。
79－4	弥生土器底部			7.2	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 赤茶色 内面 淡黄褐色	不明。
79－5	弥生土器壺				1㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡褐黒色	5本の凹線文。その間の凸部に刻み目。
79－6	弥生土器底部			5.4	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡褐黒色	外面は縦方向の板ナデ。内面は横方向の板ナデ。
91－1	弥生土器底部			5.4	微砂粒を含む。	良好	外面 赤茶色 内面 淡茶褐色	外面体部はヘラ磨き。二個の穿孔、内面までは届いていない。底部はナデ。内面底部は指頭圧痕。

挿図番号	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	形態・調整・及び手法上の特徴
		口径	器高	底径				
91－2	弥生土器鉢				3㎜以下の砂粒を含む。	良好	茶色	内面底部・外面脚部と鉢部との境は指頭圧痕。
100－1	弥生土器壺	13.4			3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶黄色	外面口頸部はナデ、1条の貼付突上に刻み目。口縁端部は斜線文。内面口縁部は斜格子文?
100－2	弥生土器壺	16.5			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面口頸部に刺突文を施した張付突帯。口縁端部は斜線文。内・外面はナデ。
100－3	弥生土器ミニチュア壺			4.4	4㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黒褐色	外面体部下半は板ナデ。外面口頸部は刺突文を持った張付突帯。
100－4	弥生土器壺	14.9			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	口縁端部は斜線文。外面口頸部は刺突文を持った貼付突帯。
100－5	弥生土器底部			7.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	茶色	外面・内面はナデ。内面底部は指頭圧痕。
101－1	弥生土器底部			7.0	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 赤茶色 内面 淡茶褐色	内面は指ナデ。
101－2	弥生土器底部			5.3	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶色	外面はヘラ磨き。内面底部は指頭圧痕。
101－3	弥生土器底部			6.8	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 淡黄褐色 内面 赤茶色	内外面ともナデ。
101－4	弥生土器底部			6.1	4㎜以下の砂粒を含む。	良好		内面底部は指頭圧痕。
101－5	弥生土器底部			9.8	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡茶色	外面は板ナデ。内面底部は指頭圧痕。
101－6	弥生土器底部			5.6	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡赤色 淡黄褐色	不明。
101－7	弥生土器底部			10.2	2㎜以下の砂粒を含む。	良好	赤茶色	内面は指ナデ。
101－8	弥生土器底部			5.6	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	外面 淡赤色 内面 褐色	内面は指ナデ。
101－9	弥生土器壺	19.4			2㎜以下の砂粒を含む。	良好	茶色	外面・内面体部はナデ。外面口頸部は指頭圧痕。
101－10	弥生土器壺				3㎜以下の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	頸部に刺突文を持った貼付突帯。